

これはその後、前部が開通して、現在では武術が家術に加算するところから以下の部分が残つてゐる。この論巻の跋文によると、その跋文の箇所を元禄十四年に修補した際、既に現存の如く三巻となつて、前部が開通してゐる。然るに「奥州後三年記」には、現存の論巻に開通してゐる部分即ち後部からの詞書を採録してあるから、詞書を抜き集めて物語の體裁にしたのは、元禄十四年以前であることは明かである。「諸本」論巻物と物語本とがあるが、論巻物では池田侯爵家蔵の原本の外に、後部が東京帝室博物館にある。また考古学会から「後三年軍記繪巻」として、建築工芸美術協会から「後三年合戦繪巻」として、複製刊行されてゐる。なほ帝國圖書館には、「後三年繪巻物」として、これを六巻に撰集した繪巻がある。奥書によると、伊勢貞丈が新井家の所蔵本を白石の錦旗から借り、別に義本を得て校合し、安藤定憲をして撰集せしめたものである。内容は原作と同じく前部に開通があり、三巻物を六巻に分けてあるだけである。物語本たる「奥州後三年記」三巻の寫本としては、明和十一年東京帝國大學本がある。明和本は、伊勢貞丈の校本で明和七年の書寫にかゝり、古い繪巻の詞書によつて校合してある。諸書類纂本には、整本と經濟雜誌社發行の活版本とがある。

義光はこれを聞いて兒を授けんがため、官を辭して奥州に下り、義家と協力して金澤の橋を攻めたが、敵の備が嚴重で容易に陷ちなかつた。然るに秀武は、清衡と共に志を馳じて義家に降り、長閑の策を献じたので、武衡は義光を介して降を請うたが義家は許さなかつた。寛治五年(實元元年)十一月に至り、城中飢寒の苦しみ堪へず、武衡家術等が自ら橋を焼いて逃れたのを、義家の兵が追擊してこれを獲殺し、争亂が平定した。よつて義家は朝廷にこの旨を奏し、有功の將士に賞を行はんとを請うたが、朝廷はこれを私闘と見做して義家の請を許さなかつた。

實元和漢漢語文を以て、何等の技巧を施さず平板に叙してあるから、他の撰記物語に見るやうな四六辭藻の潤澤は乏しいが、簡朴にして眞率な趣がある。「影響」分量も少く叙寫も平板で詩的興趣が乏しいためか、餘り廣くは流布しなかつたらしいが、後代文學への多少の影響は認められる。古澤増明の「後三年」(淨觀の「後三年奥州軍記」(皇本)合巻の「後三年手録義家」(六巻)市川三升作)川口貞直、實録の「後三年記」(十六巻)などの如き、即ちこの例である。「高木武」

九年刊行「諸書類纂」(續淨土宗全書)「大日本佛敎全書」等に收む。
〔續本朝往生傳〕一卷、大江匡房編。その史料を朝野に訪求して、或は「續樂記」の遺稿を探り補ひ、或はその後事を接ぎ、上一條天皇より康和三年春往生の源忠朝の遺稿に至るまで四十二人の行業を記述したものである。名古居眞禪寺に、鎌倉時代の古寫本を藏してゐる。奥書に「建長五年癸巳十二月六日於西塞草堂書寫了、乘恩、四十二」とある。而してこの本の底本は、建保七年一月十七日歌僧松尾月房傳授の書寫を了るもの。諸書類纂「大日本佛敎全書」並に「續淨土宗全書」の所收本は、何れもこの眞禪寺本を底本として、その寫誤を印本萬治二年版を以て校正したものである。この外に明治十五年の刊本がある。
〔拾遺往生傳〕三卷、三善爲厚編。前掲の「續本朝往生傳」に接して、その遺稿を古今に渉り蒐集せるもの。先づ神護堂二年高僧西去の善快、同三年七月十五日沖天西没の善興兩上人以下遺業上人に至る三十人の傳記に於て、次で廣く國史別記を訪求して天慶三年入滅の大法師國史以下、永長頃の數位傳壽師に至る三十四人を蒐め、更に天安十一年一月三日入滅の相傳和尙以下、天永二年西没の和尙の某上人に至る三十人を記し、凡て三卷九十四人の往生傳を收めて居る。名古居眞禪寺には三卷の古寫本を藏してゐる。奥書に「續淨土宗全書」
〔大日本佛敎全書〕(續淨土宗全書)所收本は、何れも建保七年正月二十七日松尾月房傳授の遺稿があつて、更に正嘉元元年十一月四日樂忍書寫の奥書がある。根本は元禄十一年の樂忍書寫「後拾遺往生傳」三卷、三善爲厚編。先づ大和尙傳記以下長治二年十一月七日入滅の前房

守源親元に至る二十人成り、次で寛和元年正月三日入滅の大僧正良直以下比丘僧澄に至る二十七人を蒐め、更に清和天皇以下字名を叙す者として至る二十七人を收め、三卷すべて七十四人の往生傳である。「諸書類纂」(大日本佛敎全書)「續淨土宗全書」等の所收本には、上巻に正嘉元元年九月廿一日書寫、十月六日移稿、同日校了の源風風の奥書がある。發願は行長の子、右馬頭に任じ、「正宗」(續淨土宗)新子義諸所見の歌入である。但し下巻は元禄の刻本に據る。元禄版の奥書に、「上中二卷前已編成、今幸得其下卷、續以刊行云、元禄辛未仲冬」とあるから、これより先に一刻本のあることが知られる。恐らくそれは寛政二年の間に刊したものであるべきであらう。而して又、名古居眞禪寺には三卷の古寫本を藏して、正嘉二年七月十七日樂忍の書寫にかゝり、承久二年の秋松尾月房が持明院宮御本を賜はつて書寫せるもの轉寫である。「諸書類纂」(大日本佛敎全書)「續淨土宗全書」等所收。
〔外往生傳〕一卷、蓮華編。「日本往生傳樂記」(續本朝往生傳)於遺往生傳(遺往生傳)と名む)の三傳に、遺傳する所の往生人の行實を撰錄せるもの。延喜六年正月六日入滅の増全阿闍梨以下、式部大輔藤原教光の女弟子に至る四十九人を收む。「諸書類纂」(大日本佛敎全書)「續淨土宗全書」等には、何れも名古居眞禪寺所藏の古寫本を收め、この原本は承久二年秋松尾月房が持明院宮御本より文字の脱を補ひ寫せるもの、更に正嘉二年六月十二日樂忍の轉寫せるもの(眞實)。「本朝新修往生傳」一卷、藤原宗友編。前掲の往生傳に續ぐ近世の往生行人の傳記を新撰せ

るので、沙門戒深以下仁平元年十月十五日卒去の學生大江親通に至る總て四十一人を載せて居る。「諸書類纂」(大日本佛敎全書)「四日松尾」(續淨土宗全書)等には、貞觀元年六月四日松尾の歌僧月房傳授の遺稿である本を收め、元禄十年開版の功本も亦この版本に據れるものである。名古居眞禪寺に古寫本一冊を藏し、正嘉二年正月の樂忍書寫見ゆ。
〔高野山往生傳〕一卷、如波編。高野山の高野山往生傳を編つたもの。行狀を撰錄したもので、寛治七年五月廿八日入滅の教懐以下文治三年七月十五日入滅の證印に至る三十八人を收む。「諸書類纂」(大日本佛敎全書)「續淨土宗全書」等に所收。延喜五年九月開版。「扶桑書院往生傳」二卷、獨漢性理編。撰者未詳。二十餘年間に見聞した往生行人を撰錄して各々に贊を加へたもの。收むところ上巻八十九人、下巻九十四人、神護堂元年三月十八日遷化の泰澄より寛文九年十二月十九日往生の芳譽老女に至つて居る。附するに支那人張氏以下四人を收む。寛永三年及び寛永三年開版。「大日本佛敎全書」(續淨土宗全書)所收。
〔續白往生傳〕三卷、元禄七年丁酉の撰集。開版。收む所の所集弘安七年四月十八日示寂の立信上人以下四十九人、尼衆十八人、信士十五人、信女眞享四年九月十三日往生の妙玉以下十一人、合計八十五人に及ぶ。大日本佛敎全書(續淨土宗全書)所收。
〔近世往生傳〕一卷、眞宗僧都長春寺住如春の編。寛永年間より眞享年間に至る四十四人の往生行人を沙門・尼僧・士夫・婦女の四箇に分ち、元禄八年これを刊行した。
〔遺傳往生傳〕三卷、鎌倉編。享保十七年開版。一名「説法往生傳」と謂ふ。

〔新撰往生傳〕八卷、淨土宗僧風野了時編。これより先に編纂されたる六家十一卷の往生傳の後を繼いで新に撰集せるもの。寛政五年開版。「大日本佛敎全書」(續淨土宗全書)所收。第五卷の沙門往生傳で、主として眞西派の往生傳を收む。
〔現證往生傳〕三卷、元文四年柱風編。寛文年間より元文年間に至る七十五人を收む。主として眞西派の行人にかゝる。元文五年開版。以上の外に「決定往生傳」(二卷)「新撰往生傳」(二卷)「扶桑書院往生傳」(三卷)等、數十種に上つてゐる。(眞實)

は念佛に如かず」といひ、「直に往生の要を辨ずるには、多人念佛をいふには如かず」と述べてゐるに見て明かである。諸行往生は、ただ隨機誘引の意に外ならない。然らば念佛に對する源流の思想及び態度は如何か。念佛に觀念と觀念との二あり、而して觀念を以て體とし、稱念を以て劣とする。第五助念方法門の中に「萬善を以て觀念を助け往生の大事を成せ」といひ、又第八念佛證諸門の中に「但名を成せずを以て往生の業となす。何に況や相好功德を觀念せんをや」といふ。而してその體易に約すれば、觀念は難にして稱念は易である。第八念佛證諸門中に「只是れ男女貴賤行住坐臥を簡はず時處諸難を論せずして之を修するに難からず」といふは、矛盾せる如くにも思はれるが、著者が宗義を天台に置く以上、寧ろ當然の歸結であらう。佛と我との關係についても亦必ずしも客觀的阿闍梨を立てず諸法實相の上よりして生佛不二を見る。第四正修念佛門の中に「能觀所觀の性空寂にして、自身佛の體二なし」といひ、又「色は即ち是れ空、故に眞如實相といひ、空は即ち是れ色。故に相好光明といひ、一色一香も中道に非ざるはなし」と述べてゐる。上述の如く、本書は念佛往生の要を觀切に記述したもので、その入門書ともいふべく、往生を志せんもの、必ず讀讀すべき要書である。この事は、又古來その註疏の多いことによつても、裏書することが出来る。
〔影響〕(教學上)源流は佛敎經典と共に、良渾門下の高足であつて、良渾の觀法中、觀念を嗣いだが覺遠で、念佛を傳へたのが源信である。而して源信の法末が、慧心流を成す上に於て、「往生要集」が最も大きな役割を演

國家に對する婦女の抗議を喧嘩した點で、同じ女詩人與謝野晶子の「君死に給ふこと勿れ」...

大津皇子

大津皇子の事蹟の最初に見えたるは、天武天皇紀に記す壬申の亂の折で、...

人心動亂せる折、大津皇子の謀反が發覺した。さうしてその謀反の直前に伊勢なる結君大石...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

感情が凝れて居る。歌は同じく處刑の際に成つた巻八の「百傳ふ繁余の池に鳴く鴨を今日...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

及び高麗笛と同じである。指孔は六個あり、皆特別の名で呼ばれて居る。即ち尾端に近い...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

の笛は獨奏用にも併せられ、又歌の伴奏にも用ひ、又唐樂・林樂等の管絃合奏にも用ひら...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

戸清上より和通部大田原に傳へられた。三代實録の大田原の傳の中に、天長の初め百濟...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

の女の子を弟子に取つて箏を教へてゐる。今、創立二十年記念祝賀會が卒業生有志の手...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

子イではあるが、場面の變化や割合動きのあつた點等、より舞臺的であるため、樂地小劇場...

大津皇子の謀反

大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、大津皇子の謀反は、天武天皇の御代に於て、...

それより東京・鎌倉に病を養ふこと数ヶ月、三十三年七月文庫博士の學位を受けた。この年三月病を養ふため京都に移り、十月下旬更に郷里岡山に移つたが、遂にそこで歿した。

教徒の心がこの奇異なる國文學の扉面に接して一驚を喫したといふ。彼は又、歌論・悲劇論等に於て非凡なる文藝批評の手腕を示した。

彼はれ方を知るに足るので、次にその目録を示す。

頻りに海内を歴遊して「千山萬水」等を著した。三十三年三月世界後進の途に上り、歐米の出版業を視察して同九月歸朝。「歐米米水」を公にした。三十四年病んで歿した。

子」の遺棄遺棄などの、饗梨かとも思はれる南海の大海老の髯に宿りた話、それから七位法師の落し話のやうに、離かに近世に入つて追加されたものもあるが、初期以来の諸作もまだ色々傳はつて居る。たとへば常陸の大船岡の巨人は、地名説明の傳説に化して居るが、少し北へ行くと、これと同じ話は陸前

と泥鰌が掘ばさみの中に一杯になる。岸に上がらうと思つて掘んだのが手負猪の鬣で、その猪は掘り起して土を掘いて、数寸の山の手に掘り起してゐた。或は又鴨の足が田の水に凍りついてゐるのを、手捕りに百羽捕つて鰻に結はると、忽ち朝日が照つて来が解

を記され、千座屋戸の破物を出して、罪の赦とせられたのである。【治承】「神祇令」に凡六月十二日晦日大祝、中臣上御祝儀、東西文部上御祝儀、卜部祝儀、齋宮男女衆、集賢所、中臣宣、祝詞、卜部祝儀、除却とあるも、後世の式書體に、應仁前後全く廢せられ、元祿四年再興せられたが、また舊の如くには行はれない。明治四年改めて舊儀を復興し、翌年更にその儀を定め、宮中に行はるゝこととなり、地方でもその儀を定められたが、大正三年全國神社に於ける現行の大祝の次第も決せられた。

後の世の人の造れるものにて、ただ例のからめきたることをのみ云ひて、古の意圖にあらざり、故には殊によしなきことのみなり、同上と云つて居る。かゝる如く大祝詞は一種の讀經の如くなつたのである。小中村清規これを論じて、「世に中臣祝と稱し、神官の神前にて専ら讀誦したるは、即ち前に云ふ二季の大祝(前項)の時、中臣氏の讀められた祝詞を、後世の神官等、佛徒の大祝若くは禰禰するに似せ、信徒の依歸にまかせ、敬儀など唱へて、神前にて敷座讀上ぐるを習と、遂に五

のためである。なほ本書は「出雲國造神壽...」の宗論を記した佛書「大原問答」によつた。...

大原問答 浄瑠璃 五段 時代... 浄瑠璃は鳥羽朝に軍議を練つてから、一の谷に平家を攻めた。...

果は一同法然に屈した。法然の身は勢至菩薩と仰がれた。...

大原問答書 浄瑠璃の曲は、浄瑠璃と歌舞伎脚本を同化する直系と認められるものではない。...

大原三時 蓮歌 諸本 舊注... 大原三時は、古くからの日本語で、今も天然の雑地を大人又は大の足跡（オホノアシ）と呼ぶ例が全国に非常に多い。...

大人彌五郎 傳説「名義」... 大人彌五郎といふのは、古くからの日本語で、今も天然の雑地を大人又は大の足跡（オホノアシ）と呼ぶ例が全国に非常に多い。...

彌五郎と同様に、捲き廻つて終りに村境へ送り奉り奉り、能く郷中の災害を救ひ得べしとしたのであつた。...

石清水に勧誘せられて以来段々に薄くなつたやうだが、なほ民間では今も厄掃ひの新頭をこまに付けて居る。...

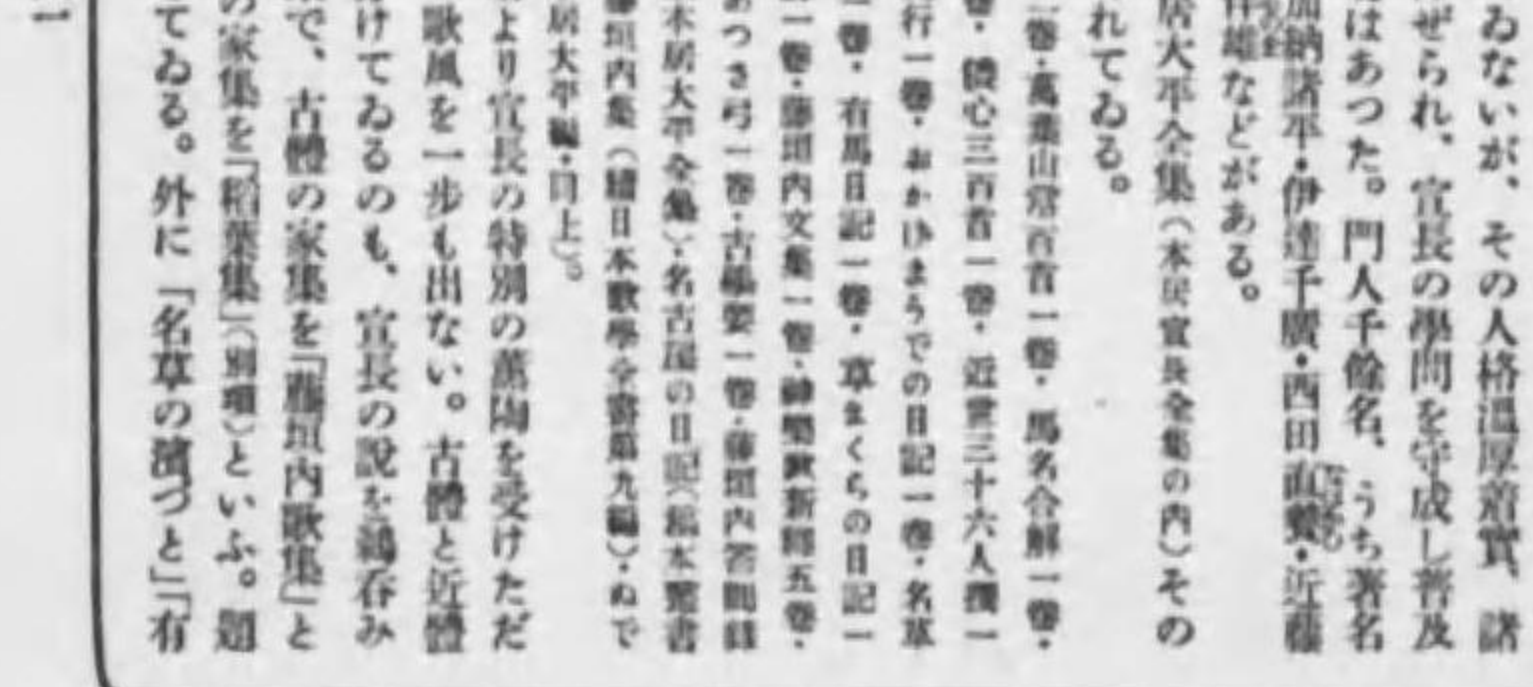


大原三時 蓮歌 諸本 舊注... 大原三時は、古くからの日本語で、今も天然の雑地を大人又は大の足跡（オホノアシ）と呼ぶ例が全国に非常に多い。...

大人彌五郎 傳説「名義」... 大人彌五郎といふのは、古くからの日本語で、今も天然の雑地を大人又は大の足跡（オホノアシ）と呼ぶ例が全国に非常に多い。...

彌五郎と同様に、捲き廻つて終りに村境へ送り奉り奉り、能く郷中の災害を救ひ得べしとしたのであつた。...

石清水に勧誘せられて以来段々に薄くなつたやうだが、なほ民間では今も厄掃ひの新頭をこまに付けて居る。...



女郎を揚げて稽古する。(一)二 膠の揚代につまつた者は、往來で通行の男女を押し倒して乗らうとする。つひに浴中の騒動となる。

通じて著者を明かにし、ひいて作中の事件に多少の現性を附與しようとするがらみである。

浮遊曲の曲筋上の沿革や、語り方に關する心得等を詳説し、且つ世間實情の進行に馬方節を入れたのを、三十年後に於ても後悔して居るといふ、作者近松の藝術的良心の強さを示す逸話なども見えてゐる。

も行はれたが、主として江戸で流行した。體裁は年代によつて相違し、普通半紙判で二三枚乃至四五枚程度、楽詞も長短様々である。

【構成】寛政の治の文武樂編の事實を誇張することによつて、滑稽をあらはさうとする作意である。時平等を田沼父子に擬し、若秀才を樂翁に擬してゐること、「九官鳥の言葉」が樂翁の「題詞のことば」であることも、一讀直ちに看取される。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

で交互に挿合になる場合の楽詞。(五)五はゆ音(六)六はゆ音などと音と音とを重なりあはせ、歌舞伎に對する親しみの氣持を具體化した一種で、元來は觀衆が役者に愛着を感じ、その美貌を讃へたものであつたが、それが脚色内容に入り、或は發行政策上から新役者の宣傳に用ひられやがてその部分のみを印行する事になつたものである。故に美辭麗句が多く用ゐられ、發生の動機は他と少しく違ふ。次に用ゐる性質から種別に分れる。(六) 物語。又は「あんまりづくし」等がある。「せりふ」は類似の語彙を列べる方法で、「染物づくし」とは物語のせりふの義である。(七) 六方詞。特殊社會の特殊な言語の興味を利用したもので、特に江戸の若い紅顔の奉詞によつたものを總稱して總て六方詞とする。(八) 鶴亀石。脚色本、又は正本・繪古本・影芝居とも云ふ。附詞・六方詞以外の、殆ど總ての性質を具へたもの。「せりふ」又はせりふ附の印行が最も古く、寛文・延寶の交に見られる。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

【舞臺】「鶴亀が袖」浄瑠璃段物集 三巻 刊行 正徳元年七月 大阪日本九右衛門門敷。

彼が新作を引受け、関西に於ける座付作者以外...

大森彦七

【題材】元祿以前のもを、新時代向きに扱...

【大矢数】『名義』矢数併借の大きなもの...

大屋裏住

【大屋裏住】『狂歌師』(本名)姓久...

【往來物】『四書五經』(新編)と言つたやう...

をそのまゝ、大屋裏住と呼んだ。寛政元年の...

往來物

【往來物】『四書五經』(新編)と言つたやう...

【大矢数】『名義』矢数併借の大きなもの...

には、既に往來と消息とを全く別の概念とし...

に至つては更に汎く、寺子屋は勿論、總學に...

もないが、寧ろ消息文の準備的練習のために...

【往來物】『四書五經』(新編)と言つたやう...

「厚朴山響集」の如きものがあり、他郷地方に「船方往來」...

その長子である。幼くして空戸千建、徳重樹に和歌を...

演藝場をも兼任劇評の筆を執つた。一年後、社会面の...

は、大正の末に至つて始めて確立された。それ以前にも...

【参考】往來物分類目録 厚朴山響集 中世に於ける社寺と社会の關係...

大和田建樹 國文學者 歌人 大和田建樹 國文學者 歌人...

岡鬼太郎 劇評家 劇作家 岡鬼太郎 劇評家 劇作家...

【参考】手が演藝記者としての十五年間 岡鬼太郎...

【参考】「和歌」の著者として知られた谷川士清...

【参考】「名義」三河の國の岡崎 岡崎彌太郎...

【参考】「名義」三河の國の岡崎 岡崎彌太郎...

【参考】「名義」三河の國の岡崎 岡崎彌太郎...

節は、永祿十年七月、河内八幡村から踊り初めて、各地に広まり...

持つてゐた。當時同僚であつた齋藤藤南は、その「日記帳」...

岡田正美 國語学者 功名 職 岡田正美 國語学者 功名 職...

ある事を免れなかつた。又國字に關する論議の沸騰した頃...

る。鏡面では「新編の橋」がその代表作として...

【網約話】清原本二冊【作者】...

【網野半牧】小説家【本名】武平...

【岡村柿紅】小説家【本名】久壽...

【岡本起泉】小説家【本名】...

【山田龍藏】小説家【本名】...

【山田龍藏】小説家【本名】...

寄せた。二十七年には、大阪朝日新聞に「尼...

【網の屋歌集】歌集二巻【著者】...

【岡田】小説家【本名】...

【岡田】小説家【本名】...

【岡田】小説家【本名】...

【岡田】小説家【本名】...

【岡田】小説家【本名】...

に親しみ、作歌に耽つた。ついで、實田通文の...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

【拜壽仁王參】小説家【本名】...

由になり、佛や羅漢達が夜遊をする。仁王は...

【仁王】小説家【本名】...

【仁王】小説家【本名】...

【仁王】小説家【本名】...

【仁王】小説家【本名】...

【仁王】小説家【本名】...

【仁王】小説家【本名】...

【山田龍藏】小説家【本名】...

【山田龍藏】小説家【本名】...

【山田龍藏】小説家【本名】...

實際の事件に材を得てゐるものが多いのに、本書は寧ろ古説話に據るものが多い。筆意に散漫と誇張とが處々に見えるのは、作者の人情の反映したものであらう。

見事に切腹して殉死を選んだ。假令の期間には、京都の老幼男女が堵の如く集つて見物した。荷首の中に「比類なき名をば雲井に揚げおきつやこを掛けて追敵を切る」と云ふのがあつた。

保守せられず、可なり自由に活動してゐたものらしい。現在書に七種の變式の傳へられてゐるのは、その名残りであらう。

と傳説(二)一草川幸太郎 (佐茂) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂)

長じて養父の職を襲いだが、病弱の爲めに辭職退任して専ら著述を業とした。俳句を好んで平時淡々の門に遊び、社口可々齋、好座等と號し、又その庵を其庵庵と云つた。寛政七年二月十一日歿、享年八十六。(田田) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂) 翁草(三)一草川幸太郎 (佐茂)

言によつて遺放され、且つ村田のために迫害されるが、共に殺された仲間三平の一念は、幼主をして仇を報せしめた。(第二)北條大角は強暴のため山奥に神隠しの身となつたが、一日目を狙ひ撃ち、却つて我子を死に至らしめたので、殺生を戒めて佛事に努めた。その後美女の首を掲げ、血をすり取りながら館に入るを義山和尚に怪しめ、遂に奥方の變化のものなるを知り、義山の現文によりこれを殺すこと、世にも恐ろしき半の如き妖術であつた。

十郎は自害して申渡したが、桂は京の五條に隠れ、なほも講評をしてゐた。或る日博識の隠者に逢ひ、その居を助ねると道十郎の亡靈現はれ、遂に狂人となつた。(卷之五)附録(第一)京の三條に丹波屋長兵衛といふ強盗な金屋があつた。或る日松尾の明神に参詣して願を告げ、これを弄ばんとして氣絶し、持物見てを奪はれた。これは唐の道徳談といふ書にある妖術を以てしたのであつた。

り加賀が門弟修業のために選んで置いた九曲を教む。その曲目は左の如くである。一、鴨長明方丈記之唐歌。二、源三位頼政之起請文。三、平家頼朝小野寺。四、源八鳥之動遊観。五、伊勢物語之水波。六、道成寺。七、世體物語之假面。八、藤原隆之。九、湯谷物語之文。 終りに葵竹・高太夫・若狭・其太夫・其太夫等の追善の和歌俳句等を載せてある。この中特に文學上から見て参考となるは、九曲の詞章である。

郎は改めて夫婦となつて家を離れ、おせちは恥ぢて自害した。そこで丹下は頭首を掲げて...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

石に「観射野郎」の著者にして詠めるもので、作者としての力量を十分現はしてゐる...

長太夫の門下。名女方萩野左馬之丞(後の)の...

【三代】(初名)泉川龜吉(別名)萩野鶴子...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

を襲いで江戸森田座へ下り、爾後、三四枚目...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

【歌風】鈴之室門の中では、最も古今集の歌風に近い。華麗よりも實質を重んじて少い方...

は、また姉をいぢめる役に遇つてゐるが、この話と前半を共通にしてゐる「お銀小娘」の話では、妹の小娘は姉を尻ふやうに變つてゐる。この例はまだ外編では注意されてゐない。尤もこれにも幾つかの階段があつて、本の子が母の母の言ふなりになつてゐるもの、又は唯折々姉の肩を持つといふ程度のも、又は「葉袋米袋」の語にもある。それが後には「所懸命に姉の尻に任ずるやうになり、繼母の殘虐がいよいよ濃厚に説かれるやうになる。説話の成長を物語る興味深いものである。(三)

源氏物語「河海抄」などにも、全く別人の作の如く記されてゐる。よつて本書の原作者を伊行となすは正しからず、寧ろ初めより定家の撰となすべきである。ただ「奥入」は、一種の諸註集成であつて、伊行の説をはじめとして、多くの説を集めたものであることは云ふまでもない。

【成立】本書成立の事情は、定家が巻末に附したる跋に明かである。但し類従本の跋文は亂れて、意味不通の箇所がある。高野辰之氏神

して別巻となしたが、その際歌など多く紛失した。今後は他人に見せることを止めなければならぬとある前後の文によつて「毎巻奥所注云々」とあるは、伊行の註をさすにあらざる事が分り、成立の事情も明かであり、且つ異本發生の事情も想像される。按ふに定家は、もと「源氏」の本文中、行間又は脚頭に、伊行はじめ諸註を抄録し、これに自家の説を加へておいたのを、何かの機會に、註のみを巻末にまとめて、大體の順序を立てて抄記したのではなからうか。この想像が許されるならば、「奥入」の成立には三階段がある。第一は定家が「源氏」の本文中に諸註を抄録し、これに自家の説を加へるに抄記したこと、第二は、それをまとめて巻末に抄記したこと、第三は、巻末に抄記せしめ、更に本文より切り取つて、別に一巻となしたることである。かゝる事情より推定すれば、著述年代は明かにされてゐないが、右跋文の署名によつて考へれば、謂はゆる「奥入」が、現在の本のやうに別巻としてまとめられたのは、安貞元年十月即ち定家出家以後のことである。しかし「源氏」の各巻の奥に書き入れられたのは、切り取つて一巻とした時より尙早であるべきことが、跋文によつて想像される。又阿佛が「奥入」を切り取つて、爲相に與へたといふこと、そのあり得べからざる事が明かである。尤も阿佛の切取つた云ふ「奥入」は、定家の自筆でなく、その轉寫の本で、しかも「源氏」の本文中に存したものであつたかも知れない。

「奥入」が定家によつて切取られない以前に、門々戸々に轉寫された事情は、跋文に明かであり、定家もまた一本を寫して所持したのではないと思はれる。

【諸本】前記の跋文によつて大別二種の異本の存在する事が想像し得られる。即ち定家が未だ「源氏物語」の巻末から切取らざる以前に書寫された本の系統と、切取つた後に書寫された本の系統との二つである。後者は跋文によれば、前者よりも内容が減少してゐる。即ち前者は内容の多い本であり、後者は少い本である。「奥入」の切取られない以前、それが轉々として書寫され、そのために定家が海外の迷途をした事は、前記の跋文に明記してある。しかして、かく「奥入」が切取られない以前といふと、まだ本文中に動物の散在せし時と、巻末にまとめて抄記された時との二つに分けて考へられるが、いづれの場合も、後人によつて書寫されたに相違なく、從つて、こゝに第一類を更に二つに分けて、合計三種の異本が成立する譯である。現在諸本中に、この三種の異本を定めることは困難である。ただ高野辰之氏藏の古寫本は、實司兼冬との撰録と稱せられ、定家が各巻の奥から切取つた。即ちこの本は、第二種の異本の原本を、最も忠實に傳へるものと見なければならぬ。次に前田家の古寫本一冊は、奥に中院通判の跋があつて、三條西公儀の撰録とされてゐる。この本は、高野氏本に最も近く、恐らくそのよき轉寫本の一であらう。又宮内省圖書藏の一

本は奥に「應永四年八月上旬以後自筆之本書寫同校合筆」とあつて、殆ど高野氏本と同じである。次に藤書類從三九五所載本は、高野氏

【奥入】註釋書一巻【名稱】「源氏物語」の各巻の奥に、藤原定家が舊説をあげ、自説を入れたので、かく名づけられたのであらう。又別に「定家轉釋」とも「源氏物語」とも「源氏物語」とも「源氏物語」とも呼ばれたらしい。又現存する本の中に、「源氏物語」(神宮文庫蔵)と題する異本もあり、「源氏物語轉釋」(神宮文庫蔵)と題する抄出本もある。【著者】藤原定家、前田家本「源中最後抄」の奥に「奥入作者京師中院通判家」と行間が自跋を加へてゐるのによつて明かである。「明皇抄」には、諸抄の條に「奥入伊行轉作。道注加藤家河海に中院通判家轉作との釋義を注して奥入と號すと云々。私定家の奥入とは號すれど、根本の述作の源は伊行轉也」とあるが、これによると、もと伊行が源氏の各巻の奥に註を附したるを「奥入」といひ、後定家が追加して註釋のみを切り離したるを「道注加」といふものと解せられるが、「奥入」の外に「道注加」といふものも存する譯ではない。又定家の自跋にも伊行の事に立言せず、伊行の「釋」と、定家の「奥入」とは、「弘安

【奥入】註釋書一巻【名稱】「源氏物語」の各巻の奥に、藤原定家が舊説をあげ、自説を入れたので、かく名づけられたのであらう。又別に「定家轉釋」とも「源氏物語」とも「源氏物語」とも呼ばれたらしい。又現存する本の中に、「源氏物語」(神宮文庫蔵)と題する異本もあり、「源氏物語轉釋」(神宮文庫蔵)と題する抄出本もある。【著者】藤原定家、前田家本「源中最後抄」の奥に「奥入作者京師中院通判家」と行間が自跋を加へてゐるのによつて明かである。「明皇抄」には、諸抄の條に「奥入伊行轉作。道注加藤家河海に中院通判家轉作との釋義を注して奥入と號すと云々。私定家の奥入とは號すれど、根本の述作の源は伊行轉也」とあるが、これによると、もと伊行が源氏の各巻の奥に註を附したるを「奥入」といひ、後定家が追加して註釋のみを切り離したるを「道注加」といふものと解せられるが、「奥入」の外に「道注加」といふものも存する譯ではない。又定家の自跋にも伊行の事に立言せず、伊行の「釋」と、定家の「奥入」とは、「弘安

【奥入】註釋書一巻【名稱】「源氏物語」の各巻の奥に、藤原定家が舊説をあげ、自説を入れたので、かく名づけられたのであらう。又別に「定家轉釋」とも「源氏物語」とも「源氏物語」とも呼ばれたらしい。又現存する本の中に、「源氏物語」(神宮文庫蔵)と題する異本もあり、「源氏物語轉釋」(神宮文庫蔵)と題する抄出本もある。【著者】藤原定家、前田家本「源中最後抄」の奥に「奥入作者京師中院通判家」と行間が自跋を加へてゐるのによつて明かである。「明皇抄」には、諸抄の條に「奥入伊行轉作。道注加藤家河海に中院通判家轉作との釋義を注して奥入と號すと云々。私定家の奥入とは號すれど、根本の述作の源は伊行轉也」とあるが、これによると、もと伊行が源氏の各巻の奥に註を附したるを「奥入」といひ、後定家が追加して註釋のみを切り離したるを「道注加」といふものと解せられるが、「奥入」の外に「道注加」といふものも存する譯ではない。又定家の自跋にも伊行の事に立言せず、伊行の「釋」と、定家の「奥入」とは、「弘安

【奥入】註釋書一巻【名稱】「源氏物語」の各巻の奥に、藤原定家が舊説をあげ、自説を入れたので、かく名づけられたのであらう。又別に「定家轉釋」とも「源氏物語」とも「源氏物語」とも呼ばれたらしい。又現存する本の中に、「源氏物語」(神宮文庫蔵)と題する異本もあり、「源氏物語轉釋」(神宮文庫蔵)と題する抄出本もある。【著者】藤原定家、前田家本「源中最後抄」の奥に「奥入作者京師中院通判家」と行間が自跋を加へてゐるのによつて明かである。「明皇抄」には、諸抄の條に「奥入伊行轉作。道注加藤家河海に中院通判家轉作との釋義を注して奥入と號すと云々。私定家の奥入とは號すれど、根本の述作の源は伊行轉也」とあるが、これによると、もと伊行が源氏の各巻の奥に註を附したるを「奥入」といひ、後定家が追加して註釋のみを切り離したるを「道注加」といふものと解せられるが、「奥入」の外に「道注加」といふものも存する譯ではない。又定家の自跋にも伊行の事に立言せず、伊行の「釋」と、定家の「奥入」とは、「弘安

本に比較するに、所々註が前後し、彼の本に無い條目や註がある。恐らく類従本は、高野氏本系統本の粗雑な寫しに、他の異本例へば内閣文庫本もしくは神宮文庫本の如き本をもつて校合筆入をしたのではないかと思はれるが、或は全卷高野氏本とは異系統の本で、神宮文庫蔵の他の一本「源語古抄」とある本と、内閣文庫蔵の寶曆九年の寫本かも知れない。なほ阿波文庫蔵の寶曆九年の寫本はこの系統である。次に前記神宮文庫蔵の「源語古抄」と稱する古寫本は、前述の高野氏本系統即ち第二類系統の諸本に對して、全く異本の地位に立つ。この本の特徵としては、伊行勅を考へべき項目の多いことである。よつて思ふに「源語古抄」は、未だ定家が各巻の奥より切り離さざりし時、何人かによつて寫された本が原本となり、これに更に、考證を附加した本ではなからうか。次に神宮文庫蔵の他の一本があるが、これは元祿十年の書寫である。この本は、内閣文庫蔵の一本と全然同一であり、阿波文庫蔵の「源氏物語轉釋」とも類似し、類従本系統ではなく、高野氏本系統でもなく、源語古抄系統でもなく、又別の一本である。その内容は、諸本の要素を悉く備へてゐるが、いづれの本よりも簡約である。しかし諸本中いづれの本から抄出したものとする事も出来ない。例へば、夢の浮橋の條に、「釋」には、「あふこ」とは雲井はるかになる神のおとにききしつゝ世をわたらん」の歌があつて、「源語古抄」の方は出てゐるが、高野氏本・前田家本・類従本、いづれにもないかゝはらず、内閣本・神宮本には出てゐるのである。それにもかゝらず、「かげろふ」二巻は、ただ卷名のみを擧げただけで、註を全然略してしまつ

てゐる。或は「源語古抄」の系統の本から抄出したかとも思はれるが、「源語古抄」の本に無い条目も出てゐる。やは「源語古抄」の方向に定家が未だ各巻の奥より切り離さざりし以前「源語古抄」の系統とは別に寫された本の系統と考へるのが至當ではなからうか。

【解説】本書の内容は、「源氏物語」中の要語に對して解説を施したもので、その解説は「源中最後抄」や「紫明抄」のやうに、和漢佛典に互り、故事・出典・引歌の考證を主とし、文法や意味の解説は稀である。これ等の註釋は、定家の自説よりも寧ろ伊行の「釋」をそのまゝと擧げたものが多く、定家は「道注加」とか「書加」とか「書加之」とか記して、自己の説を「釋」の説のあとに列記してゐる。初めの方は、伊行釋と追加の部分と、はつきりしてその間に區別が認められるが、終りの方は、次第に混同して、區別が困難になつてゐる。これは、もと本文の行間又は脚頭に加へられた註記を、奥にまとめる際、注意の仕方が同一に行かなかつたからであるのかも知れない。【價值】源氏物語の註としては、さして價値あるものではないが、後世源氏學の淵源をなし、多くの研究に根本的な光を與へた歴史的意義のあるものでは殆どない。殊に本書によつて、傳本が極めて稀なる伊行の「源氏」の形を推察し、そのからうと思はれる。この「奥入」即ち「定家釋」が、河内本流行の時代に、如何に傳來し、「仙源抄」「河海抄」の時代に、如何にして再び擧げられたやうになつたか、それは源語研究史上極めて興味ある問題である。

【參考】國文學研究史野村八良○源氏物語研究

【參考】國文學研究史野村八良○源氏物語研究

れも許さねばならぬといふ意味を「隠説」に述べられて反響し、歌の道をよくとよめる者...

阿國御前化粧鏡 七幕十四場。お家世話物。作者、四世松尾山北。...

才三郎、小島宗平は岩見太郎左衛門、お生屋助、四代市川三郎、山住伊平次、大島新三郎、...

この館へ入込み、先づ名古屋山三を滅さうとすつたが、山三の妻お玉が色仕掛けで指を切つた...

【備考】天保三年八月、三度目上演の折には、お國御前の件を改訂し、元信は徳城遠山と訓染を重ねた...

お國と五平 おくと、戯曲 一幕【作者】谷崎潤一郎【発表】大正十一年一月新小説「刊行」...

【解説】お國御前が病中に愛を結ぶ娘を附ける場面が好評で、この場は同じ作者の『関八州』...

奥の細道 俳諧 紀行 一冊【著者】松尾芭蕉（名実）宮城野から松島へ行く間に...

奥の細道 俳諧 紀行 一冊【著者】松尾芭蕉（名実）宮城野から松島へ行く間に...

で、書は縦五寸五分、横四寸七分、紙數五十三、首尾に白紙を加へ、行成紙の表紙、紫の...

【奥の細道】芭蕉の俳諧、紀行。一冊。作者、松尾芭蕉。...

奥の細道 俳諧 紀行 一冊【著者】松尾芭蕉（名実）宮城野から松島へ行く間に...

【内評】芭蕉は元禄二年三月二十七日、門人曾良を伴つて江戸を發した。先づ室の八島に詣り、...

【解説】本書は紀行文中の白眉である。文體が簡潔で、能く旅中の情景が盡されてゐるため、後世に至る迄多くの欽慕者を持ち、奥村行脚の道程者が續出した。...

【解説】本書は紀行文中の白眉である。文體が簡潔で、能く旅中の情景が盡されてゐるため、後世に至る迄多くの欽慕者を持ち、奥村行脚の道程者が續出した。...

小栗はこれと契つて妻とした。やがて懐胎した女は神泉苑に身を隠さうとして、こゝに接む龍女と闘ひ、爲めに七日の間大暴風雨を現した。帝は博士の占によつて、小栗を罪に處し、常陸に流された。常陸の小栗は唐土日本を渡る商人の口から武蔵相模の郡代横山の娘とて、姫の美貌を聞き、早夜文を認め遣はした。...

「三、小説」假名草子に「おくり物語」(二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...



小栗風葉 小説家【本名】加藤大【生誕】明治八年二月三日、愛知縣半田町に生れ、大正十五年一月十五日豊橋市外花田村に歿す。享年五十一。...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...

「おくり物語」の中心は、ていつて姫の人身説話にあるが、特殊な説話によつて、事に悲劇を描く以上、巧妙な起伏を現はす事に成功した。他の説話と異なり、忠實に原脚色に忠実に従つた。...

爲めに漢文に附けた一種の符號、現今漢文に附けて調韻を示す假名や返點などと同じ用をなすもので、種々の形の點や線は漢字の種々の位置に附して、その讀方を示すものである。その符號の形は、 \cdot 、 $\cdot\cdot$ 、 $\cdot\cdot\cdot$ 、 $\cdot\cdot\cdot\cdot$ 、 $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ の如き點や線もあり、リマの如き假名や、上下の如き漢字から出たものもある。

平古止點によつて示されるものは、大體次のやうなものである。

- (一) 助韻詞、助韻其他調韻の標語(て讀む語)
- (二) 活用語尾其他漢字の調の一部(自)の調オノカラのオなど)
- (三) 音讀か調韻かを區別する符號
- (四) 連讀符(漢字二字を合せて一語として讀む符號で、兩字共に音讀するものと、兩字を併せて一の調に讀むものとを區別する)
- (五) 四聲を區別する符號(聲點)
- (六) 句讀の符號
- (七) 返點(その字から上へ返るもの、及び下から返つて来て更に上へ返るものとを區別する)
- (八) 地名、人名、書名等を區別する符號

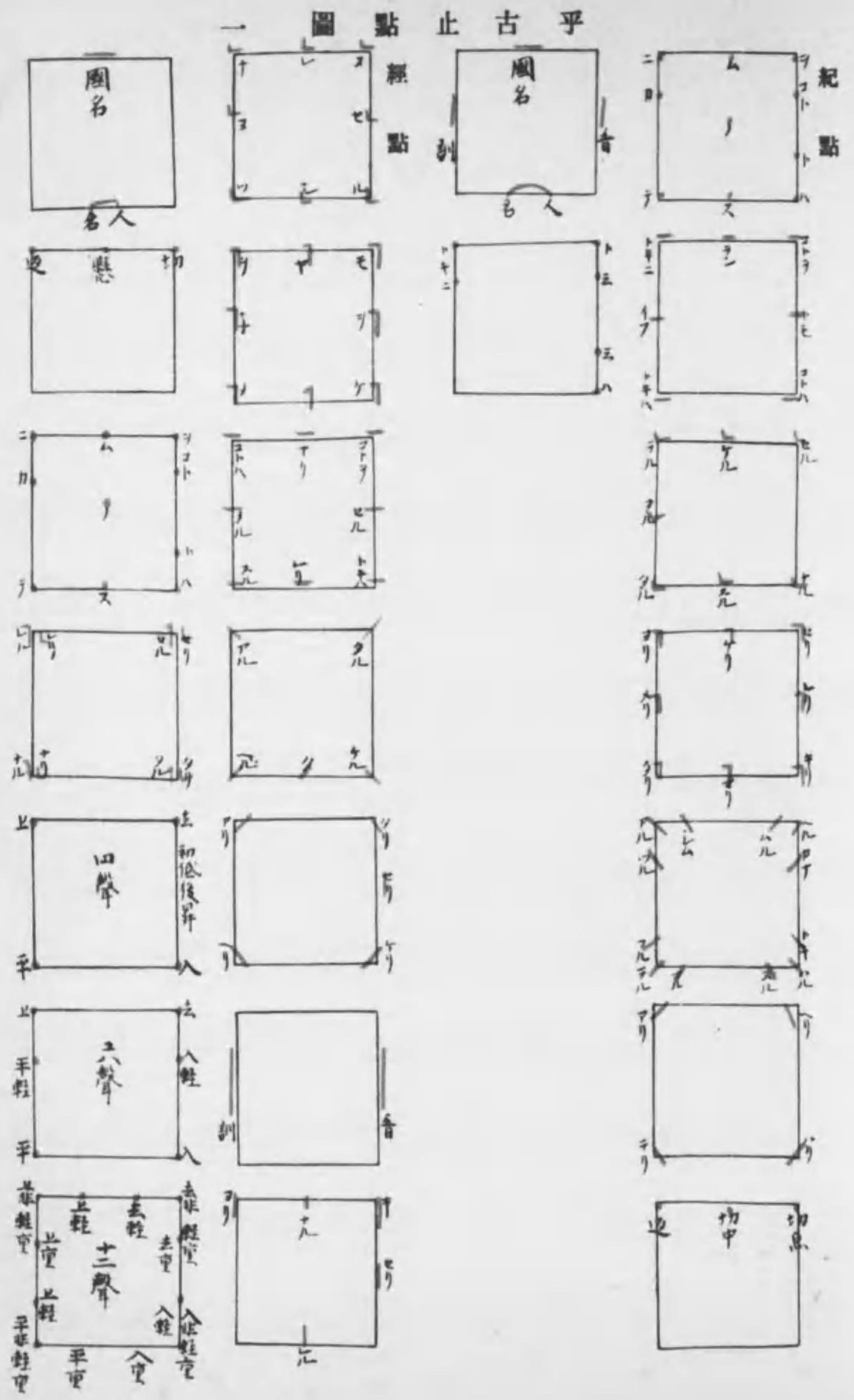
【平古止點圖】古くは單に點圖と云ひ、後には點圖ともいつた。平古止點の形式を示したもので、漢字の形を正方形を以て代表させ、その種々の位置に種々の符號を附けて、假名又は漢字(を以て讀み方(又はその意味))を註し、その符號が漢字のその位置にあれば何と讀むべきか(又は何と解すべきか)を明かに示したものである。點圖は院政時代からあつたが、(中右記)寛治元年十二月二十四日の條及び「長秋記」天永二年十二月二日の條に見える。形式の違つた種々の點圖があつたものの出来たのは、鎌倉時代からであつたらしく(同時代の書寫と認められる點圖が少なくも二種あり、又文永三年書寫の書寫が傳へてゐるものもある。現に傳はつてゐるものでは、群書類本及び續々類本があるが、既述、且つ後者は符號が缺けて用をなさない。高品數字(五音四聲の圖した)「調韻二點集」(八音圖)本は點圖を添綴し、殆ど全部を網羅したのであつて、最も便利なものである。

【沿革】支那の唐時代には、漢字の四聲を區別する爲めその四隅に點を加へた事があつた。平古止點は多分これから導かれて漢文の調韻を示す方法として工夫されたものらしく、漢字に單一の點(を點)を加へて、調韻に最も普通用ひられる助韻の類を示したものが基礎となり、追々複雑な形式を發達せしめたのであらう。平古止點を附した古代の文獻と漢文に點を附した事に關する記述によれば、平古止點は平安朝初期まで傳ふる事が出来るが、それ以上には證がない。さうして最も古くから見えるのは喜多院點であり、西點もかなり古い。けれども當時の點を附した本について見ると、點圖にある點に合はないものが多く、まだ統一せられなかつた事を示してゐる。平安朝も半を過ぎると大體點圖の初期は假名の出来た時代であつて、平古止點と假名と共に用ひられてゐる。しかし平古止點が行はれたのは、一々假名で書くより點をつける方が簡便であつたからであらう。さうして、これはもと々心算えにされた私のものであつたので、近い弟子などは師匠のを真似たであらうが、あまり廣くは行はれず、各自勝手な用ひ方をしたものであらう。それが追々固定して一寺一家では統一するやうになつたが、これは純粹の符號で一々習はなければ、全くわからぬものである。一般に廣まるべき可能性に乏しい。一方平古止點と共に(旁々その補助として)用ひられた假名は、音讀の音をつすものである故、一般性がある。そこで平古止點の中、直接音讀を示すものは追々假名に位置を譲り、返點、四聲點その他純粹の符號に屬するもののみが行はれるやうになつたと思はれる。かやうにして鎌倉時代に入つては、次第に平古止點を用ひる事が少くなり、用ひても單純な點だけで、やゝ複雑なものを用ひないやうになり、室町以後は、従来の古典を寫す場合などの外は行はれなくなつたのである。但し符號の性質のものは、形を易へ、又はそのままで假名と共に後世にも用ひられた。(附記)漢文に平古止點を附ける事を加點と云ひ、他本の平古止點をそのまま寫し加へる事を添綴といつた。(調韻參照)

【參考】國語國文の研究(音韻部)平古止點序説(上)藤田鳴鶴(五〇)王朝時代に於ける博士使用ヲコト點讀詞上(群書類本)尾崎紅葉(群書類本)

【お才三】「群書類本八丈」を見よ。

【抑字】「群書類本」後には抑字といふ。連讀の句に於ける句末(留り)といふに出る手調讀後とそれに対して上にある手調讀故との呼應上言ひ出したもので、その上にあつて應ずる手調讀をいふのである。例へば「水寒し雪や山より流らん」の「らん」に對して上の「や」を抑字といふのである。これには「て」留りの抑字は「て」「は」「も」「から」「らば」の五つだといふことが言ひ出されてゐるが(連讀用單字白鳥集等)、今日の文法上から見れば不合理な點もある。要するに文法的研究のまだ幼稚な頃の考で、後の文法研究を進歩せしむべき過渡の役目をしてゐるものである。なほ、これ等の考は佛語にも繼承されてゐる。



圓堂點 仁和寺所用

Handwritten characters in a grid for the '圓堂點' section, including characters like 二, 一, 子, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎.

二 圖 點 止 古 乎

喜多院點 興福寺所用

Handwritten characters in a grid for the '喜多院點' section, including characters like 二, 一, 子, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎.

二 圖 點 止 古 乎

Additional handwritten characters in a separate box at the top of the right page.

三 論 宗 點 東大寺所用

Handwritten characters in a grid for the '三論宗點' section, including characters like 二, 一, 子, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎.

三 圖 點 止 古 乎

三 圖 點 止 古 乎

Handwritten characters in a grid for the '三圖點' section, including characters like 二, 一, 子, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎, 止, 古, 乎.

Handwritten text in the top right column, likely related to the '西墓點' header.

乎古止

Handwritten text in the second column from the right, under the '乎古止' header.

點圖四

Handwritten text in the third column from the right, under the '點圖四' header.

年十二月十六日、江戸芝居門前に生れ、明治三十六年十月三十日、東京市本所横濱寺町に病歿。享年三十七。【法名】影文院紅蓮日蓮居士。同...

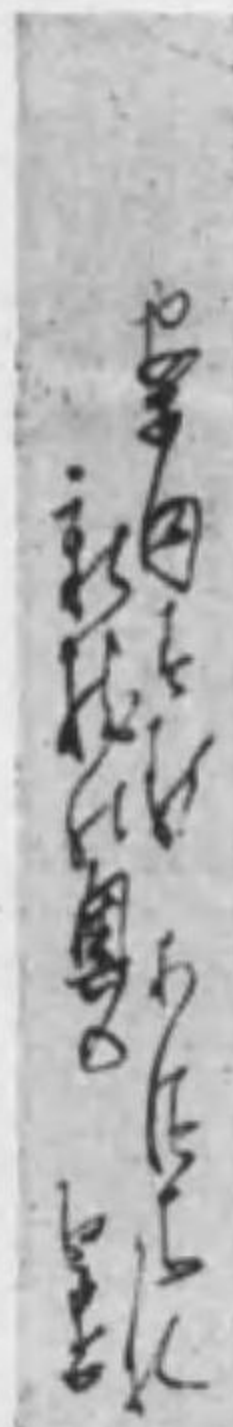


五月に活版屋の雑誌として、改めて第一號を世に出した。彼は初號から風流人形」を連載して、自ら創造した維新折衷の文壇を世に...

自宅にあつては骨髄に努めるうち、七月以來病勢に陥り、十月三十日夜十一時、前夜から三十七を以て逝いた。「死なば秋露のひぬ...

萬ち得たが、以後文壇の第一線に立つて一毎に文名を高めて行つた。彼は、兩河阿彌陀佛「風流人形」等を發表し、二十三年には當時の...

ら出て平漢に入り、筋よりも人間を描くに努めてゐるが、この作に至つて彼の言文一致は、



更に西歐作家の作品を模倣したことは多数の

その観察眼がやゝ常識的だつた一事である。

の一半は、その作品の底流を成すところの

野島区、徳島に帰郷で、長く駐蹕日本公使館書

るが、事實は秋波が十六七頃の譯に成ると

の顔を見知り、また文學書も好んで多讀し、



のために絶えず脚本訂正の任に當り、劇場生

て看病させ、且つ金子五兩を贈る。於手古は...

【解説】浮世草子の風物物を含み、教訓を...

はこの説話中のお婆である。京山は娘を略...

【解説】筆者が五年以上に亘る思案生活の...

型は、第四説話のおしよから来てゐるらし...

【解説】初春の日、茶亭と云ふ京の通人身を...

武勇傳に、泰西の冒險譚に見る科學的興味...

【解説】「古今者開集」鳥羽信正の段に「ふるき上手の書で候...

直され、新たな長篇論文として(著作集第十一...

【解説】筆者が五年以上に亘る思案生活の...

八番考石屋野子(新編石屋野子)【解説】...

【解説】「古今者開集」鳥羽信正の段に「ふるき上手の書で候...

も頗る見世狂言(持込)だもの(おそめ久松の白しぼり)...

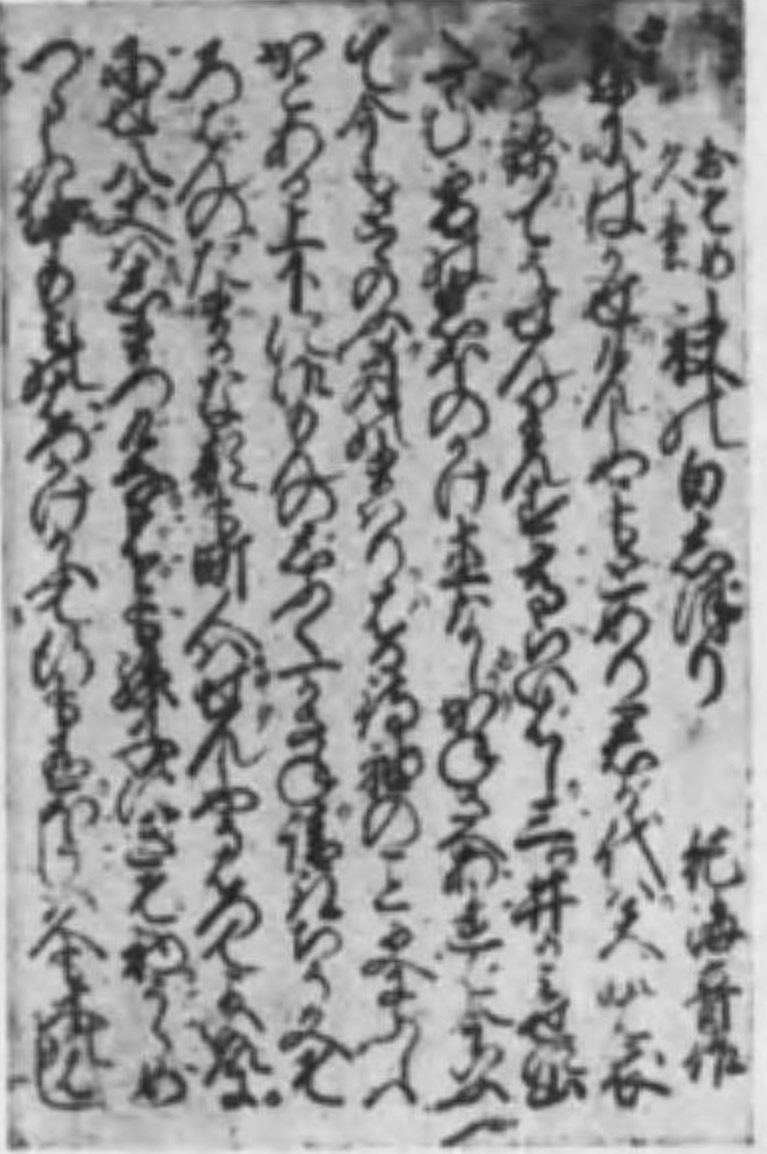
【おそめ久松】(異稱)「染織林野七草」...

【おそめ久松】(異稱)「染織林野七草」...

久松の實説として信ぜられてきたが、水谷不...

引出し不相慮(下着)を身に付けてゐる様で折...

伯父によつて後切りの起誓を認めさせられる...

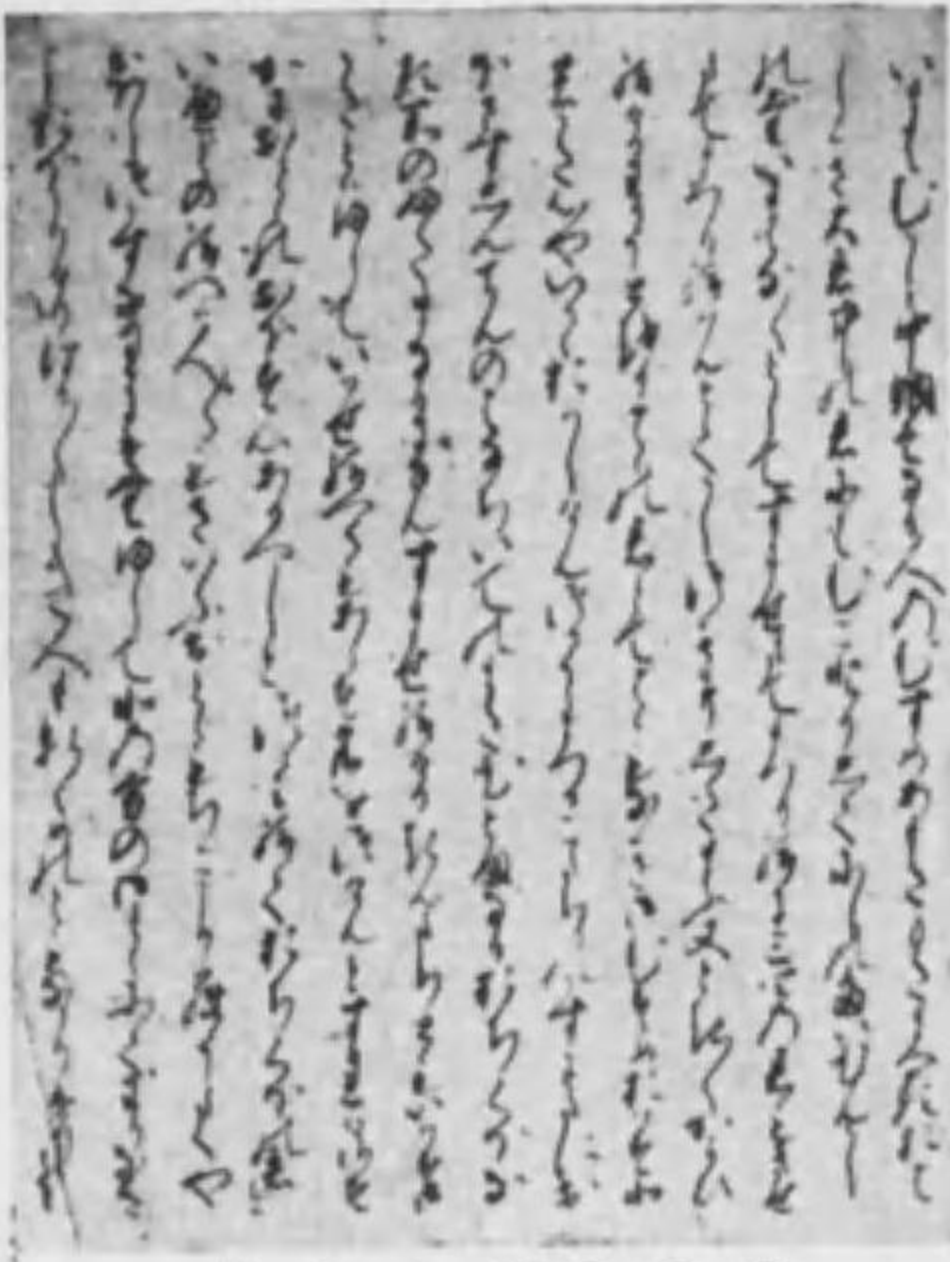


木正しりし日の秋

て来る「白しぼり」は極めて多くのものを祭...

【御田植祭】(別名)「御田植」...

自分の叔父の典助といふ六十ばかりの老人に見張りさせ、姫君を息ふまにせよとまで許したが、阿漕の許に依つて、姫の身は漸く事無きを得た。中納言一家の人々の石山詣での不在に乗じて、或る夜、少将は姫を父の邸から救ひ出し、密かに自分の邸にとりこめ、いよいよ深く契つた。北の方はそれとは少しも知らず、少将が内外に聲のあるを聞いて、四の君の姫君として迎へ入れようとした。少将は日頃から、落葉の姫に對する北の方の冷然な仕打をひどく憎んでゐたので、折こそよけれ、大に怒つてやらうと、自分の代りに兵部少輔なる者を赴かした。左近少将のお出でとばかり、中納言方では、一家を駆けて喜んでゐるが、三日の「ところあらはしに初めは雲のやうに白く鼻はいららまきて首は長く、まるで辨紙の駒のやうな顔つきで、世の人が擧げて面白の駒ともてはすすしれ



者であつたと知り「あゝこんな男と契つたか」と四の君は、ひどく後悔したが、既に因果の風を宿し間もなく女の子さへ生んだ。三の君の許へ通つた娘人の少将（世の中の流れ者と相契などと言はれるのは面目に關すると、その後はすつぱりと契を絶つてしまつた。そこで報復の意味もあつて、左近少将はこの娘人の少将を自分の妹君の夫として迎へた。また北の方が、女を引きつれて清水へ参詣すれば

その車を駛させ、祭の見物には車を引退けさせ、それを通つた典助をば死ねばかりに打ちめさせたりした。なほ落葉の君が亡き母君から承けた三條の邸を、姫の行方不明の今日にも我が物と中納言が修繕して、今日明日にも移らうとしてゐると、少将は從者にこれを襲はせて、奪ひ取つたりするなど、中納言一族を苦しめた。然し、心の優しい落葉姫は、繼母等に對する少將の報復があまり執拗なもので、幾度もそれを押し止め、懇しい父君に

と知つて、寧ろ當然の報であつたと、却つて心癒しく思つた。北の方の長男は久しく越前守の任にあつて、かうした事件を少しも知らなかつたが、今このことを聞き知つて烈しく母を責め、少將の恩顧を被るに至つた身を喜んだ。次男は既に遷世し、三郎は固より落葉の姫に同情してゐたので、ここに至つて更に母の非を數へたりした。夫に背かれた三の君、自ら進んで夫を捨てた四の君など、恥しさに沈み、落葉の姫の身の上を涙みなどしてゐたが、少將の計りで往來が叶へられたのを悦んだ。北の方は、夫も我が兒もみな彼方へ心を寄する人のやうに考へて、一層落葉の姫を憎み、咀ふ心が烈しくなつた。その後、右大臣は、左近少將の名聲や人物に感をかけた、三の女を興へんとしたが、これを辭した少将は落葉の姫といふ「跡まじく、その間には多くの男女の兒がまゝにけられた。二人は相調つて中納言が現當二世の福利の爲めに盛なる八講を行ひ、七十の賀を祝つた。次いで中納言の老病漸く篤しと見て、奏請して中納言年來の宿望であつた大納言に昇進させた。新大納言は、泣く泣くその志を悦び、死に臨んで遺言で、何れも彼の君の蔭に立つて、必ずその御言に背くことな成めた。その後、少将は奏して三の君を宮中に仕へさせ、四の君を御中納言に擧せしめ、種々と深切を盡した。また、少将自身も大納言大將より左大臣を経て、太政大臣の榮位を賜はり、その子孫もこれに伴つて榮華を極めた。

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等數十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

【著者】藤原家康【解説】寛永三年八月二條御行幸の記事に起筆し、寶曆十二年七月後醍醐天皇崩御の記事に終る。その間約四十年、即ち江戸期上半に於ける堂上階級及び知名侯伯その他人物の行状等数十件を綴りした。餘中の人物は、九條尚實・藤原前親・藤原公純・藤原宗隆・近衛尚實・鳥丸光風・花山院隆興・冷泉爲久・武者小路實隆・冷泉爲村・菅原在家・徳川光朝・細川信實・松平乗賢・隠元・明栄・大雅堂・狩野信直・源田源一・望月長季・由緒書・藤原宗隆・伴泰三・源田源一がある。この外に秀吉・清正・徳高等の逸事、國姓爺の事蹟など興味の多い記事に富む。文章は雅文體で頗る達意である。巻末に文政六年未年十一月歿書之主麻生知俊の識語がある。本書傳本少なく餘り世に知られない。(和目)

代初期、假名草子の新作が上梓せられるに混じり、殆どそれと同じ體裁で御伽草子も亦大抵横行せられ、特に明解・真治・寛文頃に最も盛に刊行された。寛本としても勿論並び行はれた。なほ前記二十三部編の刊本は、紺表紙の御伽草子で、これが御伽草子の普通の體裁として知られてゐるものである。明治以後刊行のこの種書籍としては、今泉定介・島山隆雄校訂「御伽草子二編」萩野由之輔「新編御伽草子」二卷、平出源二郎校訂「室町時代小説集」(御伽草子)(有朋堂文庫)、日本文学大系第十九卷「御伽草子」(名著文庫)、島津久基編著「近世小説新編」初編等。

【性質】平安時代の抒情物語の流れを承け、一方江戸時代の假名草子に連る。概して童話的作品的なものであるが、純童話といふよりは、廣汎な意味の老幼婦女の慰み話、即ち謂はゆる御伽噺である。作中の量は多し、題材も多様で、且つ一作目の中に數種の要素成分を含み、單一な内容でないものが多いが、構想は大抵類型的で詞章も定型を脱せず、思想も幼稚で、中には殆ど繙讀に値せぬものもある。たゞ及記物・童謡・舞曲と並んで、従来あつた説話及び當時の説話が、自ら其處に集成せられてゐる點と、作家の個性が尠減してゐる代りに、無名群小作家の小説乃至國民の共同製作であり、従つて尠らざる民衆の心を映し、聲を發してゐる點にその特色がある。今主題に就いて便宜的に大體の分類を試みれば左の如くなる。

- 一、童話(一寸法師・物真太郎・羅羅童子・文正童子等)
- 二、寓話(狐の草紙・鹿嶋一知海等)
- 三、異種物語(イ)擬軍記物(義経・源平合戦等) (ロ)擬歌合(鳥歌合・調度合等) (ハ)擬愛物(お世直し・よころよ玉童の草紙・御伽の宮等) (ニ)本地物(繪起物)童話の本地(鳥羽門の本地・鳥野の本地・月日の本地等) (ホ)佛敎法談物(おしお石・寶篋長者・大佛供養物・佛・胡蝶等)
- 六、道世物(イ)發心願(御成り木・おきき等) (ロ)擬僧侶(三人法師)
- 七、戀子物(おしお石・お月物語・若殿・草子小僧等)
- 八、戀愛物(イ)異性愛(源平合戦・今宵少將物語・源の中将・給風村等) (ロ)兒物語(鳥山山・源・お世直し・お世直し等)
- 九、歌物語(和歌式部・小町草紙・源平物語・伊弉諾・伊弉册等)
- 一〇、怪談(イ)變化物(化物草紙・付喪神・御伽草子等) (ロ)怪談(お世直し・木曾丸・お世直し・お世直し等)
- 一一、靈驗(お世直し・お世直し等)
- 一二、英雄(イ)怪談(お世直し・お世直し・お世直し) (ロ)英雄(お世直し・お世直し・お世直し)
- 一三、武人傳説(お世直し・お世直し・お世直し)
- 一四、復讐(お世直し・お世直し)
- 一五、修行(お世直し・お世直し)
- 一六、祝儀物(お世直し・お世直し)
- 一七、以上各別項

右の何れの種類にも屬せしめ得ないものもあり、又以上の諸例中にも互に交錯重複するものもある。物真太郎は本地物でもあり、幻夢物語には復讐でもあり、「狐の草子」は怪談・佛敎法談物・佛・胡蝶等。

【時代との關係】軍記物・童謡・舞曲等同時代の文學と同様、近世思潮を如實に反映してゐる。特に佛敎の通俗説法と佛敎倫理の宣布の意味が濃厚に現れ、各篇の結文にさうした意味の詞が常套的に附せられてゐる作が多い。本地物と修行譚の多い事は又同じ傾向を語るものであり、この二つの精神は歴々混和してゐる。単純無知・鈍感な時代大衆の愚問・王氣分の憧憬は貴族階級の感傷であるが、同時に新興階級たる平民の伸張して行く勢力が看取される。「羅羅氏」「文正草子」等平民の出世譚があるのがそれを證する。

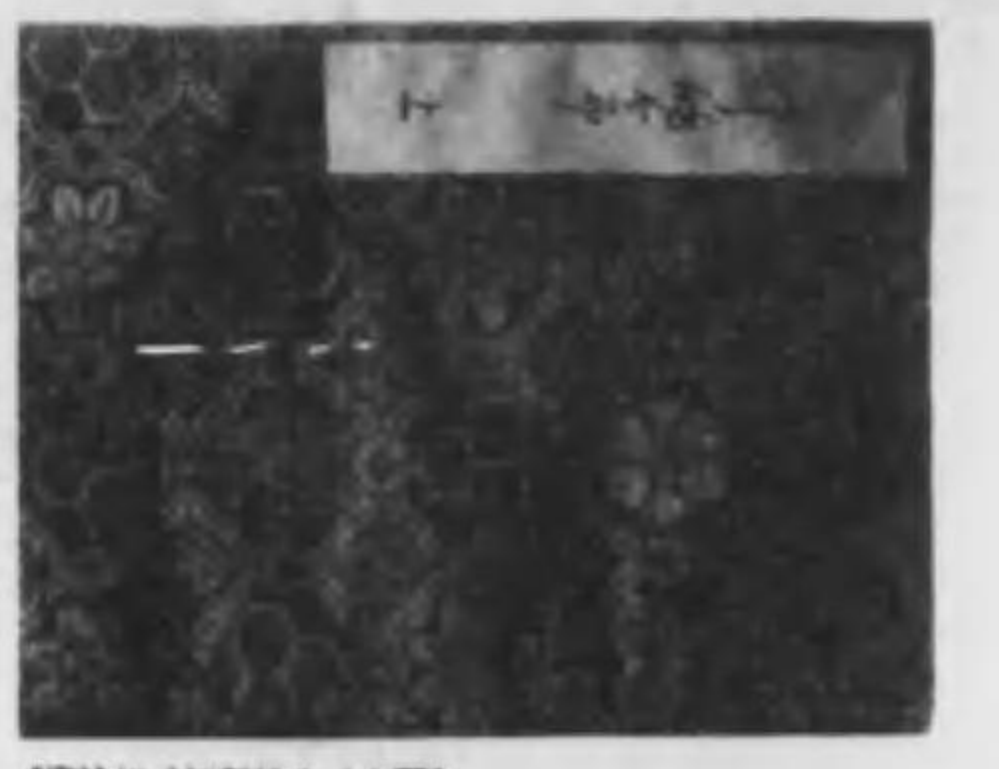
【假名草子との關係】體裁・内容・表現・思想、何れからも假名草子との境界は模糊としてゐる。兩者の中間に位置する如きものも少くない。「三人法師」なども假名草子に近く、「御伽草子」(法師草子)も假名草子に近く、假名草子として取扱ひたいからゐる作である。御伽草子に多少の特色を加へて出来た假名草子もある。「よころよ玉童」を「源平物語」の「お世直し」(各別項)に於けるその例である。御伽草子の稱と假名の稱と交錯してゐる事が已に示すやうに、江戸時代初期は兩稱が并行し相重なつて行はれたと見べきで、寧ろ當然の現象である。「御の本」は元來お世直し舞曲の詞章であるが、混雜の草子としても行はれ、これ亦御伽草子との混在を示してゐる。「濱出」が二十三篇中に見出され、「築島」が新編御伽草子中に

收められてゐるのは、この事實を語るものである。「大徳冠」「夏清」「お世直し」など奈良傳入りで御伽草子と全く同じ體裁の「御の本」も數種保存してゐる。題材・表現及び思想なども御伽草子と多くの共通點を有してゐる。

【價值】過渡期的な所産で、藝術作品としての價値あるものは殆ど皆無と云ふも不可ではない。大衆文學としての意義がその本質である。時代思潮と世相、及び説話研究の資料として貴重なるものを提供し、又假名草子から浮世草子へと發展して行く新文學の萌芽を含み、その動向を暗示してゐる文學史的價値は尠くない。貴族文學と平民文學とを繋ぎ、御伽草子独自の雅致ある平民趣味とナンセンスな思想とはまた捨て難いものがある。なほ「三人法師」の如き、御伽草子としては出色の作も稀にある。【影響】「よころよ玉童」が「お世直し」となり、或は「三人法師」に倣つて、「七人比丘尼」「二人比丘尼」「四人比丘尼」等が出た如きは、假名草子への直接影響の具體的な例。御伽草子といふ側からは赤本・黒本類へ、又佛敎特長・雄辯・怪異譚等の素材の點から、讀本・草紙類へ直接にも交渉がある。更に「梵天國」「物真太郎」二小教説「酒師草子」をはじめ、御伽草子そのまゝ、或は多少改作せられて初期の淨瑠璃の臺本として用ひられたものが多く、更に完成後の淨瑠璃の正本にも題材的・意趣的な影響を與へてゐる。

【參考】古物語目録・山田和郎編「古物語目録」考釋東方○古物語類字彙・黒川幸村(東京大学出版部)○古代小説史長谷川龍平○近世小説解題平出源二郎○御伽草子古書考・鎌倉室町時代文學史 藤岡大祐 ○日本文学大系第十九卷

(一) 子草伽御



廓太島浦 本繪良奈



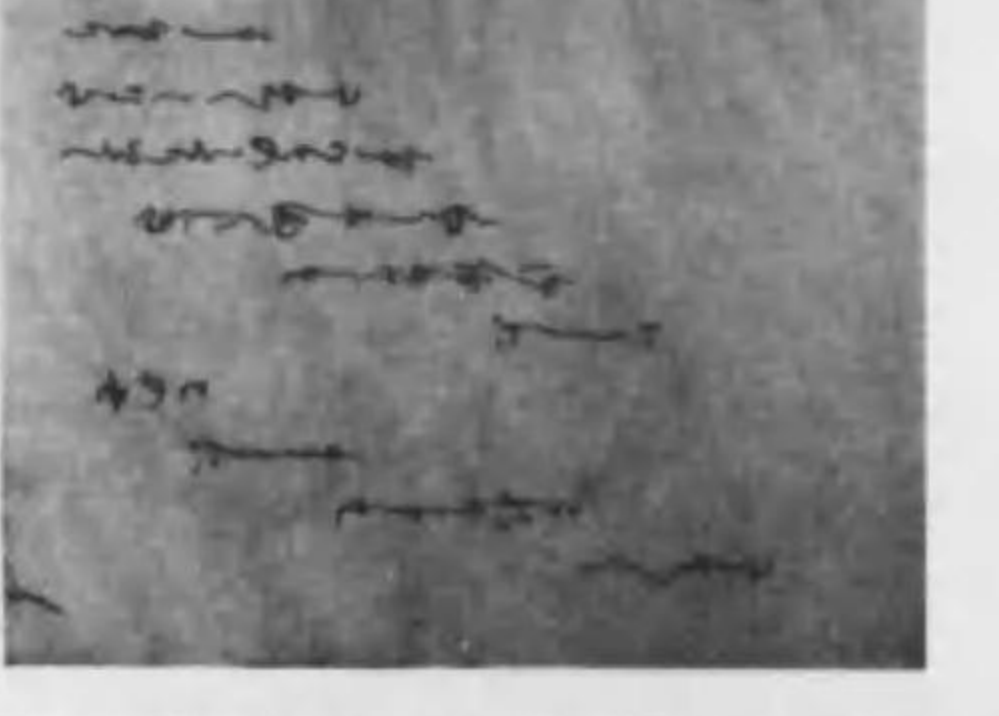
東内の物天 本繪良奈



(圖一尺四寸五分)



廓太島浦 本繪良奈



東内の物天 本繪良奈



(圖一尺四寸五分)

(二) 子草伽御

奈良繪本 天神



奈良繪本 天神



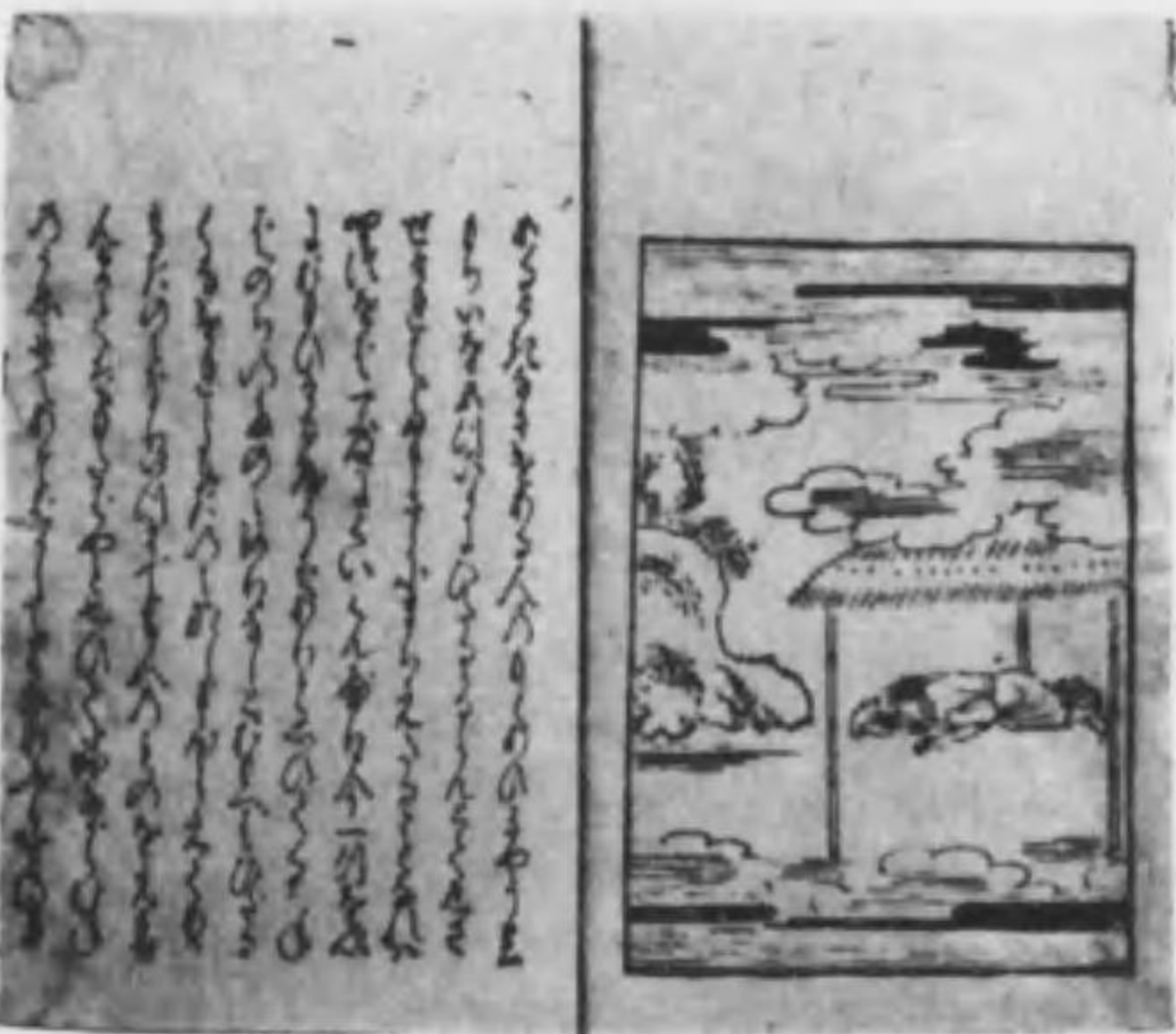
版本一寸法師



版本一寸法師



版本物異太郎



版本物異太郎



版本一寸法師

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽名代紙衣 尾上八郎、浮世草子
 大本六册【作者】江島其環【本編】尾上八郎
 名代紙衣【刊行】元文三年正月、京町通、
 原上町、菊屋七郎兵衛板【諸本】其環自筆、
 作集上巻(興常國文庫)所收【解説】この作
 品は、「女侍門七人化装」「御伽草子」等と共
 に、歌舞伎劇本の一つである。内容は六巻
 六話より成り、何れも當時評判の高かつた世
 話劇を翻案したものである。一之巻は風三右
 衛門の吉野身請の狂言の語、二之巻は大和屋
 其兵衛の御伽の語、三之巻は揚巻助六の語、
 これは俳優の名はないが、恐らく江戸の二代
 海老蔵の御伽より取つたものと推せられる。
 四之巻は山崎與次兵衛の語、これは近松の淨
 瑠璃などが種と思はれる。五之巻、坂田藤十
 郎の花吹の狂言、六之巻も同じく藤十郎の夕
 陽の狂言の語である。これらの狂言は悉く富
 時喧嘩されてゐたもので、これを草子化する
 ことに依つて世人の喝采を期待したものと考
 へられる。二之巻の御伽の語を見るに、揚巻
 の御伽久兵衛は新町丹波屋の松山になじみ、
 一度は夫婦となつたが、不幸にして松山は二
 度度勤めをする身となり、遂に仙臺の大庭に
 身請されて行く。久兵衛はこれを知らず、松
 山を訪ねると、もう居ないので、失望の極、松
 山となり、松山の幻を見つゝ水に落ちて果てる
 といふ筋である。他の五話は皆めでたき結末
 に終るが、これのみは哀しき破滅であつて、最
 も御伽を愛せしめてゐる。(吉田)

おとぎ

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

御伽 尾上八郎 ○近古小説新考 尾上八郎
 五〇御伽、假名、御の草子、日本國語、國文學、
 本質研究、〇御伽草子、尾上八郎、中世文
 學、〇御伽草子研究、尾上八郎、日本文學、
 學、

(一)の四、木偶人と語る(六)の(一)、藤原の怪女六の三等がある。福ひきの赤六の四と黄金の精六の五とは目次には二篇に分れてゐるが、本文は一つに纏いた話になつてゐる。前半は戀愛説話であり、後半は物の怪説話である。各篇の題材變化に富み、筆致また暢達、よく短編小説としての體を成してゐる。藤島七郎が奇病(二)には狂言の白藏主を絡ませ、花形のかみ(五)の(一)の冥府説話には羅漢五人男を絡ませてゐる。着想に非凡の點多く、一例を挙げれば、雲霞の妖怪(四)の(二)の如きがそれである。鶴取兵衛が行違つた人間は口中から酒を吐き出し更に情緒をも吐き出す。そして醉つて眠つてしまふ。その際今度はその女が自分の口から男を吐き出す。最初の男が眼から覺めさうになると、その女はあつて、吐き出した男を呑みこんでしまふ。眼からさめた男はその女を呑みこんでしまふ。眼から陳腐な説話を巧に機軸を始して新らしき粉袋を施してゐる點は、本書の一特色といひ得る。(小島)

御伽婢子 (おとく) 假名字「十三巻」(作者) 櫻井文子。序文に「千時寛文六年(千七百九十一年) 松雲は共に了意の別號である。(名譽) 別號には『御伽婢子』とあり、自序には『御伽婢子』となつてゐるが、普通には『おとく』と云ふ。小兒の玩具の名を取つてつけたもの、駄本(書)の『刊行』寛文六年三月、京都秋田屋平左衛門(路本)初版と同版、刊記も同年で、書肆だけが大阪の西澤兵衛になつてゐるものがある。多分再版であらう。また半紙判の別版が元禄十二年、神樂など略と同じに複製されてゐて、この版の文政九年の再版もある。

近世文藝叢書第三所載。【解説】全篇十三卷六十七話を収めた假名字には珍らしい活潑な書である。巻首作者の假名字と、雲霞と云ふ人の漢名の序とがある。假名字のうちに、花山天照の太極門、宇前大納言の松風園、竹取、うつけの御殿の巻を初め、怪く奇知の巻を記せる所を拵つて數巻に達する。然るに此御伽婢子は、古くは古くはあらざりていつたしこむを體てあつてゐるものは、是れはと云つて時折新解の作意をほのめかしてゐる。即ちその新解の作意とした人は、了意以前に既にあつた。「奇異雜説集」を見て、この書は天文の頃、江州佐々木氏の幕下、中村登後守某が撰したもので、登後守某に『新撰御伽婢子』といふ書あり、奇異なる物語を集めたる書なり、今一二條を取て、こゝにのするなり」とあり「金風説記」の牡丹記に「中條海記」等がその中に採り入れ、林道春の『怪談全書』にも「金風説記」が収められてゐる。斯く「御伽婢子」は天文年中流來して以來、學者試みに鑑賞されその新奇さ一般に頌たんと試み、未だ刊行に至らなかつたが、了意は「二抄撰でなく、略と全篇を御伽婢子」に譯出して刊行した。尤もそのうち一二の除外はあり、又「御伽婢子」には他から取入れたものもあるが、その主なものは「御伽婢子」の

程のものなかつたが、本書出づるに及んで怪異小説の流行を招來した。【影響】假名字子、やがて現はれた怪異小説を悉く「御伽婢子」の影響と見るは當らないが、一二その感化の濃厚なものも挙げると、延寶刊行の『會昌判怪談』、天和三年刊の『新御伽』、享四年刊の『宗祇國物語』をはじめ「御伽婢子」の個人形「怪談御伽」などは、内容は鬼に角、その作意を學んだもので、了意も亦その體として「御伽婢子」の作意を著した。また林文會は了意後編で、その著作は怪異小説に限られ「玉樹子」「玉子」の二篇は、その系統に屬するものである。(水谷)

【參考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

おとく (おとく) 假名字「十三巻」(作者) 櫻井文子。序文に「千時寛文六年(千七百九十一年) 松雲は共に了意の別號である。(名譽) 別號には『御伽婢子』とあり、自序には『御伽婢子』となつてゐるが、普通には『おとく』と云ふ。小兒の玩具の名を取つてつけたもの、駄本(書)の『刊行』寛文六年三月、京都秋田屋平左衛門(路本)初版と同版、刊記も同年で、書肆だけが大阪の西澤兵衛になつてゐるものがある。多分再版であらう。また半紙判の別版が元禄十二年、神樂など略と同じに複製されてゐて、この版の文政九年の再版もある。

譯文から成つてゐる。即ち「御伽婢子」から「御伽婢子」に取入れた話題は次の如くである。
御伽婢子
(巻一)水宮慶景録 龍宮の上機(巻一)
三山嶋地志 黄金百兩目
華亭逢故人記 菅谷九右衛門(巻七)
金風説記 眞紅の服帯(巻二)
聯芳樓記 眞紅の服帯(巻二)
(巻二)令狐生寫夢録 地獄を見よ(巻四)

序自(子)御伽婢子
天台助慶録 十津川の仙樂(巻二)
羅漢遊樂家漫記 金閣寺の幽霊に契る(巻三)
牡丹樓記 夢のきり(巻四)
清浄寺奇譚 夢のきり(巻四)
永州野脚記 邪神を責め(巻八)
申陽洞記 遊女宮木野(巻八)
翠々傳 幽霊書を父傳につか

【参考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

【参考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

【参考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

【参考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

【参考】新編新話四卷(廣安元年刊)○奇異雜談集 五卷(中村天竺)○國譯漢文大成(文庫十三卷)○江戸文學研究會叢書
乙州(おとく) 佛人【姓】川井(河合かとも) 江州大津の人。智月の子である。父佐右衛門病死の後も荷問屋を水けし、たむたむ暮らすのほほえみである。
芭蕉から形見として自筆像を買ひ、東武行の折、芭蕉の發端で鶴屋の巻が巻かれて居り、芭蕉終焉の際は忠實に介抱した。芭蕉没後、路過木曾等と四十九日間の道程に餘念なく、その像をかけて懐袖の深にくれた。元禄七年五月、芭蕉が最後に行脚に、京都の乙州の寓居を訪れて共に遠立とうとしたが、乙州に都合があつて行けず、芭蕉一人先立つたところから、一入思出が深かつたことであらう。「猿蓑(別題「ひき」)(別題)」等の中のもので、智月と共に近江蒲生中、忘れはならぬ人である。(おとく)

次、工藤新三郎(源兵衛)の源兵衛は八幡三郎(中村五郎)...

由兵衛は源兵衛の業と目星をつける。(三幕) (吉原奥州の部)...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

資料を併してゐる。【系統】梅の由兵衛は早く流行して...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

【梅】梅の由兵衛は古くから津村宗十郎の家蔵であったが...

鬼貫句選

鬼貫句選(おのゝ) 俳諧集二冊(初集) 鬼貫句選(おのゝ) 俳諧集二冊(初集) 鬼貫句選(おのゝ) 俳諧集二冊(初集)...

尾上伊太八

尾上伊太八(おのゝ) 戯曲三幕六場 尾上伊太八(おのゝ) 戯曲三幕六場 尾上伊太八(おのゝ) 戯曲三幕六場...

尾上菊五郎

尾上菊五郎(おのゝ) 俳諧 初代から 尾上菊五郎(おのゝ) 俳諧 初代から 尾上菊五郎(おのゝ) 俳諧 初代から...

己が罪

己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳 己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳 己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳...

原

原(おのゝ) 菅承相も屋々演じた。 原(おのゝ) 菅承相も屋々演じた。 原(おのゝ) 菅承相も屋々演じた...

尾上伊太八

尾上伊太八(おのゝ) 津藩の若い武士と尾上 尾上伊太八(おのゝ) 津藩の若い武士と尾上 尾上伊太八(おのゝ) 津藩の若い武士と尾上...



(平助)第五菊目代五

尾上柴舟

尾上柴舟(おのゝ) 歌人(本名) 八郎 尾上柴舟(おのゝ) 歌人(本名) 八郎 尾上柴舟(おのゝ) 歌人(本名) 八郎...

己が罪

己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳 己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳 己が罪(おのゝ) 小説(作者) 菊池蘭芳...

に傾心した。彼は福島の善封家に生れ、俊才の名があつたが、女を弄ぶのを何とも思はぬ青年で、偶々同郷の大木小枝子が某校教師で...

【解説】この作は當時の新聞小説中、遙かにレベルを抜くものであつた。その成功した點は可憐な娘を中心として心理描寫に在り、時代の流行、趣味などを採り入れ、悪戯が面白く、...

【解説】この作は當時の新聞小説中、遙かにレベルを抜くものであつた。その成功した點は可憐な娘を中心として心理描寫に在り、時代の流行、趣味などを採り入れ、悪戯が面白く、...

者もなく、殊に當時婦道して来た家庭小説別題中の傑作として大に迎へられた。【附記】「己が罪」は不知歸らにて當時最も多く讀まれたもので、歴々新派によつて上巻され...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

ある。無能不敏は人中で手塚をかむなどの無頼方をあらはしてある。本論の論語を金儲けの字をつけて地獄の字を金儲けに返を書いて...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

この書である。前部の梅岡平角の序、面館の雇來會席の跋がある。前部で刊行されたものであらう。【乙七部集】(伊藤文庫)にも流行七部集(同上)にも編入されてゐる。(寶川)

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

日本歌集(全書)所収【解説】古風を理想とした師の眞傳の説と、自分の歌との矛盾に對する辯明を、「古今集」を理想とする自己の立場を述べてゐる。その師の歌と、みづから歌とは異なるやうに思はるゝはかなる事にかかといふに答へて、師の眞傳は、萬葉のよき歌をとれ、「古今集」の歌は「萬葉集」のよき歌をとれ、「古今集」の歌は「萬葉集」のよき歌をとれ、その以後は幾有射以外、心にかけるといふ風を教へられたが、詠まれた歌は古今集より遙か後世風のものもあつてゐる。師の歌のまゝに従つて来たが、自己の作歌には後世風の混つてゐる。それは時世の然らしめる所である。かつ古は幾言のみで、心のまゝに詠んで来たが、後世は幾言が多数になり、つとめてみやびにだやかに詠む必要が起つて来たのである。心をば古人の如く素直に雅にし、その純粋な心から言ひ出づべきわざである。變は時代に隨はず、よき歌を味ひ自己の姿とすべきである。常にとなへて心さ(清らかに覺ゆるのは「古今集」の大歌所詠である。「古今集」の體裁は「萬葉集」の相聞歌に近く、味は深いものがある。その以後の體裁は深いやうに見えても味は淺い。近來古體と體とをわけて詠む人があるが、それは人の口實である。歌は人に詠るためでなく、よき歌を本として思ふのであるが、人に歌ふるには標準を示さないと迷ひとなる恐れがあるので、師の歌のまゝに言つてゐるのであるといふ論言で、數回より自由主義的な所も見えるが、「古今集」の修正を理想としてゐたことは十分窺はれる。【價值】千代は歌人として最も盛名があり、「萬葉集」の如き普及性のあるよき註釋書も出してゐるが、

歌論書としては「芳宜歌話」その他三零類のものしかない。同じ論議でも春海の方が常に精確な議論をしてゐる。が、とも共春海と共に江戸派を代表して一世を風靡した古今集の歌人を代表して一世を風靡した。この書も亦一讀すべきであらう。(貞川)

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

【小野篤子】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【作者】式亭三馬(名義) 小説(一冊) 【小野篤子】式亭三馬(名義)...

料第一編(國書刊行會本)、酒落本大系第九編所載。

【内尋】深川通ひの舟の中。客の花香は、船頭を相手に深川の遊びに就て語る。...

【解説】作意は、深川の海に海道の美玉を置きつつ、新に歸路の穴をさがすといふ序中の言で明かである。...

【思ひ出】明治十四年六月東京堂。白秋全集第二巻所載。...

和良路と改題して出版された。作者は山根高直発行となつてゐる。刊行の年月は不明であるが、旅行文學の流行がこの題名の變更なきしめたことは推測するに足る。...

【思ひ出】明治十四年六月東京堂。白秋全集第二巻所載。...

となつた胸井と題し、同家に寄寓することとなつたが、條約改正中止運動に奔走した胸井は、保安條例によつて、皇城三里以外の地に退去を命ぜられた。...

らしいものがあり、それに向かうに事實を弄へ直し、勝手に排列した意味からは、小説と言へぬでもない。...

【思ひの儘の記】自筆本は宮内省圖書寮蔵。日本圖書大成所蔵。...

天皇御宇の事實が最も詳細を極めてゐる。往世間未傳のものがあり、所々に大事表の如き記事がある。...

この新詩體の間に表はれてゐる。この妙たる譯詩は、やがて幾谷を生み藤村を生み、擬古派詩人を生み、明治三十年代の多くの詩人を生んだ。...

て立ち去つた。供養の日出た後、唯一人むねむつはその面影を忘れず、問々の情に堪へ兼ねた末、清水に祈念を籠めたる事となつた。...

り切つて、又偶然と表を隠してしまつた。哀れと思召した佛達に召されて浄土へ参つたのである。その路すがら、大剣星・やまひ星・星・朝星と次々に道を通つた。長い月日の間、忍耐努力の甲斐あつて、遂に如来の御前に於ておまけに再會し、喜びの涙に咽んだ。佛も御感あり、五郎は愛樂明王、おまけは佛前天と現じ、越後國高野寺と云ふのは、この二人の本地である。この物語を讀む程の所には、十方の諸佛天降り守らせ給ふとの事である。

【参考】近古小説新編(考説) (鳥津)

表組 (一) 歌曲(名義歌曲) 歌曲に於て組曲を多量に採る古曲の一で、裏組に對して古く且つ正しいもの集團に名づけたもの八種(八曲)の制を「表組」「心組」「天下太平」「海無難」「雲霞」の六曲から成る。近代に至つて、これに歌のない六段之調子を加へる事になつた。歌の数は、六曲通計三十七首。

「表組」の曲は七段七首より、他は六段六首より成る。歌は何れも次の如く小規模の形に近いもの。

高田といふ草の名 荻科といふ草の名 高田日在園ありて 冥加あらせたまへや。(鳥津)

春の花の御曲 花風地に梅花も 梅花の花は同じ曲を唱へ。(同上)

朝の朝 夢も結ばぬ夜は夜。(同上)

故郷を去りて 歸て此處に田川 都島に言問はん 君はありやなしや。(同上)

微ね古興味に富んで、源氏物語に古歌から想を得てゐる。直接には「越天竺」の諸人物から採つたものがあつて、落葉組の如きは、最初の歌一つは「越天竺」に合ふので、一にこれを「越天竺」と呼ぶ(藤田) (鳥津)

【表組】(一)上巻(一)かち山事件で殺された親の子、親の敵の鬼を殺さうと思ひ立ち、種々島村の隠密宇津兵衛に頼み込む。鬼その標子を立聞して驚く。(二)子狸、宇津兵衛の意を聞かぬために、かち山(山の化)の會に案内して鬼を打たせる。(三)鬼は江戸へ出て淺草の觀音に參詣して身の安全を祈る。(四)かち山山の霊の一人息子大の放蕩者で、期當を受け、今はさる屋敷の足輕となり、藤野野右衛門と名乗つてゐるが、物頭の侍から、若君の抱替前の樂として、頭の黒い鬼の生贖を探し来るやう命ぜられる。(五)右右衛門勘當を許されて父に對面する。鬼が母の敵を討つてくれた事を聞いて當惑する。(六)鬼は三國土手で親と強敵に出合ひ、川魚料理屋の中田屋へ逃げ込む。(七)中田屋の亭主葛西太郎徳兵衛から鬼を助け、艘舟の中に隠し、親と強敵の探さうとするのを、天川屋もどきに留め、その(八)中田屋の女房お花、陰で敵を探し、その匂ひに親も強敵も浮かれて踊り狂ふ。(九)右右衛門そこへ通りかゝり、鬼を助けようとして

親善博覧會 黄表紙 三冊 十五丁十九頁【作者】式亭三馬【書名】歌川豊廣【角書】老實無欺法 滑稽妙劇【名義】角書は、黄表紙の敵討物を老實と見、それ以外のものを滑稽と見て、その二傾向を綜合したといふのである。本題は親の敵討と時香瓶とをかけたもので、その意は作者が黄表紙の正系を洒落にありとして、敵討物を否定しながら、なほその流行に追隨して、この作があることを自明したのである。

【刊行】文化二年西宮版【題材】忠臣蔵と鏡山の狂言。

【構成】(一)上巻(一)自序、二丁半に互り、當時の黄表紙界の流行敵討物に對する自己の態度を明かにする。(二)板元西宮の店前、作者三馬が西宮の主人に草紙の原稿を見せてゐる。三馬が節を屈して、流行の敵討物を書いて来て主人に出版を懇願するのである。(三)天宮の前に、福屋と災の星が敵討の物勘定をしてゐる。福屋は敵討を守り、災星は天宮の手綱を敵にひき掛けて、敵討を遂行させる事になつてゐる。(四)雲で割した河の上段には、天宮の指圖に従つて、福屋と災星とが各々手にする運の玉を、下段で對談してゐる。福屋の助と元初右衛門の腹前によららる。局之助は親が預けた刀の眼裏にぶらぶら、初右は局之助の親の遺志により、貴公の心腹を見定めた上と斷る。(五)局之助、初右の親桃井とたうと思ひ、偽りの謀で親に木の葉の小判を與へて、宇津兵衛の手引を頼む。(一)四親、宇津兵衛をおのが穴の内に招き、大薬丸を打ちかける。鬼も刀で薬丸の上から薬丸を突く。(二)五夏の頃、大薬丸を切物になつて中田屋が頼まれ、女房お花三馬の金に困じ、手水鉢に向つて無間地獄を誦し、鶴と鶯が來つて三馬ほどの恨み泥鰌を吐く。その浦鰌を反吐前大浦鰌といひ、後に江戸前と改めらる。(六)右右衛門、生贖の功によつて士分となり、父親と幸願に暮す。

【構想】 親善をかち山(山の役目)としたこととは、作者が同年の作「桃太郎後日談」の桃太郎に於けると同案である。しかも親を鬼に討たせ、その親を殺すことに於て、後日談の一條目と見られる。更にまた作者は筋の運びを芝居がかりにし、芝居の場面を取入れることに努めてゐるのは、もと／＼題材が御座り、あるだけに、わざと扱ひを仰々しくして、一段と滑稽味を加へるためであらう。殊にその芝居がかりが、洒落の風味とびたりと一致してゐる點が注目される。劇切になつたうさぎかち山(うさぎ)と、二つの鳥が出來、それが前生の鬼の恨のため、糞を泥鰌を吐いて中田屋を救ひ、それ等が反吐前の浦鰌となるなどの洒落が、中田屋の女房の無間地獄の芝居がかりと共に筋を運ぶのがそれである。中田屋といへば、當時江戸で流行の川魚料理屋であ

関んで敵討を謀る。上段には星ども因果の車を牽いでゐる。(九)中田屋(八)局之助の旅姿、國元を出奔する。(九)中田屋と桃井敵を尋ねて辛苦する。二人は巡禮となり、中田屋は置業となる。豪八は且郎が練つた骨髄賣となる。それ等の間を立派な姿の局之助が通る。局之助は或る大家に見出されて出世したのである。(一〇)豪八、局之助の家來に無體に打撲される。浪人妻の中治郎、局中の局之助に詫言ると、敵を見送る。(一)敵討、天上かち山(一)敵討、天上かち山(二)中治郎、初右衛門の陣目相繼、桃井との結婚。(下巻)(一)三馬、局之助、桃井を口説いてゐる。岩屋は局之助の變生女子、求女は桃井の變生男子である。(二)中治郎、求女は桃井の變生男子である。(三)中治郎、求女は桃井の變生男子である。(四)中治郎、求女は桃井の變生男子である。(五)岩屋、尾上の初右衛門の再会(再会)を苦しめる。(六)岩屋、尾上を草履打する。(七)雲の上の鶴、天宮、二羽の鳥にお初が尾上の文使として御門を出るのをきつかけに鳴けと命ずる。(八)尾上の死骸の傍に、お初主の敵討の決意をする。(九)敵討、御息所(在方藤八の再会)扇を開いて哀めてゐる。御座所はお初を二代目尾上とし、求女と夫縁にさせる。(一〇)三馬の書責、西宮の主人が三馬に頼むを懇願してゐる。

【構想】 三馬は當時の流行に對して、異を樹てるために、この變態的敵討物を作つたのである。その意は眞面目に一方の敵討物を排して、滑稽を加味するにある。さういふ態度から、一敵討に他の敵討を結びつけて、その間に前生後生の因縁があるとし、牽強附會な説明をしてゐる。上中二冊はその敵討の前生、下

但し、この作でも忠臣蔵を題材とする時には撰者がやゝ疎になる。故に鏡山の筋に轉じたのであるが、なほ桃井といふ名と昔の事件に於て、その筋跡を残してゐる。(山口)

親敵打腹鼓 (一) 草紙 三冊 十丁十六頁【作者】扇誠堂喜三【刊行】安永六年高尾版【書名】黄表紙百種(續)帝國文庫、黄表紙名作集、黄表紙集(近代日本文學大系)に本文、黄表紙廿五種名著名全集に本文及び繪を載む。【題材】かち山(山の化)。

【構成】(一)上巻(一)かち山事件で殺された親の子、親の敵の鬼を殺さうと思ひ立ち、種々島村の隠密宇津兵衛に頼み込む。鬼その標子を立聞して驚く。(二)子狸、宇津兵衛の意を聞かぬために、かち山(山の化)の會に案内して鬼を打たせる。(三)鬼は江戸へ出て淺草の觀音に參詣して身の安全を祈る。(四)かち山山の霊の一人息子大の放蕩者で、期當を受け、今はさる屋敷の足輕となり、藤野野右衛門と名乗つてゐるが、物頭の侍から、若君の抱替前の樂として、頭の黒い鬼の生贖を探し来るやう命ぜられる。(五)右右衛門勘當を許されて父に對面する。鬼が母の敵を討つてくれた事を聞いて當惑する。(六)鬼は三國土手で親と強敵に出合ひ、川魚料理屋の中田屋へ逃げ込む。(七)中田屋の亭主葛西太郎徳兵衛から鬼を助け、艘舟の中に隠し、親と強敵の探さうとするのを、天川屋もどきに留め、その(八)中田屋の女房お花、陰で敵を探し、その匂ひに親も強敵も浮かれて踊り狂ふ。(九)右右衛門そこへ通りかゝり、鬼を助けようとして

親といひ争ふ。(下巻)(一)鬼、艘舟から飛び出てて切腹する。(二)宇津兵衛は海人の話をうたひ、親は腹鼓を打ち、右右衛門は鬼の生贖をとる。(三)親が鬼を倒すに、親と鬼が飛び出す。(四)親が宇津兵衛及びび親を討たうと思ひ、偽りの謀で親に木の葉の小判を與へて、宇津兵衛の手引を頼む。(一)四親、宇津兵衛をおのが穴の内に招き、大薬丸を打ちかける。鬼も刀で薬丸の上から薬丸を突く。(二)五夏の頃、大薬丸を切物になつて中田屋が頼まれ、女房お花三馬の金に困じ、手水鉢に向つて無間地獄を誦し、鶴と鶯が來つて三馬ほどの恨み泥鰌を吐く。その浦鰌を反吐前大浦鰌といひ、後に江戸前と改めらる。(六)右右衛門、生贖の功によつて士分となり、父親と幸願に暮す。

【構想】 親善をかち山(山の役目)としたこととは、作者が同年の作「桃太郎後日談」の桃太郎に於けると同案である。しかも親を鬼に討たせ、その親を殺すことに於て、後日談の一條目と見られる。更にまた作者は筋の運びを芝居がかりにし、芝居の場面を取入れることに努めてゐるのは、もと／＼題材が御座り、あるだけに、わざと扱ひを仰々しくして、一段と滑稽味を加へるためであらう。殊にその芝居がかりが、洒落の風味とびたりと一致してゐる點が注目される。劇切になつたうさぎかち山(うさぎ)と、二つの鳥が出來、それが前生の鬼の恨のため、糞を泥鰌を吐いて中田屋を救ひ、それ等が反吐前の浦鰌となるなどの洒落が、中田屋の女房の無間地獄の芝居がかりと共に筋を運ぶのがそれである。中田屋といへば、當時江戸で流行の川魚料理屋であ

それを巧に利用するなど、段々と市井の流行を材料に取入れる黄表紙の特質を發揮し出したのである。名作二十三部の一。(山口)

をやまな形 (一) 滑稽(名義) 女形の人形を、やまの形を「近代世事談」その他に、人形遣の性から出た如く傳へるは誤謬である。(人形遣)

おらが春 (一) 俳書【著者】小林一茶

行したもので、飄忽居過の序、飄忽四山人(多分俳風までであらう)及び櫻痴西馬の跋がある。なほその後に、一茶の句を立ち上げた起しの懷舊連句や當時の俳人の連句句を附録してゐる。この附録は明治以後刊行のものには大抵除かれてゐる。自筆稿本は信州中野の小林家に傳はり、書影を解いて刊行されて直した。大正十四年玻璃版に附して刊行された稿本「おらが春」は、即ちこれによる。外に安政の再稿本に「一茶俳諧文集」と題を改めたものがあり、それをいまも明治に刊行したものである。活版本では大正五年親山堂後刊のものから、岩波文庫のものに至るまで数種に上つて居り、また「一茶文集」「一茶七部集」「一茶一代集(俳書大系)」その他、全集叢書類には大抵収録されてゐる。

【内容】 文政二年迄の自分の周囲の事及び感想を、大體日記體に記した隨筆文及び發句で、その中に、自分の記實に關係のある新古今の人の發句、連句、和歌等を引用してゐる。また所々に代表的な著作で、文もよく句も精選されてゐて、一茶の最上の力量の現はれてゐるものと見てよく、一茶自身も會心の著作として書いたものであらう。又これによつて一茶晩年の身邊の事情や、信仰的安任に到達した様子なども窺はれる。ただ引用の古人の作には、資料選擇の不注意の爲めか誤つてゐる。



おやの おらが

るものがあり、また一茶自筆と傳へられてゐた折紙は、「東海道名所記」中のものを加へて利用したものなることが知られて来たが、こゝに又却つて一茶の遺稿や書用紙が窺はれもする。また同書中の「我と来て遊べや親のない雀の句が、一茶六歳の時の作ではなく、幼時を回想しての晩年の作であらうことが、ほぼ確かめられて来た事も一茶を考へる上での好資料である。(實川忠司)

折紙

【折紙】古文書【解説】紙を横に半折にして書いた文書。縮く古くは無く、平安朝の後半頃頃から始まつたらしく、武家時代、殊に室町時代以後は盛んに用ひられてゐる。【種類】主なるものは公用折紙、通折紙、鑑定折紙、名字折紙である。(公用折紙)公武の諸君などから公用(賞状)は御用を通達したもので、就中、題文となつてゐるもの

Table with 3 columns: 進上, 御太刀, 御馬. Rows: 一腰, 一疋, 一疋. Includes '名字官途' and '名乗'.

Table with 3 columns: 進上, 御太刀, 御馬. Rows: 一腰, 一疋, 一疋. Includes '名字官途' and '名乗'.

Table with 3 columns: 進上, 御太刀, 御馬. Rows: 一腰, 一疋, 一疋. Includes '名字官途' and '名乗'.

Table with 3 columns: 進上, 御太刀, 御馬. Rows: 一腰, 一疋, 一疋. Includes '名字官途' and '名乗'.

は通折紙といふ。虎野忠兵衛文書目録(三)三行分、徳富立有可事御所用紙、其紙は右申渡候紙。天正十八年 九月十七日 香取右近衛 宗満(在野)

折紙は「目録」とも「注文(二)書」とも稱せらるゝ場合がある(目録・注文は必ずしも折文にのみ書くとは限らない)。何れにするも、折文を更に縦に三折して、初に進上とか目録とか書き、次に中央部に品目数量等を記し、次に以上(目)と書き、最後に署名するものが普通である。また折紙の種類(御用・鳥子・書引合紙等)、その折方(横式・字配等)、當事者の身分や格式の流儀に依りて種々の故實がある。

【参考】八雲御抄(實業折紙)歌羅衣(四)【折句】八雲御抄(實業折紙)和歌【解説】短歌の毎句上下に文字を入れ、物名などよみこむのをいふ。例へば、「あふさかもはては往來のせきもみすたづねとひこきなばかへさ」は「あはせたまきのすし」といふ物名をよみ入れたのである。遊戯的和歌の一種。【参考】鳥羽抄(八雲御抄)【折込】鳥羽抄【解説】課題の二文字を一句の中に読み込むもの。例へば、

【進上】太刀・馬・錢その他種々の物を贈進する時に用ひられるが、特に太刀・馬等を進上するものを太刀折紙・金錢を進上するものを要脚(或は鳥子)折紙と云ふ。その品数に依つて三色・四色・五色等の區別がある。又この

【鑑定折紙】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【折句】【名義】和歌・俳句・川柳等に於いて、各句の上に物名を二文字づつ置いたもの。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【折句】【名義】和歌・俳句・川柳等に於いて、各句の上に物名を二文字づつ置いたもの。【伊木】

【折句】【名義】和歌・俳句・川柳等に於いて、各句の上に物名を二文字づつ置いたもの。【伊木】

た別の紙又は布帛を加へたものもある。古くは後の表紙の代りに、幅の廣い紙を附け、その紙を以て、左右からその書を包み、表で合せて恰も袂を以て覆つたやうな形にしたものがある。その紙幅に竹を挿み、緒をつけて全體を巻くやうにしたものもある。書名は、表紙の中央に題するものも多く、題巻を用ひるものが少なくない。宋版の一切は、多くは折本であつて、我が國でも、佛經の類はこれにならつた折本が多く、今日までもこの風が残つてゐる。又、巻子本を折本に改めたものも少なくない。

【特選】巻子本(前項)から出たもので、これと特徴を同じくする點が多いが、巻子の勢が省かれたのは大なる進歩である。(一)巻子本に比して巻子の勢なく、巻する所を直に抜くことが出来る。(二)全部を一時に開く事が出来るが、巻子本に比しては幾分不便である。(三)長く連続したものを寫す事は出来るが、折目がある爲めに不便な點がある。(四)裏面を利用して文字を寫す事は不可能ではないが困難がある。(五)水く使用するうちに折目がくづれる事があり、又敷多く積み重ねる事が出来ない。【沿革】別項(圖書)中(歴史)参照。

【附記】折本に極めて近く、その種類と見做すべきものに「説書」がある。【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

【御用】書巻骨董などの鑑定書である。鑑定は折紙に限らず、堅文に書いたものや、袖札(はらふじ)もあるが、折文に書いたものが所謂折紙である。普通鑑定品の目、作者名、乃至價格批評等を認めて署名を加へたもので、日付・宛書等もある場合がある。【伊木】

たもの。(一)音韻大分五巻。音韻大全の解説。(二)助解音韻考(二巻)。もに、とは、等、所謂助解四十七巻音韻考から解説した

る。その主なものは、各人物について身分性格を考へて語り分けるべき事を説いてゐる。次に冷泉節の事、細戸節の事(「ホリ」の事)

ゐる。いづれも極めて簡単に要を得た記事である。いづれも極めて簡単に要を得た記事である。いづれも極めて簡単に要を得た記事である。

ヒザガサアト云フ事以下五十五則。巻五にヤヨヤサト云フ事以下九十六則を収めてゐる。當時の俗衆の常識教養の具であつたらう。

心る。次に手習詞歌について、まづ「あめつち」の詞の出典を擧げ、語句を解釋し、次に「あめつち」の詞は、奈良朝末から天曆の頃まで行はれたもので、伊呂波歌の源流と見るべきものであると斷じ、次に「大菩薩」の歌をあげ、「あめつち」の詞と伊呂波歌の中間にあるものであると説いてゐる。

となるものである。本書はその一部の批評は、吉澤義則氏の「國語國文の研究」、高野辰之氏の「日本歌謡史」等に見えてゐる。音韻大全(中) 明治九年十一月。音韻全書別

やみ等は、或る刺激に基いて反射的に生ずる無意識の音聲である。(「有意音聲」)これに反し、或る音聲の隨想表現及びその音聲を出す時の、器音の運動より生ずる運動感覺、位置感覺、觸覺の表象が記憶に残り、この記憶表象を目的にして行ふ發音作用は有意的行動であつて、かくして生ずる音聲が有意音聲である。

特殊具體のものであるが、言語の約束習慣を習得した人は、その約束習慣に規定された性質を含む音聲を發することが出来る。即ち、その團體に屬する他の人々と一定共通な性質を有する音聲を發することが出来る。團體の各人は、この一定共通な性質を主として音聲表象とする。音聲研究者は、この表象を内省法によつて觀察するが、又は或る個人或る場合の特殊具體音聲に就き、約束習慣となつた一定共通部分に主として注意する。故に言語音聲はこの意味に於て抽象的である。

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

【著者】小野高尙。通稱忠左衛門。假山・竹齋。又侯と號した。江戸の人で徳川幕府の大御番を勤め、學は和漢に通じた。寛政十一年十二月十六日歿。享年未詳。著述に「古今類聚名物録」(本朝兵軍記)「民間故事集」(萬葉集註)「分門和歌」(新編國語故事)「東武編年要略」等がある。(和山)

Object, object の如く「」の符號の部を強くするは強さの區別である。これ等は意義を表はすため定まつた約束習慣の一つで、やはり抽象的比較的に某音を他音よりも長く、高く、又は強くするといふ事だけが定まつてゐるのである。...

【音聲學】(英) Phonetics

【國】Die Phonetik (德) La phonétique (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

が一般音聲學理論を立立てる役に立ち、一般音聲學理論は更に特殊國語の音聲學研究に助を與へる。

【部門】一般と特殊といつれにせよ、その研究は種々の細かい部門に分つことが出来る。...

【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

十九世紀半以後である。昔から文法研究家の著に音聲の記述があるが、それは文字を主に成立したものであつた。十九世紀前半、言語學の成立した頃、...

見える言葉(Vocal Speech)と題する書を公にし、各音を音聲器官の働によつて説明した。この方法が今日まで直接間接に音聲學研究法に大なる影響を與へてゐる。

【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...



【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

【音聲學】(英) Phonetics (法) La phonétique (意) La fonetica (西) La fonetica (葡) A fonética (葡) A fonética (葡) A fonética...

つた。故あつて遊女となり、天平太と契つて月花・雲光の雙子を生む。二女は肥前の武士に...

て却つて破れ、秀蘭の勢ひ日を追うて盛んとなつた。【構想】「水滸傳」の結構を移して、世界を我...

程である。和順の教を本として父母・夫・舅姑によく仕へ、家政を治めることが説かれてゐる...

いて聞くと、助之丞は江戸に行つてゐるといふので又江戸に行き、幸ひに尋ね當て、こ...

【後述】(口明) (加茂社前) 淳和帝の御子八雲皇子は、日陰の御孫生故とあつて、強...

郎の妹であり少將の幼馴染であるお三輪が仲居奉公として居る。少將はその昔お三輪に與へた家の實...

を讀んで解してしまふ。と見た宗五郎は、寢息を覗つて瀧の上に張つた玉を切る。宇賀王は...

近松半二の浮城瑠「妹背山婦女庭訓」(前編)に教へる所が多い。【構想】(守備) 女非人綴錦...

三、纏まつた形式から開放的な形式への発展
 四、多数的なものから統一的なものへの発展
 五、對象的に絕對的明瞭なものから、相對的に明瞭なものへの発展

以上の中、第一の標識が最も重要に考へられ、
 展の原理と考へられてゐるのみでなく、一般に標式的標識の概念と考へようとしてゐる。
 即ち繪畫的とは、物象を眼に映つたものとして把握した形式の意味で、繪畫的形式は純然たる繪畫的對象である。それは、運動の形式感と混沌とした現象感がある。これに對して、繪畫的とは、物象をその輪廓や面に於いて、手で觸れて把握するときのやうな視方をし得た表現形式をいふのである。前者には結構とした趣があり、後者には事象は彫刻的な明確な境界を持つて表はれる。繪畫的とは、ふたりに、彫刻的といふ言葉も用ひてゐる。
 ヴェルランのこの標式論に制されて、後にはパノフスキー、ヴァンド等多くの標式論が表はれた。

【参考】現代美術學の問題 大塚忠雄 ○澤木博道
 編 = Waltha : Kunstgeschichtliche Grundzüge.

【参考】現代美術學の問題 大塚忠雄 ○澤木博道
 編 = Waltha : Kunstgeschichtliche Grundzüge.

【参考】現代美術學の問題 大塚忠雄 ○澤木博道
 編 = Waltha : Kunstgeschichtliche Grundzüge.

は繪畫的表現を細かく観察すれば、(一)量的感覺、即ち空間の廣がりとか、容積の感覺を表現すること。(二)質的感覚、即ち對象の物質の持つる質的感覚を表現すること。(三)實在感覺を表現することである。これ等の表現のための手段として色彩と線條が用ひられるが、色彩や線條の持つる特殊な性質があり、媒材たる色彩や線條の持つる特殊な性質もそれと繪畫的表現を支持するものである。併しながら、結局するところ繪畫家の把握した現象の具象的構成の美が繪畫の本質である。従つて構圖といふことが重要な點となる。

【参考】フイダラの繪畫論 金田信三 ○造型美術論 山田三郎 = Popp : Malerische Kunst : Klingner : Malerei u. Zeichnung = Caspe : Grundprobleme d. Malerei. = Hildebrand : Der Problem d. Malerei. = Samurow : Zur Frage nach geschichtliche Grundzüge. (註三)

【参考】フイダラの繪畫論 金田信三 ○造型美術論 山田三郎 = Popp : Malerische Kunst : Klingner : Malerei u. Zeichnung = Caspe : Grundprobleme d. Malerei. = Hildebrand : Der Problem d. Malerei. = Samurow : Zur Frage nach geschichtliche Grundzüge. (註三)

五集五巻を出したが、病没してこれも未完。
 【刊行】天保三年より同六年まで、毎年一集づつ。【諸本】日本文藝叢書刊行會本三冊。

【題材】作者はこの素材として、作中に「太平記」「吉野拾遺」「南朝記傳」「北畠記」等を参考した事蹟を断つてゐるが、それ等の書は全篇構成の基礎として参照されただけのもの、本筋の主人公小六・結摩姫は、歴史上の人物ではなく、兩人の物語は全く作者の空想の所産で、廣道の第五集の附言にても知られる如く、支那小説の「女仙外史」「好逑傳」によつて大體の筋書を立て、これに平妖傳「快心編」「水滸傳」等の傾向を部分的に挿入したものである。
 【梗概】足利義滿將軍の頃、陽明義隆の子小六丸は、奥羽の地に家臣兼直に養育されておたが、兼直が歿したので、その妻母屋と共に相模に出づ。土地の義人野上著法に身を寄せ、奥州を亡命した新田貞方は頼みとした下總の千葉介兼直の好策に陥つて非業に終り、これを聞いた母屋が驚死し、その遺品によつて小六は始めて新田氏の血統にて鎌倉管領藤白安同に殺された義隆の子となる。恰もよし著法は既に實子叔母の助があつたので、父の仇を討ち南朝に忠節を盡さんと、發狂の體を装つて出奔し、大和を遊歴し計らずも多氣城下で、北畠家の權臣木曾親政の子泰勝の毒手から兼直の女信夫を救ひ、著法の許に託し居る。當時金剛山麓八九といふ所に楠家の血統で結摩姫といふ童女があつた。家臣陽屋惟盛夫婦の者に育てられてゐたが、南朝守護の神佛を祈つて、一夜神女より仙術を授けられ、文武を勵み仙術を會得して、遂に君父の仇足利義滿を討取るが、なほも足利義持を討殺せんとして一休和尚に助けられ、捕へられて義絶せし叔父補正直に監禁されることになる。

【構想】説話の構成、史實的挿入、小説的技巧等に於て小六と結摩姫を中心人物とする同型の二つの物語が併列してゐる。これが大きく展開して小六と結摩姫と相會し、美しい戀愛となり、協力して衰微せる南朝へ忠節を盡すといふのが本筋の粗み處で、規模の雄大な敵討話と戀愛物語とを一緒にする例案があつた事は事件的發展、人物の動き、作者の序等でも容易に想像されるが、兩者未だ相違はしらずに馬琴の筆は終つてゐる。それは全體から見れば、一小部分で展開の内に示されてゐる手法に據つてもその構想は考察される。それは世の列官屈臣的な同情心、英雄崇拜心理を満足せしめる興味本位から、史實に忠實であるよりは、寧ろ一處中實の程度に史實を採用し、空想によつて複雑な筋を構へ、動機思想を盛つて善は榮々惡は滅びる結果に向つてゐる。

【構想】説話の構成、史實的挿入、小説的技巧等に於て小六と結摩姫を中心人物とする同型の二つの物語が併列してゐる。これが大きく展開して小六と結摩姫と相會し、美しい戀愛となり、協力して衰微せる南朝へ忠節を盡すといふのが本筋の粗み處で、規模の雄大な敵討話と戀愛物語とを一緒にする例案があつた事は事件的發展、人物の動き、作者の序等でも容易に想像されるが、兩者未だ相違はしらずに馬琴の筆は終つてゐる。それは全體から見れば、一小部分で展開の内に示されてゐる手法に據つてもその構想は考察される。それは世の列官屈臣的な同情心、英雄崇拜心理を満足せしめる興味本位から、史實に忠實であるよりは、寧ろ一處中實の程度に史實を採用し、空想によつて複雑な筋を構へ、動機思想を盛つて善は榮々惡は滅びる結果に向つてゐる。

のとして描かれ、武士道的・儒教的道徳觀によつて意義づけようとしてゐる。【價値】作者得意の作であつたことは、「同外朝筆」にも自ら言つてゐるが、それは寧ろ作者の理想精神を多く説いてゐるが爲めであつた。即ち善は榮々惡は滅びる結果に向つて、史實を轉換するに好意を盡し、不適な正義の面目に同意したものであつた。それが作者の眞面目であり得意とするところであつたが、それ等の理想的英雄美女は、人間の制約した概念的類型のなものと被ばれ、特異性が乏しく眞實なもので追つて來ない。併し作者の興味本位の流麗な文章は、内容とかなり相稱するものであり、また二里見八犬傳(註四)等と共に構想的規模が雄大であつて、しかも人物の出現相互の關係のつけ方に不自然さがなく、趣向の奇技を以て場面を推移變化及び事件を錯雜して發展せしめつゝ、矛盾なき解決への結果をつける見透しのあつた事は、優れた構想力を窺はせる。「江戸作者部類」に、「曲亭の讀本數千種、新小説からずと讀、就中『八犬傳』『南朝』八犬傳を三大奇書と稱せらる。依客傳又これに次いで讀出すを得つもの一日三秋の如しといふべし」とある。
 【参考】依客傳の續編者藤野野矢(しらみ草紙) ○日本文藝叢書刊行會本解説(依客傳と支那小説)藤野野矢と藤野八二(註四) 藤野野矢 開卷書齋依客傳 藤野野矢(開卷書齋依客傳)を見よ。

【参考】依客傳の續編者藤野野矢(しらみ草紙) ○日本文藝叢書刊行會本解説(依客傳と支那小説)藤野野矢と藤野八二(註四) 藤野野矢 開卷書齋依客傳 藤野野矢(開卷書齋依客傳)を見よ。

【参考】依客傳の續編者藤野野矢(しらみ草紙) ○日本文藝叢書刊行會本解説(依客傳と支那小説)藤野野矢と藤野八二(註四) 藤野野矢 開卷書齋依客傳 藤野野矢(開卷書齋依客傳)を見よ。

【参考】依客傳の續編者藤野野矢(しらみ草紙) ○日本文藝叢書刊行會本解説(依客傳と支那小説)藤野野矢と藤野八二(註四) 藤野野矢 開卷書齋依客傳 藤野野矢(開卷書齋依客傳)を見よ。

海紅派(「海紅派」を見よ)。
開合(「開合」の「開合」) 韻脚その他等韻學(「韻脚その他等韻學」の「韻脚その他等韻學」)に於ける開合については「韻脚」(「韻脚」)に見よ。「國語の音韻に於ける開合」室町時代の國語にあつた母音オの長音の二種を區別する名目。室町時代には、古い時代のアウ・カウ・サウの類から轉化したオの長音は、現代標準語のオよりも口を開いて發音し、オウ・コウ・ソウの類及びエウ・ケウ・セウの類から轉化したオの長音は、ほぼ今日のオの音の如く發音した。當時、前者を開とし、後者を合とひ、合は下は「又は「下は」と云つた。この兩音の區別は、今日新潟縣の或る地方の言語には残存してゐる。(なほ別項「開合」の中、國語の歴史を參照)。
開口猿樂(「開口猿樂」) 延年御流の「一略して開口」。「東大寺御流」文永二年十二月の條に「開口猿樂御流」とある。祝賀の意を達する開口に續けて、舞・歌・けい等の洒落を用ひた猿樂のこと。多くこれに續けて「當流」を行つた。「同輩」代表的の集は天文十三年に多武峰附屬の念誦官の住僧實圓が、「開口」と題して新古今の作を撰録したのも一巻で、第一鳥羽之事、第二園基之事、第三草花相撲之事、第四名水相撲之事、第五名所山々相撲之事、第六名所水相撲之事、第七歌入相撲の七編を載せてゐる。口で述べただけで、詞は無かつたらしい。左にその一例を示す。
開口鳥羽之事
夫花鳥月之圓... (以下略)

本清源之大... (以下略)


ノハワツラ吹イタ... (以下略)

宗祇とせるは「みじきひがことなり云々」といひ、幾多の反證を擧げてゐる。道興の素性は、諸門殊勝の聖德院の條に、「道興大僧正、後知院左大臣房嗣公男、後實賢寺親白良嗣公孫」とある。「枕草子」には大僧正法勝、准三后・聖德院、新羅野檢校とある。「源本」流布印本と詳述(「記行部所收」とある)。「源本」目録に「文明十八年六月下旬の頃、北征東行のあらまじにて、公文に報のこと申入侍りき」と書き出し、父の頼朝(房基)が今年八十五で、この度の行を留められたこと、自分も既に耳順の齢であるが、既に定めた上は、力及ばぬといふことなども記して、いよゝ同十六日に大原越で出立。それから若狭小濱・越前敦賀を経て、加賀・越中・越後國府に到り、轉じて上野・武藏・下總・安房を経て、又相模に到り、それから下野・日光にも詣で、常陸より再び武藏に入り、鎌倉・金澤・大館・小田原・箱根等に遊び、翌年甲斐に入り、又は行く、と奥州に到つて、名取川の詠吟を以て全巻を結ぶ。記述は必ずしも目次を逐はず、全體は名所・古寺等の巡遊記であるが、中に俳諧歌・漢詩等も見え、又連歌道に關する事柄の辭くないのは、時勢の反映である。
【註釋】この書には關野四洲良の「關野四洲記」(二卷)文政八年の自序あり。野洲良は武藏八王子の人で、別に「名所千草」などといふ撰者もある。この撰註を作つた用意に就て「記の中、かぞやおもふ所々あれど、流布印本及び善本の外、異本を見れば、かろがうがへ正すべしよしなし」と云ひ、「此の記をよまんに、は行儀抄(江州兵衛記)・室曲集(武國紀)・東路のつと、梅花無遺記、私家録、北國紀行、館門物語、菅菟武選、白川故事考、

どによりて、その地理かがへうることおほし。是に引たれども、路のついで、前後のわたり、長さは引がたくともせり。くはしくは本集をひらき見るべし」と言つて居る。彼の博覧と精査との結果に成つた註で、地理や品物の解説に委しく、中には挿詩を入れたところもある。
開國始末(「開國始末」) 史論【著者】島田三郎【刊行】明治二十一年三月【内容】先づ井伊直弼の家系より説いて大老に至るまでの経緯を述べ、更に徳川氏の政略及び幕本安政年間の大變、米國と假條約を結んだ事情、直弼が幕局に當つて、遂に暗殺されるに至つた経緯を説き、最後に直弼について絶評し、當時の大勢を叙して、結局を最も卓見に當んだ開國の殊勳者といふのが著者の目的である。「解説」好意の念を記述の間に挟み、好む所のものはその體を略し、悪む所のものはその美を掩ひ、その時局人物の相を亂り、正當の慶忌を當時の人と事とに下す能はざらざるが如きは、記述の精神を失ふものなり」と緒言に書いてゐるが、井伊直弼の心事や事蹟を正叙するよりも、寧ろ多少誇張した筆が無くでもない。當時著者が、この書を書く動機に關しては、頗る好ましくない評説が流布されて居た直弼を、極力辯護したためである。しかし直弼に同情する史家が、これから多く現はれるやうになつたので、著者の意志は達せられたといへよう。資料の貧弱な點は史論として非難を免れないが、記述の情熱と興味に富む事とは、彼の著述中の第一に說かれる。關外に、矢野龍溪・木暮草三・島田中洲、田口鼎軒・本橋雲中・中根春亭・大槻復軒・木村

芥香等の評語がある。
【千鶴】「題忽」の「忽」字義は請願ありて不定、題骨とも書く。「解説」唐新樂の中間、平調曲に屬する。拍子十二、舞は無い。「治平」起原につき諸説がある。徒然草に「題忽は題忽なり。題忽とてえびすのことは、題忽は題忽に伏して、のちに來りておのれが國のしがを奏せしなり」とある。この説に贊する者は、白石の「樂考」に「本は則長、後則長に改む。何れ別種の國名也。宋朝に同國體あり」とあり、又田安宗武の「樂考」に「題忽とは夷の國の名なれば、其國の樂なるにや。また輪臺書治などの如く、その國風をうつして、もろこしにて作れるにや」とあつて、皆異樂として居る。「歌調抄」には「此曲實樂成所作也。昔大國、有一人大臣、號曰貴樂成、彼有父曰大忠進、怨受病死去、樂成、經百餘日彼臣至、責下墓、退作一樂、樂成、至七返之時、彼死骨見生、題三返之矣、仍名題骨云々、件曲用、神樂云々」とあり、又大日本史「禮樂志」には「按陳氏樂書、唐天后時、有題骨、因號「題骨」、不知與之同否也」とある。併しこれ等は題骨と書く事から起つた附會説で、骨は忽の當字であり、題忽は夷樂と見るのが正しいやうである。本邦への傳來時期は不明。(田邊) 外在此詳評(「内在此詳評」を見よ)。
海西漫錄(「海西漫錄」) 隨筆 三卷【著者】鶴崎成章【著本】國書刊行會本(家藏本)所收【解説】初編のみ或は續編を出す積であったか。題類を限らず、見聞の事、感想の談を皆集めたもので、各地の歌謡や語學上の考説や、經史談、地理談や人物論などと頗る雜である。

春の國... (以下略)



春の國... (以下略)

【千鶴】卷一に理即明徳以下二十二條、卷二に多摩川以下二十六條、卷三に豐原金山以下三十條を載じてゐる。序跋は無い。【田邊】「懐紙」の「書道」(「解説」和歌・俳諧・詩などを詠述するに用ふる紙。一に「ふところ」がみこ、たうがみ(巻紙)とも云ふ。古くは檀紙・紗原紙などを用ひたが、今日では奉書紙を使用するやうである。昔の懐紙の寸法は「懷紙夜鶴抄」に據れば、天子は大高懐紙で、一に理即明徳以下二十二條、卷二に多摩川以下二十六條、卷三に豐原金山以下三十條を載じてゐる。序跋は無い。【田邊】「懐紙」の「書道」(「解説」和歌・俳諧・詩などを詠述するに用ふる紙。一に「ふところ」がみこ、たうがみ(巻紙)とも云ふ。古くは檀紙・紗原紙などを用ひたが、今日では奉書紙を使用するやうである。昔の懐紙の寸法は「懷紙夜鶴抄」に據れば、天子は大高懐紙で、

(新刊 叢書)

れば二行に書き、殊に「和歌」の二字だけを別行に低く書くのが正式である。又右の「春日同録」の如き季節を示した文句を季書と稱する。...

寸五分、執紐あり、又無きもありと、調度口傳に見えてゐる。この歌懐紙で古來有名なるものには、後鳥羽天皇以下の鷹狩懐紙などがある。...

名残の裏と呼ぶ。又各懐紙の表でも裏でも、句を記してある一面を面といひ、相違んでゐる左右二面を合して見渡しといふ。...

【韻本】當年出版の輸入狂言本が現存する。徳川文藝叢書第六所収「題村」義経記以来の吉野忠信と「十二段草子」以来の浮瑠璃の件によつてゐるが、素材としては早く浮瑠璃、歌舞伎の世界に親まれてゐたものである。...

して動めてゐる。その切ない態に感して高砂は義経に引合はせる。其處に朝原と正歌が踏込み、泉三郎と辨慶とに逐ひ捕はれた。主従の身邊を背けて来たので、一同は奥州さして落ちる。...

色時代に入る迄の所謂元祿歌舞伎に於て列達した脚色の一頂點を示すのである。同じ義経傳説を扱つた後の浮瑠璃「鬼一法眼三略巻」(通稱)や、御所傳堀川夜討(通稱)が本作に部分的脚色を仰いでゐるが、かなり相違した結果を示すに比較すべきである。...

持で縁を結び、堀河御所へ呼び降る。(二)段 堀河の鎌倉に動かされて朝原は北條四郎をして三千餘騎を引率して上洛させる。判官主従十二人は山伏姿となり、北の方を稚児に立立たせて都を落ちる。...

トンの歴史小説「リエンジ」(刊行)明治十八年二月前編、後編は豫告だけで出なかつた。なほ表紙の異なる二種の本があるが、内容その他全く同様である。...

想を吹き込んで、政治小説らしく見せかけてゐる。...

【席間】連歌の席に、連歌の會席には、天神の像(又は神像)を床に懸け...

Table with 2 columns: 二編家傳の圖 (第一八九所載) and 女房奉書 (前掲) を以て御石が...

【席間】連歌の席に、連歌の會席には、天神の像(又は神像)を床に懸け...

【参考】連歌會席二十五所載(原書)○若山山田...

作(選會)は當時の注目を惹き、田山花袋等の...

【参考】連歌の席に、連歌の會席には、天神の像(又は神像)を床に懸け...

【参考】連歌の席に、連歌の會席には、天神の像(又は神像)を床に懸け...

【参考】連歌の席に、連歌の會席には、天神の像(又は神像)を床に懸け...

しき地歩を占めてゐる。動物物語には一、...

となる。五ノ二十七、唐舞得富は岡崎先生といふ...

六年間夏間の徳島に拘らず書きつけて文々...

文政元寅としより同十二年に至り、兩度合...

は、その父孝藏を討つた者は平左衛門なるこ...

を防いだ。その夜は、死霊も御符のために家...



(源朝義傳) 州奥福類

お國の置れてゐる字都宮へ赴いたが、おしげ...

ないまじりになつた。それほど重要な責任言...

樂化され、所作化されてゐる。これ等を形式から見れば、例へば同じ舞臺劇でも、「四谷怪談」のお岩の如く、その本人が再現するの

等の際役。元禄十一年、京、山下座所演の「傾城漫遊録」(別項)は後世の「漫遊録」の原典とな

を提供し所作系に「道成寺」「漫遊録」「双面」

は四代鶴屋南北と、役者側は尾上松助・三代



【参考】「八島」「井筒」等の如き、何れも後世の

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

ぶべくもなかつた。その凄味も明治に入つ

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

する事になり、舞ふうちに種儀をして笑はれ

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

【参考】「折紙」など類は多いが、「懐中」は、

以下数十冊、巻五に朱書更替進行以下数十冊を収めてゐる。全書標目を設けず、序次も然として檢索の便が無いが、一種知識を廣くするに足る書で、江戸初期の漢學者の博覧洽聞を窺ふことが出来る。『著者小傳』永田道興、字は平安、義興又は石圃と號した。京都に生れ、藤原宗高・林道春等に學び、儒を以て紀州徳川家に仕へた。寛文年間歿享年八十七。州徳川家に仕へた。寛文年間歿享年八十七。州徳川家に仕へた。寛文年間歿享年八十七。

外來語

【解説】他の國語から輸入されて自國語中に用ひられる單語。直接他民族に接觸して新しい事物に接する時、その事物をあらはす單語を輸入するのが普通である。又民族に接せずとも、外國語で書いた書物を讀んで、その語を輸入する事もある。又、直接接觸した國語の中に外來語として入つてゐる他の民族の言語を輸入する事があつて、その場合には、直接接觸しない民族の言語が間接に輸入せられる。外來語は、もとの言語そのまゝの形(音)で行はれず、その國語に適當な形に變るのが常である。しかし場合によつては、外來語によつて、その國語になつたやうな新しい發音が行はれる事もある。

多くは疑はしい。極めて古い時代のことは明かでないが、「こさ」(胡沙など書く。アイヌ語 kusa)から「かさ」(カサカ。アイヌ語 kasa)又は「かさ」などは平安朝・鎌倉時代に歌にも詠まれた。「あつし」(厚司 masu)、「こんぶ」(昆布 kombu)又「kampong」(「らう」(龍虎 hakko))など、かなりの語が用ひられてゐる。

【朝鮮語】極めて古い時代から交渉のあつた土地であり、大陸の文物を、この地を経て輸入したから、その言語の我が國語に入つたものも多からうと思はれるが、あまり古い時代であるために、多くは推測する事はむづかしい。今日固有の國語と考へられてゐるものの中には、朝鮮からの外來語が混じてゐるものと思はれる。「まさき」(藤)、「てら」(寺)、「さら」(皿)、「かぶと」(冑)などは、その物の傳來から考へて朝鮮語から来たものらしい。歴史時代に入つてから輸入したものには餘りなかつたらしく、秀吉の朝鮮征伐も言語の上には、格別影響を及ぼさなかつたやうである。近年、韓國を併合してからも、僅かの語が輸入せられたのみである。

【支那語】極めて古い時から交通があり、又支那語で書かれた書物が古く輸入せられた。引つて各時代を通じて學習された故、その語の國語に入つたものが甚だ多い。これを漢語といつてゐる。その發音には、吳音・漢音・唐音などの區別があつて、時代と傳來の経路の差によつて、同じ語でも、異なる形で傳はれて、且つ行はれた(漢語、字音、音韻)。「はり、うめ」(梅)などは、漢字によらず、漢民族に接して、その語を輸入したものであらうと考へられてゐる。

【和蘭語】江戸時代に、鎖國後も和蘭とだけは交通したので、貿易品の名などに和蘭語があり、江戸時代の後半には、和蘭語學が盛になり、天文・醫學等を學んだので、かやうな學術に關する語が多く用ひられた。しかし明治以後は、英語その他がこれに代つて、行はれなくなつたものも甚だ多い。ブリキ (bricks)、サイル (sails)、ランドセル (rucksack)、メッタン (metan)、テレホン油 (terephthalic)、サフラン (saffron)、ドンタツ (dantsu)、オールの (oil)、キヤム (cham)、ホフタ又はフロ (fluorine)等。

近年社會經濟や、スキーの方面でも用ひられるやうになつた。ゲーゼ (Giese)、オプラート (Oplaat)、ケルム (Kerlm)、イデオロギー (Ideologie)、ムンバ (Munba)、ラムペン (Lampen) 等の。

【参考】外來語考、大槻文彦『新編』(内)〇日本辭書研究、高橋義典『新編』(内)〇附録、〇影響、村上直次郎『新編』(内)〇附録、〇國語中の梵語の研究、上田三郎、〇外來語の研究、前田太郎、〇外來語について、市川三郎、ことばの語源、〇日本外來語研究、上田三郎、高橋義典、次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、倉澤庄三郎、(編)『外來語』、(編)『外來語』を見よ。

【参考】外來語考、大槻文彦『新編』(内)〇日本辭書研究、高橋義典『新編』(内)〇附録、〇影響、村上直次郎『新編』(内)〇附録、〇國語中の梵語の研究、上田三郎、〇外來語の研究、前田太郎、〇外來語について、市川三郎、ことばの語源、〇日本外來語研究、上田三郎、高橋義典、次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、倉澤庄三郎、(編)『外來語』、(編)『外來語』を見よ。

【参考】外來語考、大槻文彦『新編』(内)〇日本辭書研究、高橋義典『新編』(内)〇附録、〇影響、村上直次郎『新編』(内)〇附録、〇國語中の梵語の研究、上田三郎、〇外來語の研究、前田太郎、〇外來語について、市川三郎、ことばの語源、〇日本外來語研究、上田三郎、高橋義典、次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、倉澤庄三郎、(編)『外來語』、(編)『外來語』を見よ。



【参考】外來語考、大槻文彦『新編』(内)〇日本辭書研究、高橋義典『新編』(内)〇附録、〇影響、村上直次郎『新編』(内)〇附録、〇國語中の梵語の研究、上田三郎、〇外來語の研究、前田太郎、〇外來語について、市川三郎、ことばの語源、〇日本外來語研究、上田三郎、高橋義典、次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、倉澤庄三郎、(編)『外來語』、(編)『外來語』を見よ。

【参考】外來語考、大槻文彦『新編』(内)〇日本辭書研究、高橋義典『新編』(内)〇附録、〇影響、村上直次郎『新編』(内)〇附録、〇國語中の梵語の研究、上田三郎、〇外來語の研究、前田太郎、〇外來語について、市川三郎、ことばの語源、〇日本外來語研究、上田三郎、高橋義典、次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、倉澤庄三郎、(編)『外來語』、(編)『外來語』を見よ。

進の状を語つてゐる「観作三昧」(大正六年十一月)...

「海録」の題名で殆ど百篇、その中を分つて「好問實録」...

「快楽主義」(英) Helmsley 解説、人生に於いて快楽を求め不快を避けるのは...

「海録」(二十卷) 山崎英成、帝國圖書刊行會から刊行された...

「興行」文政六年三月七日、江戸中村座、(發刊) 星野源一...

「海録」(二十卷) 山崎英成、帝國圖書刊行會から刊行された...

以下八十八回、第九に編纂以下七十九回、第十に...

「カインの末裔」(小説) 作者、有島武郎、大正六年七月「新小説」...

「興行」文政六年三月七日、江戸中村座、(發刊) 星野源一...

らずも仲の町で類富なる。高尾が止める。
(返) 則問(助毛) 高尾は重三郎をこゝに匿
まつて膝の療治をさせ、時折の遊戯を樂しむ。

の音頭を歌ひながら我子に切腹させた。(返
し、對決) 彈正は細川勝元の裁斷により敗訴
となるや、車法にも外記左衛門を騙し討ち
した。

ので、共に遊べんとし阻まれ、お縁は古市の
遊女にされ、主水は江戸へ志す途中北條家の
邸と知り、名刀を盗つて北條氏政に仕へ、

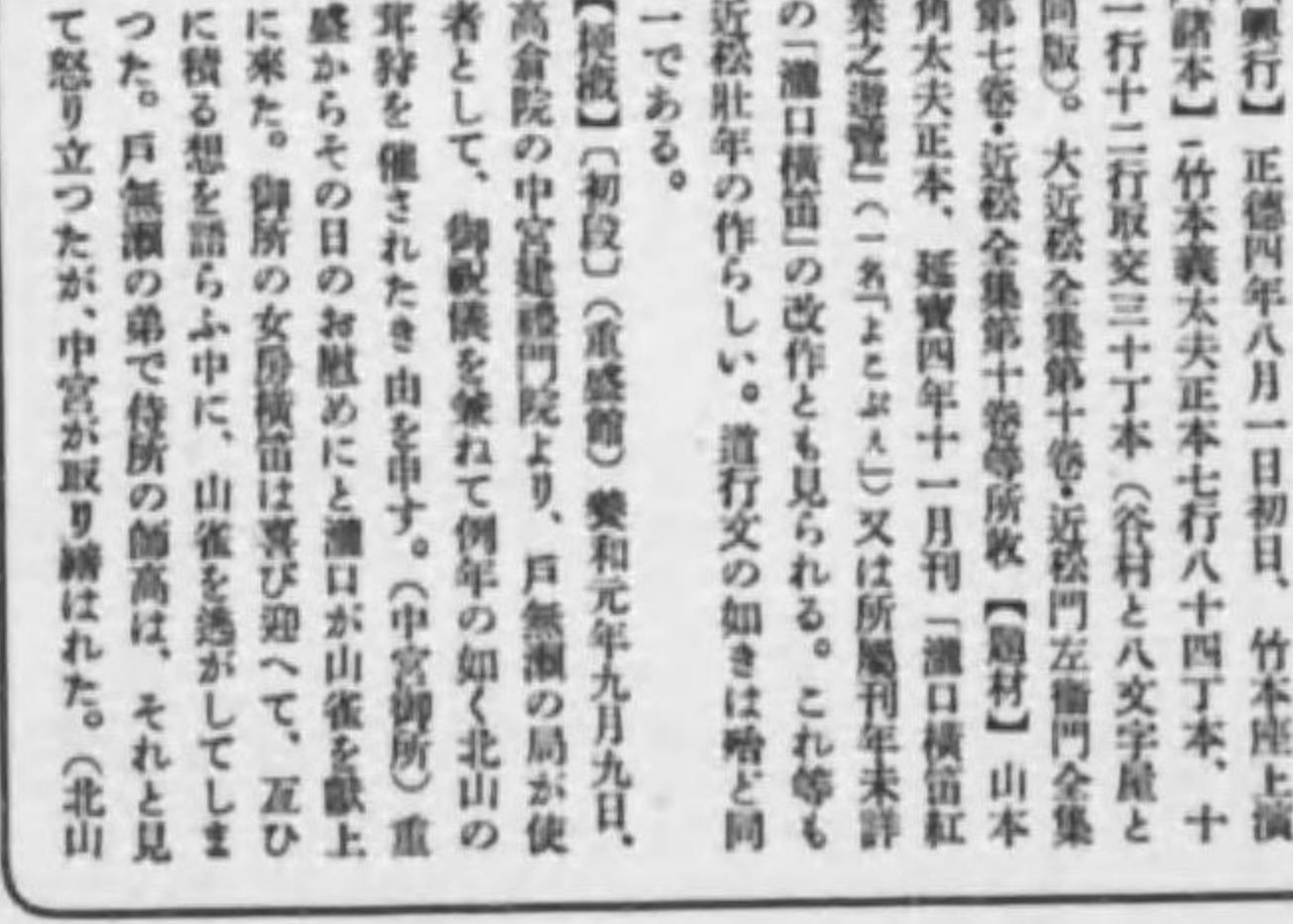
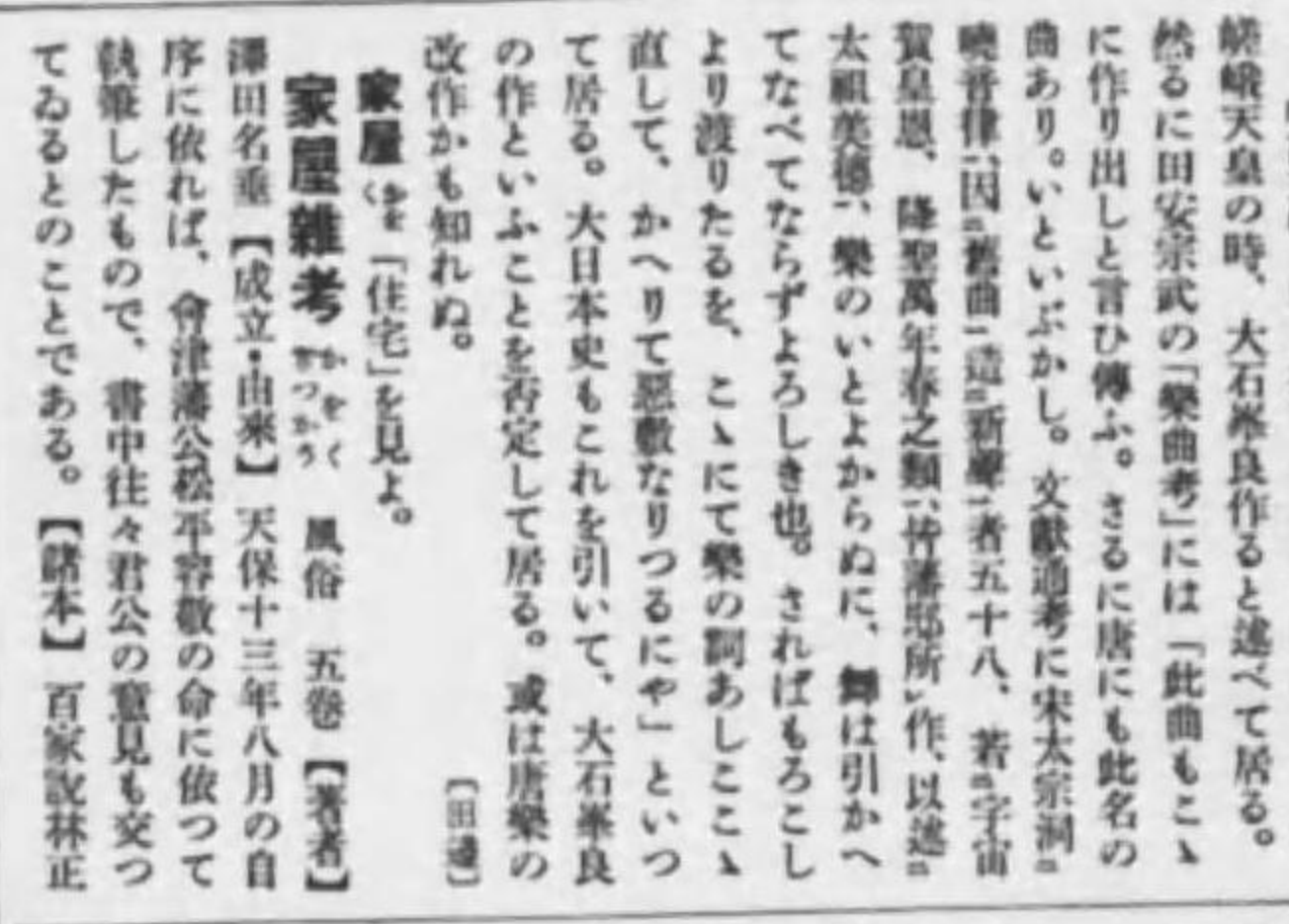
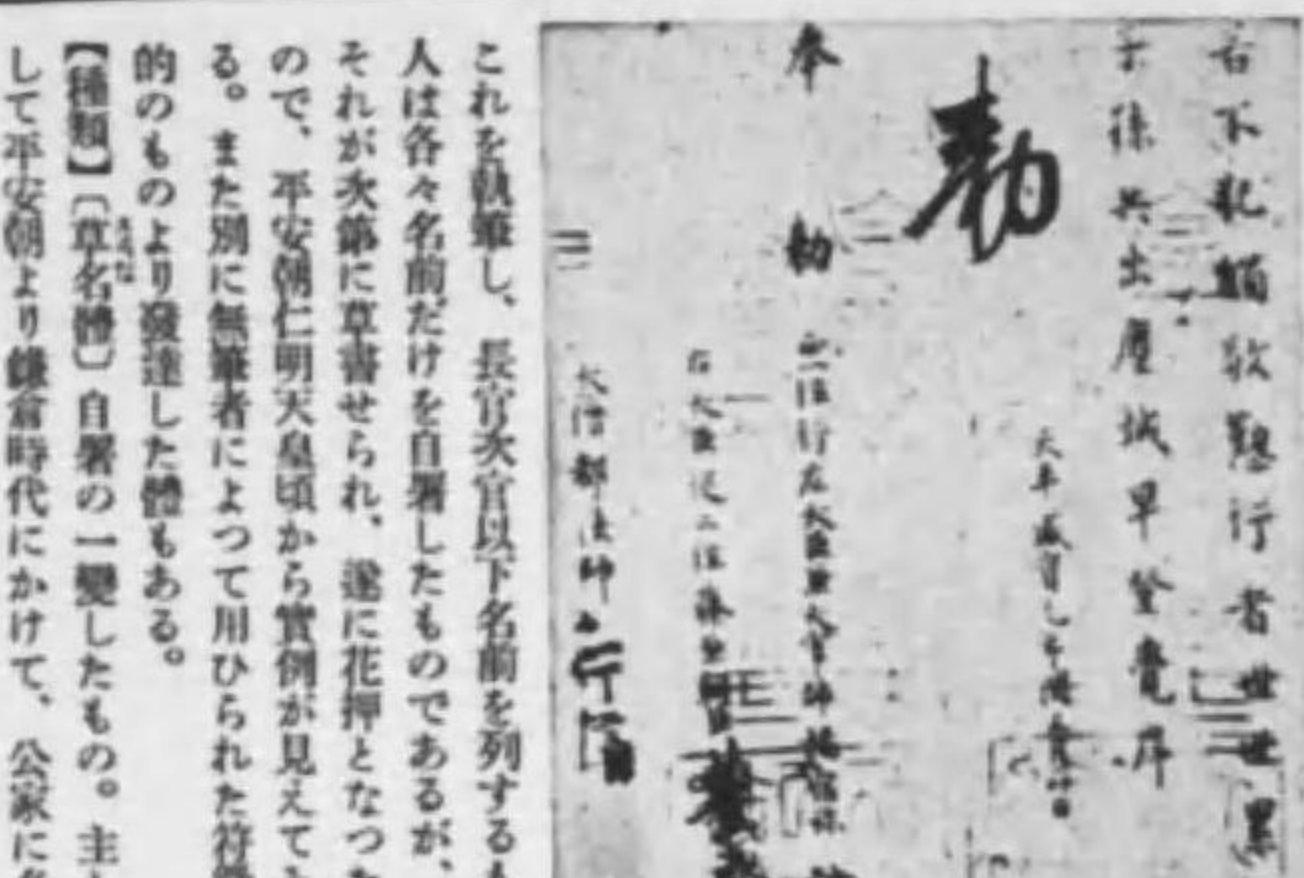
名に宛ててゐるが、著者の何人かは明確でな
い。併し二條派乃至その流を酌む歌人の筆に
依るものであることは疑ひない。【成立】 奥

ても、所謂二條派の格式を固守してゐるに過
ぎない態度が察知される。巻頭歌事、歌員歌
事等の項目に於て、撰定の種福を指摘してゐ
るものは、まづ音楽に當つてゐる部分と云へ
るであらう(玉置和歌集参照)。

【用ひられた】。
(二)合體 名義の二字
の成る部分合せて作
つたもの。主として鎌
倉時代から足利時代に
かけて、公武共に用ひ
られた。

【明朝體】 天平地平の兩端を上下に置き、七點
の式や五位の法などに依つて使用者の性に合
ふやうに變や欠を作る。この體は織田豊臣時
代を経て、江戸時代に入り最も流行し、武家

【家屋】 住宅を指す。
【家屋考】 成立・由来 天保十三年八月の自
序に依れば、會津藩公認平政の命に依つて



其時、「小島盡し」中宮は諸島を放しなどして、義次と契るため、開夜に男を取違へたりしが、互ひに髪を結び、男達は更に横笛を捕へに来た師高を散々に刺し殺した。

横笛の行方を尋ねる戸無瀬は、追放後、この逢りに顔を開く師高のために既に危い所を、瀧口、義次等に救はれ、師高は謀られて命を落とす。重盛より御書状が来り、瀧口等の歸參が叶つた。

「袋草紙の和歌會次第によると、先づ自詠を續にしてその所に參りて重盛し、被瀧に臨んで文楽を召され、人々の歌を文楽に殿く。さうして瀧口が遊んで文楽から歌をとり、瀧口がこれを讀上げ、然るべき人々が同音に誦する。さうして臣下の歌を誦して、後に御製を被誦される」とある。

會を註して「併云々太我哉、又云々加我哉」とある。即ち歌垣とかがひとしく同語なる事が明かである。而して「萬葉集」巻九に「櫻歌者東魯語曰、我比此とあるのによれば、

定し、第二條以下は音韻殊にん音の有無を論じてゐる。宣長は古代には「む」音のみ存し、「ん」音は、後世の訛で不正であると説いてゐる。秋成は、一首の場合、これを現はす漢音の文字が無かつたら、平、濁、毛等の字を借り用ひたとし、二音の場合は音聲、韻、別、南の如く用ひてをり、又金石録竹の自然の音には「ん」音あり、自然の音をも不正と稱する事は出来ぬと主張し、宣長は「ん」音が無いから平、濁等を用ひたので、それが後世訛つて「加平加是」を「かんかぜ」と發するやうになつたのである。

に言及した後、「清めおく道さまたげて離人あしかるものをとどめらめや」なる歌で結んでゐる。【備註】これは和學者の撰として行はれた古道論であつて、同じ著者の撰する者が認められた他の古道論とは多少論調に差異が認められるけれども、立論の根柢は同一で、當代の知識のみを根據とする批判に對して、古傳を古傳のままに人智を超えて眞理として肯定しようとするものである。

前に出来た。昔て素戔尊が將軍の下命により「紫明抄」を讀したのに準へ、古來の諸説を集成したのである。【備註】これは貞治六年義隆去以前に一度原本を著者は貞治、爾後屢々復勘を加へたらしい。本書に廣く異本があるのは、主としてこの事情によるのであらう。【諸本】第一は義隆に撰述の時の原本である。これは室町殿春日局本で、所謂中書の本(東山文庫)である。第二は、覆勘の本であつて、これは河海大納言公教所持の本(東山文庫)である。この本の原本は、此抄一部廿三卷手自合校合加復勘本(河海)の原本と同一の系統の本である。

は永正九年師小路清隆が實際の本を寫し、更に中書本を得て校合した本である。右二系統の本は校合によつて互ひに混入し、轉移の姿を傳へるものは少ない。現在諸本は非常に多いが主なるものをあげると、影書館蔵大南宮文庫蔵本、神宮文庫蔵本、京都府立圖書館蔵本、三手文庫蔵本、本館蔵本、四手文庫蔵本、國文學研究會蔵本、同一の系統の本である。圖書院蔵本、前田家蔵本、阿波文庫蔵本、廣島文理科大学蔵本、帝國圖書館蔵本、岩瀬文庫蔵本、本館蔵本、同一の本等は、實際本系統の本である。

な知識を示してゐる。本書は實に『源氏物語』研究の初期の業績を大成したもので、後世の註釋者にして、本書の影響を受けないものはない。かの河内本・青表紙本が、こゝに至つて對等の位置におかれ、河内本のみに據らなかつたことも興味ある事實であり、引用參考書中、澤渡して現存せざる本も、本書によつてその内容の一部を知ることが出来る。されば本書は、ひとり『源氏』研究者の參考たるのみならず、あらゆる文學學者の參考すべき書である。引用文中には、現存してゐるその原本の文章と合はざるものもあるが、それは本書著者の誤りも勿論あるけれど、又原本の文章を示す場合もあるであらう。

〔参考〕源氏物語研究 山田博士(日本文學叢書) 〇河海抄の系統について 山田博士(藝文三)

花街漫錄

西村伊之【刊行】文政八年酒井抱一の序、同年著者の跋があるから、その年の出版であらう。〔跋〕江戸の遊里古風を考説した隨筆で、古風・朝野・名物・名産の遺品等の事を論じ、雜論が多い。圖は鈴木其一の筆である。上巻に元吉原町之繪圖以下十四條、下巻に若荷屋州之圖以下二十一條を収めてゐる。〔著者小傳〕西村伊之、號は龍庵、字は宗先、通稱佐兵衛、俳仙也。又花の本と云ひ、首原江戸町二丁目名主である。多才で俳諧・茶技・書畫を善くし、器物・筆蹟の鑒定に長じ、龍庵の名は一時江戸に鳴つた。喜水六年十一月歿、享年七十。〔著者印譜〕花街年中記等の著がある。(和風) 七八

花街漫錄正誤及附考 喜多村信郎(和風) 一巻 寫【著者】喜多村信郎

附考は山崎美成。【諸本】隨筆文學全集第二卷訂正したもの。初め信郎が一通りの正誤を施した後、友人山崎美成に「精思ふよしあらば此巻へやがて記してよ」といつて示したので、美成がその詞に隨ひ附考を添へたのである。附考も大體正誤の追加と見られるもので、畢竟兩人の合作正誤と言はれよう。(和風) 擧げ「抑字」切字を見よ。

歌學【和歌雜誌】『刊行』明治二十五年三月十日刊行。同二十六年四月發行。通計十四冊を出した。東京發行『編輯者』金子元臣【解説】歌學會(監督、久米幹文、小中村義孝、岸合直文、幹事、金子元臣、佐野蘭之)の機關雜誌で、會員及び當時の大家の作品が毎號載つてゐるが、作品そのものよりも、和歌の研究評論方面に主力を注いでゐる。主な執筆者は岸合直文、小中村義孝、同義孝、坂正臣、關根正直、萩野由之、曾田于信、今泉定介、佐佐木信綱、鈴木東城、黒川真照、井上頼文、前田夏策、井上韻春、佐藤誠實、飯田武郎、岡田正美、小杉福郷、金子元臣等。所謂大家の寄稿の外にも、新人の研究評論に注目すべきものがあり、古典の研究に重きを置いた雜誌であつたが、一風清新の氣は甚だに漲つてゐた。明治十九年六月刊の『大洲音樂雜誌』以外未だ見よべき和歌研究雜誌のなかつた時代に創刊されたので、和歌及び歌學研究に貢獻するところ多く、發行期間は短かつたが、次の時代の新しい歌人を喚び起す力をもつてゐた。

雅樂【名義】平安時代に宮廷を中興として、上流貴族社會に行はれた音樂の總稱。即ち御遊又は儀式に用ひられ、或は宮廷と關係深き神社・佛寺の祭祀に用ひられた樂舞をいふ。【種類】大別して三種とする。即ち第一種は我が邦古代の樂を源を發し、又はそれを基として作られたもので、凡て古樂器なる儀・神樂笛などを用ひ、歌詞は古歌を用ひ、祭祀并に儀式に用ひられるもの。第二種は朝鮮・支那・印度その他の外國より渡來した樂舞、又はそれを改作し、或はそれを決して



我が邦で作つたもので、樂だけのものを管絃と稱し、舞のあるものを樂舞(別項)といふ。これは左方と右方とに區別される。第三種はこれ等の外國傳來の樂器を用ひた管絃を伴奏とし、或はその形式を模倣して、我が國で作つた樂舞であつて、これを雜曲(別項)と稱し、備馬樂・御吹打等、これを區別する。【第一種】今日行はれてゐるこの種の

【第二種】の雅樂(一)古樂と新樂 第二種の雅樂はこれを古樂と新樂に分ける。即ち支那樂に於ては唐より以前の樂を古樂とし、唐代の作曲を新樂とする。印度樂は凡て古樂とし、樂制改革以後の高麗樂及び渤海樂は凡て新樂とする。我が國で作つた曲は樂制改革後

樂器には高麗笛・箏・太鼓・鉦鼓・三鼓を用ひては用ひない。併し極めて稀にこれに加へる事がある。その調子には、高麗琴調・高麗平調・高麗双調の三種がある。(四)奏樂の種類 立樂、座樂、遊樂、結樂等の區別がある。立樂とは庭上で樂を奏するのを指し、樂人は立ちながら樂を奏する場合をいひ、而かも日などに於ては、これに對して室内又は樂座に於て樂人が坐しながら奏するのを座樂といふ。又天子の行幸或は御大葬の時などに道すがら樂人が歩きながら奏するのを遊樂といひ、又河内池で御遊のある時、船中で奏するのを船樂といふ。平安朝では結樂が屢々行はれたが、近代には絶えた。なほ又法會の時、導師が高座に昇るとする時に奏するのを昇樂といひ、導師が高座から下るとする時に奏するのを降樂といふ。(五)調子と音取 管絃の合奏を打はんとする時には、普通同じ調の曲を意圖連んでこれを組み合せて奏する。その場合に先づ最初にその調の音取を奏する。音取は各樂器の音頭がこれを動かす。音頭とは各樂器の同種のものが二個以上ある時に、その中の首座を動かめる一人をいひ、凡てその樂器の奏し始め及び止手は音頭がすることになつて居る。音取は初めに笙が吹き始め、次に箏があり、次に琵琶と笛とが合奏する。その琵琶の手を「七つ調」といひ、笛の手を「調べ」といふ。大合奏・御遊・舞樂の場合には音取の代りに調子を用ひる。調子は音取の大規模なものであつて、各樂器の複雑な技巧的の調子合はせてある。(六)管絃奏法 先づ音頭の横笛一人で奏し始め、初めの太鼓(時として二度目の太鼓)から笙が附き(音頭の音を

聞いて他のものもこれに附ける)、これを閉いて編及及び輪指殘らず附ける。これより二拍置いて琵琶が附き、次に竹が附く。太鼓は初めの拍子から打ち、初めの太鼓が出てから、太鼓を細かく打つ。これを加拍子といふ。曲を繰返す場合には、繰返した二度目から加拍子を打つ。曲の終りには止手といふものを奏する。これは各樂器皆音頭だけが持つて、各調子に依つて定まつた所の短い手を奏するものである。皆で定まつた所の長い手、奏するのでは音の最後は響く。(七)舞樂 御遊又は特殊な管絃合奏の場合に、舞樂といふものを奏する事がある。これは或る曲を三回又は五回繰返して奏し、初めは普通曲を奏して後にこれを繰返して行く間に、笙及び横笛は止めて、箏は音頭だけ残り、琵琶も漸次に止めて、遂に箏と琵琶だけ残り、箏は全部で細か

として呂から律に轉調されるか、この二種の方法が行はれる。即ち前者に於ては、呂では壹調調及雙調の間に、律では平調と黄鐘調及び雙調の間に於て行はれる。又後者は律の平調と呂の太食調との間に於て行はれる。時として黄鐘調を呂に取換ひ、壹調調から黄鐘調に轉調する事もある。【第三種】の雅樂 備馬樂及び御吹打などいふ(別項)の雅樂(別項)は古くから多くの歌謡が行はれ、樂器としては笛及び笙があつて、これ等の歌謡の律として行はれて居た。これは後世になつて神樂笛及び和琴といふ名で、第一種の雅樂の中に用ひられるやうになつた。應神仁徳の頃から三種の樂が輸入されたが、記録としては尤も天皇の崩御の際に、新羅の樂人が貢した事と、欽明天皇の十五年に百濟の樂人が交代した事とを以て初めとする。恐らく三種の樂は、その頃に消えたと見られてゐる輸入されたもので、それ以後に推古の二十一年には百濟の人味摩之に依つて伎樂が傳へられ、聖德太子は佛敎の樂として特にこれ等の外邦樂を樂し給つた。斯くて天武天皇の頃には、三種の樂は相違んで宮中に於て奏されたといふ。これ等の樂は何れも舞と樂とがなされた。樂器には新羅に新羅琴があり、百濟及び高麗に横笛、箏、琵琶、鼓、各別項があつた。伎樂には笛と鼓とが主として用ひられた。天武・持統兩朝の頃から、支那樂が漸次輸入され、初めは坊歌(別項)の如きものが主として行はれたが、文武の頃には唐の舞樂及び管絃が盛んに輸入され、奈良朝に至つて實に唐の樂舞の光を放つやうになつた。殊に聖武の天平八年に、印度の僧摩羅門僧正(善願

曲は、神樂・横笛・御吹打・田舞・伎樂・東遊、久米歌・五節舞・國樂・各別項などがある。その用ひる樂器は、神樂笛・拍笛・箏・和琴(各別項)などである。【第二種】の雅樂 (一)古樂と新樂 第二種の雅樂はこれを古樂と新樂に分ける。即ち支那樂に於ては唐より以前の樂を古樂とし、唐代の作曲を新樂とする。印度樂は凡て古樂とし、樂制改革以後の高麗樂及び渤海樂は凡て新樂とする。我が國で作つた曲は樂制改革後

如き名高き妓女も出たが、平安朝末には衰へて内歌坊の舞臺御覽も殆ど断絶した。百餘年、保元三年五月廿九日、平安朝初めに、これが設けられるや、風俗歌舞や徳舞等の大歌及び古舞は、多くこゝに移されて教習せられた。...

加賀節 流行歌(名義)加賀國から起つたためか。『沿革』「多聞院日記天正十年五月十八日の條に、於若宮院、加賀國八歳十一歳ノ童ヤ、一段ノイタイキニ面白ク各各集テ」とある。...

鏡獅子 舞踊劇。長門物。別名「初瀬の折は春舞獅子」。作者「藤原朝臣」。初瀬の折は春舞獅子。作者「藤原朝臣」。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

加々見山 加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。加々見山(加々見山)を見よ。...

悦ぶ。又助住家。又助は女房を賣つた金で幸助を歸國せよとしたが、自分が大敵を苦しめたと聞かされるや、わざと悪人になり済まして求馬の竹槍にさして手柄をたてます。



繪畫 山見加

【解説】賞銀物で有名な加賀屋助に主題をとり、復讐物の語り「望月」を配し、浮城陣のお菊幸助や、當時の女流俳人加賀の千代の傳等を採擷したので、加賀の事件を江州徳山ときかせたのは、一面當局への遠慮もあらうが、これに據つて、多賀宰相の名を借り、望月左衛門が安田庄治も現れる。

そのまゝ書直したものであり、「徳山後日の開書」は新造妹若の中絶は、原作に書かれたお菊幸助を主とした作である。又、黙阿彌の「徳山後日」(明治二年二月、東京市野郎)は、仙石騷動を加々見山の懸に書かれた作であり、同じ作者の「徳山後日」(明治十年十月、東京市野郎)は講義稿に基いた賞銀の加賀屋助で現行のものこれである。六幕目加賀屋助乗切りの場に使はれた大開書は、伴屋正次郎作曲「徳山川」で特に有名である。但し又助はこの作では、一旦悪人等に約束はしたが、主恩を裏切るに忍びず、討ち約せぬ事に書かれてゐる。又、勝麟威の「再梅鉢金澤評定」(明治十三年四月、大阪角の芝居)は、騷動の後日を書いたもので、今日賞川延若の出し物になつてゐる。明治十四年黙阿彌が「徳山後日の梅」として新富座に書替へてゐる。その他原田龍雄の類はかななり多いが今日普通「加々見山」といわれるものはこの「賞銀物の系統」である。

【別名】「徳山物語」「徳山の草紙」「徳山の繪巻」「作者」未詳。繪は徳土佐先信。「成立」室町期か。山東京傳は文安、東徳川(谷重胤)、京山は東山殿頭(歴世女流考)と推定して居るが、確證は無い。【諸本】山本由豆流徳山本、草文庫本等があつた筈であるが、今は東京帝家博物館に徳山本があるのみ。刊本は無いが、全文は「歴史と國文學」第二十七號に載つて居る。

【題材】童話。前半、所謂徳破は恐らく外來説話の轉化。印度支那及び朝鮮説話にも類話がある。酒徳の傳説としては「徳破の繪巻」を本據として「徳破物語」にも認められてゐるが、この物語は徳が珍らしいとも知られてゐる。喜劇味が主題をなしてゐて、朝鮮及び支那説話に近い。聖法法印の「神道集」にも載せ、狂言「土産の徳」とも同材。「風葉集」所見散逸物語の「徳も知らぬ物語」とも同様の交遊ないとも言へない。諸曲「松山徳」は、この説話と交渉があるとして緊密な關係は無い。後半には「徳れり」(別題の仙傳説の分子が附加せられて居る。白鼠どもの居ることや徳が谷の名に見ても、「徳れり」(鶴の草子)各題等と交渉があらう。女流の鳥の觀念とも通ずるものがある。

【梗概】昔、近江の片山里の一老翁が都見物に行くと、四條通の成る店を賣つて居る。その頃、始めて鹿野から都に傳はつた徳といふ物を知る由もない翁は、その面に美しい女房や色々の寶物などの現れるのに驚き、珍しい物と思ひ、千兩で買受けて歸郷し、頼かに唐櫃の底に納めて置いた。それを知つた女房は翁の留守に開けて見ると女の姿が在るので、他の女を隠して置くものと大に憤り、母にも告げ、翁の歸り待つて恨んだ。歸しても一層憂ひを深める事となり、隣人に聞かれる事を恥ぢた翁は徳を重代の太刀で打破つて了つた。その勢に女房や母は逃去り、徳の破片にはなほ個々に人の徳が現れるので、翁は化物として射たところが依然としてゐるのに悔れをなし、俄に駆け出して野山を逃げ、深山に入つて夜となつた。谷の燈火を目當に、或る家に辿りつき一夜の宿を求めると、内には美しい女房が居る。此處は翁が谷又は隠れ里といひ、女人のみの住む所で、時には竹生鳥の捕射も来られることがある。男の来るのは吉事なので、女房は翁に不老不死の薬と深山の砂金を與へた。数へられた路を立ち歸つた翁は、女房や母を探し出し、不老不死の薬を與へ、みな命長、子供も多勢得で繁昌した。

【参考】昔書集(歴世女流考)○古代小説史(〇徳破翁傳)について、小川龍一(歴史と國文學) 昭和五年ノ八。 【保結】「保結」(保) 文法【解説】一定の助詞とこれを承けて文を終止する述語の活用形との間に存する呼應(照應)の一種。主語は述語に係り、述語は主語を承けて結ぶ。かゝると云ふのは意味が續くことであり、結ぶといふのは文を終止することである。かゝういふ意味

で係りを求めれば、主語は述語にかゝり、修飾語は被修飾語にかゝる。文の述語とこれにかゝるものとの間にある照應を、昔から保結といひ、普通に文の結びは終止形であるが、特別の助詞があれば、他の特別の活用形を用ふ。係を文の述語にかゝるものと、然らざるものとに分けて、前者には保結があり、後者は保があつて結びがない。保結には左の三種がある。

【参考】てにをは性徳本原宣長(〇詞の玉緒同上) ○てにをは保結神原宣長(〇語學自在 徳田文法論 山田孝雄) 〇國文法論 松尾清太郎 賀川豊彦(かみ) 思想家(「生年」) 明治二十一年七月、神戸市兵庫島上町に生れた。 【國歴】明治三十八年徳島中學卒業し、次いで上京、明治學院に入り、同四十年高等學部修了後、神戸神學院を卒へ、大正五年米國アリントン大學神學部に入り學位を得た。同七年歸朝、神戸の貧民館に投じ、彼等にクリストの福音を傳へ、且つ無料婦孺愛護救済所を設立した。傍ら小説・評論の筆を執つた。同十二年關東大震災の際は、いち早く上京、本所に居を定めて、基督教青年會を起して種々盡力した。その後、米國大學々生聯盟の招待に依つて渡米、歐洲を巡つて歸朝、大阪に四貫鳥セツルメントを設立經營した。昭和四年、東京市顧問として招聘せられ、社會事業に參與した。その後、再度歐米に遊び社會事業を觀察した。【著作】最も有名なものは「死線を越えて」(別題)である。映畫に劇に演ぜられて大衆に歡迎せられ、美、獨にも翻譯された。他に「太陽を射るもの」(櫻の聲

して無批判的に尊重する云々の程度に止ま
つてゐる。
【備考】和歌史の研究に本欄上代國文學
の研究並に古田龍吉の文學論として見
た初期の歌論大井國語國文學の三五〇四
歌論式に就いて吉澤龍昌の文學史三一〇
四五頁の「時評」を見よ。【中島】
歌論時評 時評

【格】(一)文法【名格】(二)格【動格】(三)格
Kanus (名) Le ca (名) 文法範疇別項の
I. イ. ア. ム. ロ. パ. 諸格(名格)に於ける名
詞・形容詞・代名詞の語形變化の一種。單語形
式とし、フ. ム. ヌ. ス. 等に於て次の八種を
區別するの最も複雑な例である。(1)主格
(nominative) (2)呼格 (vocative) (3)對
格 (accusative) (4)助格 (instrumental)
(5)與格 (dative) (6)奪格 (ablativ)
(7)屬格 (genitive) (8)終格 (terminative)
その他の國語に於ては同一語形の二種又は三
種以上の格に相當するが、格の語形は種類
が少なく、現代英語の名詞の如きは、所
有格 (possessive case) boy's, boys' と「共通
格」(common case) boy, boys との二種
にのみ二分する。但し共通格を分けて「主格」
と「目的格」(oblique case)とするが、
Many people know it. (主格)
We know many people. (目的
格)とするのは、右の例の如く連語形式による
のだから。

【備考】O. Jespersen: Philosophy of Gram-
mar. 1. 24. E. A. Sammelin:

が續行時代及び足利時代に出来てゐるが、要
するにそれは樂向を中心として、その解読や
故實を後述と書き記したものに過ぎない。そ
れ故樂の全般に涉つて、系統的に且つ組織
的にこれを研究しようと思へば、この書に據
るより外に餘は無いと言つてもよい。殊に樂
樂器の製作法及びその取扱ひ法、舞樂裝束
及び附屬品の製作等に至つては、この書に據
て最も多くの確りどころとなすべきである。
即ち凡ての意味に於て、この書は我が邦樂界
の大百科辭典たるに恥ぢないものと見てよ
い。だが惜しいことには元々當時は詞歌は中
絶してゐたために、詞歌に關する記録の全然
ないことである。【田島】

しきを感じしめることが出来る。日本では
客観描寫に非常に苦心したのは田山花袋であ
る。彼には「客観」といふ比較的確たる論文
があるが、その大部分は、客観描寫論に費さ
れてゐる。小さな例であるが、梅の花が白く
咲いてゐた。では客観描寫ではない。梅の花
が白く咲いて見えた。と書いて、始めて客観
描寫になるといふやうな、細かなところにも
立入つた例である。【宮島】
客観描寫 客観

客観描寫

文學に於ける描寫法の一つで、自然主義文學
に於て最も多く試みられたものである。描寫
せんとする對象に對しては、自己の主眼を加
へず、そのあるがままに觀察し、これを何
等の修飾せずに、平明に新鮮に表現する手法
である。客観描寫は決して自然その他眼に見
える事象、人間の行動の描寫をいふのではない。
對象の如何に依つて決定される描寫の種
類ではなくて、寧ろ主観といふ心の態度か
ら規定される表現法である。従つて最も複雑
した心理状態でも、これを客観描寫の對
象となし得るのである。例へば説明の便宜上
簡單な心理状態、淋しいといふ感じ、これ
れで淋しいといふところが淋しい感じが構成し
描寫ではない。ところが淋しい感じが構成し
た要素を客観化して、それを描いて行けば、
それは客観描寫となり、淋むものにも同じ淋

頭には、三幅對として、江戸子と大阪人と京都
人を出し、次いで後頭上上書に扇の定
違を出してゐる。頭取は扇運を物巻風の
位置に据ゑた所以を説明する。それら扇風
違の拵合となる。次に後頭上上書に客観
調知りあげ、上上書に客観調知りを出し、上
上上に客観調知りあげ、上上上に客観調知り
とを擧げてゐる。立役の客観調知りは大上書
として客観調知りを出してゐる。これは所
謂大向である。観仁形の部、功上上書とし
て古實者あげ、最後に上々書として昔扇風
を出して、役者の今昔比較論から昔の佛像を
褒めてゐる。なほ實惡の部、客観調知り
の部などは、種篇に讀る旨を記してゐる。
【構想】本書の内容を見るに、三つの部門に分
けられると思ふ。即ち序曲としての前文と、
純然たる評判記の形式のもの、拵合による
會話とである。そして前文の見物左衛門の一
章は、鳥居守馬、五代目市川團十郎の「五百時
鳥の評判」の構案で、且つ三馬の「浪花土産初
物語」を展開したものである。拵合による會
話はその構案で、彼獨特の穿ちを表現してゐ
る。要するに本書は構想に於て新機軸を出し
たものではないが、會話の描寫にすぐれてゐ
る。【價值】當時の讀書界にはそれ程好評で
はなかつたが、一種の劇場文學としての尊重
すべきものと思はれる。三馬の演劇道である
事は、「戲場調査圖説」(二卷)の「江戶人
狂言切形」の著にても知られる。當時の江
戶民衆が芝居に對した態度や、芝居好や役者
扇風心理を撰んで書いたものとしては「浮

The Soul of Grammar. 1927. 【著者】
樂家 笠岡 五十卷 宮 立
元祿三年(諸本)寫本で傳へられ、全部白文
のまゝのもの、返り點送り假名等を加へた
ものと二種行はれてゐる。【内容】樂家全集
の解説書。全部漢文にて記し、神樂、能樂、
各樂器の樂曲・舞舞・放蕩・研究に涉り、樂家
の古書から集めた所の材料を公平に比較考證
して丁寧な語句を添へ、詳細に記述して
ある。左に全五十巻の總目録を擧げる。
第一總目録(總論)の作法等、第二總目録(神樂)
神樂大御所御覽(卷一) 神樂大御所御覽(卷二)
神樂大御所御覽(卷三) 神樂大御所御覽(卷四)
神樂大御所御覽(卷五) 神樂大御所御覽(卷六)
神樂大御所御覽(卷七) 神樂大御所御覽(卷八)
神樂大御所御覽(卷九) 神樂大御所御覽(卷十)
神樂大御所御覽(卷十一) 神樂大御所御覽(卷十二)
神樂大御所御覽(卷十三) 神樂大御所御覽(卷十四)
神樂大御所御覽(卷十五) 神樂大御所御覽(卷十六)
神樂大御所御覽(卷十七) 神樂大御所御覽(卷十八)
神樂大御所御覽(卷十九) 神樂大御所御覽(卷二十)
神樂大御所御覽(卷二十一) 神樂大御所御覽(卷二十二)
神樂大御所御覽(卷二十三) 神樂大御所御覽(卷二十四)
神樂大御所御覽(卷二十五) 神樂大御所御覽(卷二十六)
神樂大御所御覽(卷二十七) 神樂大御所御覽(卷二十八)
神樂大御所御覽(卷二十九) 神樂大御所御覽(卷三十)
神樂大御所御覽(卷三十一) 神樂大御所御覽(卷三十二)
神樂大御所御覽(卷三十三) 神樂大御所御覽(卷三十四)
神樂大御所御覽(卷三十五) 神樂大御所御覽(卷三十六)
神樂大御所御覽(卷三十七) 神樂大御所御覽(卷三十八)
神樂大御所御覽(卷三十九) 神樂大御所御覽(卷四十)
神樂大御所御覽(卷四十一) 神樂大御所御覽(卷四十二)
神樂大御所御覽(卷四十三) 神樂大御所御覽(卷四十四)
神樂大御所御覽(卷四十五) 神樂大御所御覽(卷四十六)
神樂大御所御覽(卷四十七) 神樂大御所御覽(卷四十八)
神樂大御所御覽(卷四十九) 神樂大御所御覽(卷五十)

の強いつつ買つて来させ、冠者にも飲ませ又
舞を所望する。冠者の當惑するのをなほ左右
へ廻つて舞はせ、それから二人相繼して、冠者
の腰に懸した短刀を見せられ、それへ舞はせ
ないかど詰る。冠者は、舞ではございませ
ん、どこまで、冠者は、舞ではございませ
ん、どこまでと追ひかける。
【構想】これは一方が冠者とすれば、他
方はこれを益々見せられさうとするといふ
心理の動きが能く表現せられてゐる。物事
を動かさうとするか、もしくは「裏」にも
ある。この作は傾向は単純であるが、實際的
効果は十分で、殊に終りの酒宴から舞になり、冠
者が迷ひ走る場面が滑稽味である。(野村)
客観評判記 客観評判記

客観評判記 客観評判記

客観評判記 客観評判記

の種の歌が多くなつた。物名歌は「古今集」の
一部分を占めて居るが、物名を題として表面
に出さないで、諷刺的隠微となる。和歌の社交
的進化的傾向が多くなるにつれて、諷刺も盛ん
に行はれるに至つた。諷刺そのものによつて、
進化的が見られるのであるが、これは更に進
を種々の方面から進化的にしたものであつて、
歌本来の意義から言つて何等の價値もない。
ただ和歌そのものに社交的進化的性質の加
つた時、如何に巧みに諷刺をこむかといふ所は、
一面の興味があるのみである。(藤田)
【備考】美談抄 八雲抄

【備考】O. Jespersen: Philosophy of Gram-
mar. 1. 24. E. A. Sammelin:

客観評判記 客観評判記

客観評判記 客観評判記

【備考】O. Jespersen: Philosophy of Gram-
mar. 1. 24. E. A. Sammelin:

客観評判記 客観評判記

客観評判記 客観評判記

客観評判記 客観評判記

世庄『浮世風呂』(各別項等と共に、彼の傑作の部に置くべきものであらう。(大正)

『参考』『小説』(見よ)。『参考』『小説』(見よ)。『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

が案内を乞ふ。續いて播磨の者と河内の者が来る。主人は皆を興へ通して、かくすいといふ

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

本本原には昭和元年に寫したと云ふ奥書が、

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

ないことを知つたお梅は金助のために金の

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

『参考』『小説』(見よ)。

作である。

こと勿れと戒めたが、伊弉諾尊は好奇の心からその禁戒を破つて、密かに産室を覗くと、女神は火神を生んだために陰所を焼かれて苦しんでゐた。女神は火神が約に背いて己を見たのを怒り、御身は上つ國を治め給へ、われは下つ國を治めんと云つて、黄泉國に去つたが、黄泉の救救に至つて、わが夫の國に悪い神を生み残してこれを鎮むる法を請ひなかつたことを悔い、更に水神、伊弉諾、伊弉册を生んで、火の災を鎮めさせることとしたといふ。[神代卷]

のは、この植物を目して、火傷の禁歌に有効であるとする民間信仰の反映であり、伊弉諾尊の死及びそれに原因する多くの生成的な神の出現が、特に火神を中心として語られるのも、恐らくは火で大地を焼き痛めることによつて、その生成力を制する民間の農耕的風習から来つてゐるものであらう。伊弉諾尊は自分の見るところでは、一個の大地女神であるから。

してある。[價値] 中世に於ける雅楽の記録は極めて少なかつたが、それすら足利時代の末に至つて雅楽装束の補に達した時に、多くは不明になつてしまつた。そこで徳川時代になつて雅楽復興の議が起るに及び、その故實を調べる序で、確實なる古記録を蒐集する事が最も大切な仕事であつた。但し調査研究の書類としては、中世の末に豊原秋秋の「體抄」三巻があり、又徳川時代に入つては安房季尚の「樂書」三巻が編纂されたが、これ等はどれも當時の研究調査の結果を記録したものである。そこでこの書が現はれて、古い雅楽の記録を集成したので、實に貴重な資料を提示したものと云はなければならぬ。即ち「教調抄」(體抄)「樂家録」と共にこの書を加へて、我が邦の五大雅楽研究書となすのである。[田邊]

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

【神代卷】伊弉諾尊が大八洲及びさまざまの神を生んだと、火神御土を生んだために神遊りました。大神伊弉諾尊がその死を悲しんで、十尋で御土神を斬ると、その屍と滴る血潮から多くの神が生れた(記述)。更に他の神話によると、伊弉諾尊が火神神を生じるとき、夫神に對つて七日七夜われを見る

く、京阪ではその歌風が一世を風靡したと言つてもよい位に流行した。その門下から出た人々も皆一方の雄で、多くの作家を生んだ點では、或は眞實な官長に劣らなかつたであらう。而して聲樂が論争の目標としたのは眞實であつて、極力これに反対した。先づ第一は用語に就てである。眞實は古學を精神的に見ようとした結果、歌はつとめて古語を使つて詠めと言つたに對し、聲樂は用語を現代語とせよ、耳に聞けば直ぐ心に感じられる親しい言葉を以てすべきで、それが歌の大道であると言つた。彼は歌は歌のためには、向上の方便や、社會教化のためなどにするものではないことを、一般の歌人に理解させたのであつたであらう。歌を詠むのは我々の本能の行動で、そこに何等理智的な動機はない筈である。方便に詠むとか、社會教化の爲めに詠むとか言へば、そこに理りが生じ偽が入つて来る、歌の正しい道ではない。寧ろ我々の本能を満ちたすといふ意味で、あるがまゝに眞實な感情を詠むべきである。眞實な感情を詠とすべきである。それには我々の生活に遠い古語などで詠むよりも、近代語で詠む方が自然であるとする。これが彼の歌に於ける根本思想で、調の論の根柢もこゝにあると見てよい。江戸に於ける歌人の多くは、作といふことをその學問よりも低く見たのは、聲樂は作歌の衝動を重んじ、作品を本質的のものとして却つて尊んだ傾向がある。用語例の如きは論理に一面缺點があるが、學問よりも作を重んじた主張は、聲樂の如き自信ある作家にして始めて言へることである。

亂雑なものではなかつた。歌品を重んじ、愛護の調和のためには修飾が必要とされた。殊に彼の如き立場の人は歌が多い。容易に當時の現代語で歌を詠み得なかつた事は言ふまでもない。そこで目安を古今集に置いて、その取材方法と調、それを生かす事に苦心を拂つた。情氣に満ちた天保前後の歌壇が、これによつて一脈清涼の氣に更生したのは當然の事である。聲樂は自己を作家として誇り、又その



(第一の論歌) 聲樂 樹景

聲樂の伴奏が必ず無ければならぬ。この四形式は歌の成立に於いてならぬものである。四形式の外に舞踏や唄はぬ言葉を交へる場合がある。【種別】歌は大体三種に分類される。(一)グランド・オペラ(Grand Opera)。(二)ライト・オペラ(Light Opera)。(三)ミュージカル・プレイ(Musical Play)。(四)は大歌劇、又は正歌劇と譯され、前のグランド・オペラにそのまゝ當てはまるもので、これは首尾一貫して音樂化した劇であると同時に、規模も氣分も、共に莊重なのを常とする。即ち聲樂と舞踏を交へる事は勿論であるが、音樂的でない聲樂を少しも交へないものを云ふ。西洋で單に、オペラと云へばこれを指すに決つてゐる。(二)は大歌劇感以前に行はれた音樂中心の劇や、大歌劇の形式になつた小規模の歌劇を總稱するもので、これも詳しく分ければ次の四つになる。第一、Operetta(小歌劇)は概して簡明な短物で、時に會話や音樂なしの素の言葉で進ぶ事もあり、通俗的な題材、趣向のものが多く、第二、Singspiel(唱歌劇)は、喜劇的要素を主としたもので、獨逸の民謡、吟詠を主としてゐる。第三、Pastorale(牧歌劇)は、佛蘭西に盛んな形式のもので、我が國の能の狂言が獨立して變化したお國歌舞伎になつたのと趣を同じくし、オペラの間の狂言めいた挿話が發達し、獨立したものと見られる。第四、Comic Opera(喜劇歌劇)はその名の通り喜劇であつて、専ら英國に發達したものに冠せられる名稱である。中にもギルバートとサリバンとの二人が協力して完成させたものを呼ぶ場合に最も多く用ひられるが、冒のこゝらに、通俗的なものである。以上四つは、結局は同

じ味の小歌劇であり喜劇であつて、發達の國時代、作者によつてそれ／＼稱呼を異にするに外ならぬとも云へる。(三)の musical play(音樂劇)も、前の light opera と其類似した通俗劇を指す名であり、喜劇的な内容のものが多いので、musical comedy(音樂喜劇)の名の方が一般的であるが、元來これは通俗劇であるものの中へ、時に應じて音樂や歌や舞を取り入れたもので、劇が主、音樂が従である點に於て、丁度その逆に發展して来た小歌劇とは、成立の順序が違つてゐるわけである。従つて歌劇研究の範圍からは省略せられるが普通である。この形式が英國に最も盛んである事は注目すべきである。

【起源】聲樂に連れて歌ふことは、大略すれば、二つの場合に行はれる。一つは樂しみ慰む時で、民謡・俗謡はこれである。他の一つは祈り歌ふ時で、宗教的なものである。歐洲では十世紀前後から、教會内で盛んに音樂唱歌が利用され、antiphonal(應答)なる一形式が創始された事は、恰も我が國の寺院から能樂の芽が萌したのと同様であるが、それが原因して、器樂・聲樂の發達を見れば、一般民間の抒情物語風の唱歌も發展し、遂に種々の點で最もその方面に惠まれた伊太利に、音樂を中心とした物語劇が生み出された。一説には、伊太利人は古代希臘劇の復活を企てたのであるが、過つて歌劇になつたのだとも云ふ。いづれにせよ、西紀一六〇〇年に伊太利の音樂者ヤコブ・ペリ(Jacob Peri, 1561-1633)の作曲した「エウロイシス」(Eurycleia)が歌劇の第一作であると云ふのが定説である。この作は佛蘭のヘンリー四世の結婚祝ひのためにフロレンス市で上演されたもので、全作哈ドレンタナ

一ツから成り、ただ僅かの合唱が挿まれてゐるに過ぎず、樂器もヴァイオリン、レタロー、ス、リッパ、クラリネット等の管絃楽器のみで、及びハイ・アップ・スト等の管絃楽器のみで、ここに「音樂的作曲」と呼ばれるにふさはしい聲樂を主とした劇であつた。

【沿革】歌劇は伊太利に生れたが、直ちに佛蘭西及び獨逸へ輸入され、各國それ／＼の發達を有する獨逸人は、十八・九世紀の歌劇界を席捲するの勢ひを示した。その代表的な作曲家はグレンク(Gluck)とモーツァルト(Mozart)とワグナー(Wagner)の三人である。グレンクは基礎を固め、有名な「ガロの結婚」の作曲者モーツァルトはそれを大成した。ワグナーはその後を承けて、やゝもすれば聲樂や器樂の音のみを主とし、形式の變化や技巧のみを重んじ、理論及び實踐を通じて主張した。その代表作には「タンホイザー」「ニーベルンゲン指輪」等がある。略同時代に伊太利には「セヴッラの理髮師」の作曲家ロッシニ(Rossini)及び「リゴレット」「トラウタ」等の作曲家ヴェルディ(Verdi)がある。十九世紀後半になつてからの歌劇作家は餘りに多く、しかも何れも相當の名作を出してゐるが、中でも伊のグノー(C. F. Gounod, 「ファウスト」)、佛のグノー(C. F. Gounod, 「ファウスト」)、佛のグノー(C. F. Gounod, 「ファウスト」)、佛のグノー(C. F. Gounod, 「ファウスト」)などがある。又最近の作家では佛のビヤンパー(Diaghilev, 「エジプト」)などがある。又最近の作家では佛のビヤンパー(Diaghilev, 「エジプト」)などがある。又最近の作家では佛のビヤンパー(Diaghilev, 「エジプト」)などがある。又最近の作家では佛のビヤンパー(Diaghilev, 「エジプト」)などがある。

五十巻集(日本名義集)等所収。

【大佛供養】四巻目二段劇能(作者)未詳(能本在者註文二百十番目録)。

【内宮】平家没落の後である。悪七兵衛景清(前シテ)は西國から京に上り、清水に七日参詣してゐたが、大佛供養を幸ひに群集に紛れて奈良に忍び入り、母(ツツ)を訪ねて、一夜を語り明かした。翌日、源頼朝(子方)が從臣(ツツ)を命じて大佛供養を行つてゐると、景清(悪七)は社人の姿をして供養の場に近づいたが、頼朝の從臣に見捕された。頼朝の武士が討取らうと騒ぐ。景清はあざ九を抜いて斬り掛り、形勢の悪化を以て姿を隠してしまつた。五流現行。

【景清】四巻目二段劇能(作者)世阿彌(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

り従四位下侍從に進んだ。將軍家齊を輔佐し、弊政を革め紀綱を張り、節儉を命じ、文武を興し、武備を嚴にして所謂寛政の治を成した。寛政五年左近衛少將に任ぜられ、文化九年國を退いて樂翁と云ひ、文壇を樂んで後進の生を送り、文政十二年七十二で卒した。常に學問を好んで造詣深く、又和歌書畫を善くして、當時の文界に重んぜられた。著述は甚だ多いが、國本論(三草集)退閑雜記(前項)及び本書が最も著はれてゐる。又谷文晁をして「集古十種」を作らしめ、以て考古學及び史學に貢献した功も没すべからざる事である。學術文藝の士にして、公に起用せられた人も少くなかつた。(相田)

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

【景清】(能本在者註文二百十番目録)。

ある。作者はこの長門本(又は幸若舞曲)に基いて、大佛供養では、その前段に「小袖曾我」と同じやうに、敵討の前母を助ねることとし、「景清」では、平家物語諸本の「有主鳥下りの事」から思ひついて、娘が配流の父を尋ねることを構想したものでなからうか。「大佛供養」は前段の母が餘りに弱々しく、後段の娘も失敗に終つてゐるので、やゝ場面が陰鬱で、首目の老武者に功名話をさせた所に、一層の深刻味を出してゐる。(佐藤)

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

つた。しかし十年餘も過ぎて、自然主義の運動が起つてから始めて知られたやうな文學者の作品を、既にこの時翻譯紹介してゐる先驅者の功績は認むべきものである。水法集二月草と共に、「しがらみ草紙」に據つて、文字通りに三回六臂の活動をしたことを、書册の形を以て語る貴重な記念碑である。(小島)

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

富士谷成實書入本三巻(帝國圖書館藏)、伊藤光徳藏書入本八巻(同上)、實茂書院書入本八巻、山田傳明藏書入本(東京文理科大学藏)等がある。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

【参考】讀曲大觀佐藤博士。

て、宮内省圖書寮に藏せられてゐる。【成立】村上天皇の天曆八年から、開元天皇の天曆二年に至るまで、約二十一年に亘る出来事を書かれてゐる。その記述には精細があり、年によつて一定し難い。藤原博士は、國文全史史一、平安朝篇に於て、記事の精粗の點から推定して、「上巻はその時々におけるにあらずして、後に思ひ出でて記されるべし。中巻は安和二年、天曆元年、同二年の事、下巻は天曆三年、天曆元年、同二年の事にして、記事はこれ等の年に至りてはじめて委し。天曆二年、同三年の如きは、殊に詳かにして、何日に雨降る、風吹く、火ありなど、一々記せるをならん。これ等はその日々に記せりと云ふ天曆二年こそ、心安からぬことのみ積りて、(中略)かくてぞ心やりに物語やうの日記に筆をつけ加へたるものにて、それにはじめの事をも即ち天曆二年頃から執筆され、前の方をもその時に追記されたといふ。種々な説では

本澤手林見下松日記日始端1

月から二十五年の古りにし夢の物語を筆に残すといふ筋。

【構想】本曲に於て先づ氣のつくのは、美濃屋三郎を寛永頃名高かつた女舞の座元笠屋三郎に閉會してある事だが、これは作者の創意ではなく、前述の謡曲も歌文も共に笠屋三郎となつて居るから、これを直に利用したものと見られる。而して二人の情死の原因や、敵役の善右衛門を使ふ點や、最期の構想など、特に歌文に負ふ所が多いやうであるが、情死の原因は、三郎の遺書と傳へられる中に見えらるやうに、半七が親族から毒を強ひられたからではなく、命のかたに三郎が善右衛門に奪はれようとするため、半七には既におすがといふ負けた女房があつて、半七は最期までこの妻への義理を忘れ得ないやうに仕組み、又三郎の伯父の平左衛門は實際は因縁親戚であつたといふのを義侠的人物に作り、お通は伯父の許で三郎の母の手で育てられて居るといふやうに脚色され、場面の変化もあり、人物も相應によく活動して居つて、海音の世話物中、佳作の二に数ふべきである。【影】本曲は三郎半七の戯曲としては注目すべきもので、直接間接にこの影響を受けて作られた浄瑠璃や歌舞伎は少なくないが、その中で浄瑠璃としては「女舞舞紅風」と「雲容女舞衣」の二曲が名高い。「女舞舞紅風」は延享三年十月廿一日から道頓堀の陣竹小島太夫座で興行されたもので、作者は春草堂、外題に「浮名萬歳五十年忌」と角書をつけてある。この曲は「廿五年忌」の改作であるが、笠屋三郎を美濃屋三郎と改題通りの名に戻し、その兄に善二郎といふ故高のために期賞された男があつて、それが後に半七の罪を引受ける役

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

【備考】海音研究集本(日本音楽叢書)土御門方(一)書中「當時右府實氏」とあるのに據つて見ると、藤原實氏が内大臣から右大臣に轉じたのは、四條天皇嘉祥元年十月二日である、すなわち翌年四月十八日には辭任してゐるから、この書の成立は嘉祥元年の冬から翌二年の春までの間であつた事が推測される。【附】「延文二年(文明十八年、天正十七年)の奥書がある。【解説】天皇・太上天皇以下の服制に就て記したもので、上巻は、衣服・袴下・腰・袴袴・打衣・柏大目・横扇・袴紙・直衣衣、

るが、就中古今名將勇士の成敗利鈍の跡についで批評を試み、又は先哲の言行、詩文和歌等何に限らず、手當り次第、筆に任せて感想を述べたものが多く、殊に作者自身の境遇から、古來君臣遭遇の難きことを論じ、阿波の小人が出世し、賢人君子が却つて斥けられるといふ、いつの世にも珍らしからぬ不如意の世相を慨したるものも少くない。例へば山本勘介の事の如き、それである。



此人は僅く、色弱く、かた目にて、ちんぱり、三州年寄の住人、山本勘介とて幾々の武士あり、

意地を説くところの「歌人」と言ふべきものが多かつた。

【初段】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【二段】相模の城では、老臣共は奇手を引受け、

【三】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【四】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【五】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【六】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【七】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【八】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【九】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【十】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【十一】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

巧に編案し、取合せて波瀾を描き、結局めでたく復讐するといふ仕組にした處が作者の働きである。尤もかゝる作意は古序の最初の「お家物語」(安土)などにも見られるが、その編案より、その人物の扱ひ方に眼を見せらる。殊に三段目の庵室の隠せ坊主、四段目の辻堂の狂女、五段目の勘遊比丘尼の無向など、いづれも面白いと思ふ。(原本)

【十二】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【十三】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。

【十四】津の國せいの城主入間左衛門門前は、年來天下に名をあげ同志を糾合中、在鎌倉の越後相模の城主兵部大夫清政を勧誘したが、同心しないので、鎌倉を以て結盟を切らせ、重ねて上意を呈下し、本城へ討手を出し、鳴之澤に於て軍略を説き示す以上、大府へ清政の区區離小太郎守國は、主君の形見を携へて歸陣し、事情を告げて、先づ清政に都へ忍ぶやうにと勧め、清政は「相模」により、調子もその様用ひと部分が多い。例案はその子花小太郎に案内させ、三三三と腰元祐のみの構ひ野泊した處へ、人間の部黨が追跡した。小太郎の機轉で四人は橋下の二艘の舟に乗つたが、それは人買舟で、舟子は分れ、この時、清政は船と若君の舟を忍ぶの餘り溺死する。



(物語)記論現編日春

豊ばれてゐた西園寺家の新編を編めて製作されたもので、その詞書には藤原家の女子四人...

春日局 関本 五幕 活劇物 (作者) 關本 関本 関本...

和聲 Die Harmonie 音楽の形式要素の一。高さを異にした多くの音が同時に響いて...

の間春日局の部屋(中蔵門の外)秀忠の御愛所は春日局千代を將軍に擁立せんとまで...

春日派 春日派 春日派 春日派...

風につれなき物語 風につれなき物語...

で、奴が國は何處かと冠者に聞くと江州守山だと云ふ。そこで守山は彼所だから...

和聲 Die Harmonie 音楽の形式要素の一。高さを異にした多くの音が同時に響いて...

和聲 Die Harmonie 音楽の形式要素の一。高さを異にした多くの音が同時に響いて...

風につれなき物語 風につれなき物語...

【参考】講初抄抄 藤原元 律書大系門律書...

【歌仙繪巻】繪巻【解説】平安朝 以来和歌の流行に伴い、歌合なども盛んにな...



(藤原竹花書) 繪巻歌六十三

な關係のある事は勿論であるが、更に當代に...

【歌仙ぞろへ】佛語集 一册【編者】山岡元...

したものとと思ふ。しかし、同じ年の七月十日...

【参考】主として、曾我兄弟の幼年時代を敘した...

【歌へ唄】手鞠歌【解説】藤原元...

【流行唄】流唄の流行の始は、安永三年の...

【雅俗隨筆】古今傳説等十八巻を考證した...

一 表源字及體諸名假片

ア	イ	ウ	エ	オ	カ
ア ア ア ア ア ア ア (阿)	イ イ イ イ イ (伊の偏)	ウ ウ ウ ウ ウ (宇)	エ エ エ エ エ (江)	オ オ オ オ オ (於の異體)	カ カ カ カ カ (加)
ア ア (可)	イ (阿)	ウ (可)	エ (阿)	オ (阿)	カ (阿)
キ	ク	ケ	コ	サ	シ
キ キ キ キ キ (可)	ク ク ク ク ク (久)	ケ ケ ケ ケ ケ (可)	コ コ コ コ コ (可)	サ サ サ サ サ (左)	シ シ シ シ シ (止)
キ (可)	ク (久)	ケ (可)	コ (可)	サ (左)	シ (止)
セ	ソ	タ	ツ	テ	ト
セ セ セ セ セ (世)	ソ ソ ソ ソ ソ (世)	タ タ タ タ タ (太)	ツ ツ ツ ツ ツ (川)	テ テ テ テ テ (天)	ト ト ト ト ト (止)
セ (世)	ソ (世)	タ (太)	ツ (川)	テ (天)	ト (止)
ナ	ニ	ノ	ネ	ヌ	フ
ナ ナ ナ ナ ナ (奈)	ニ ニ ニ ニ ニ (二)	ノ ノ ノ ノ ノ (小)	ネ ネ ネ ネ ネ (天)	ヌ ヌ ヌ ヌ ヌ (示)	フ フ フ フ フ (フ)
ナ (奈)	ニ (二)	ノ (小)	ネ (天)	ヌ (示)	フ (フ)

かたか

五三三

だ歌は同じであるが、曲節は兩者異にしてゐる。而して「歌謡」の譜に就いて見れば、「本編」の「譜」に「かたかふもなし」とあつて、二段より成り、後半は片歌の形式となつてゐる。斯様にして短歌形式であつても、實際歌ふ場合にはその形が可なり異つてゐるものと思はれる。且つこの兩者とも、片歌が大直日歌としても用ひられてゐる所を見るに、その間に深い関係があると思はれる（大直日歌参照）。「歌謡」所載の二首中、「新しき年の始に」の方の片歌は、平安時代に正月元日の節會に奏せられた大歌であるらしい。

【備考】神樂歌の採種の終に、講唱に對し片断と云ふのがあつたが、假名遣は異なるが本はやはり片下の意であらう。「東遊記」の大比羅も片下と云ふ。何れも上代の片下と同様の歌ひ方とした爲に出た名稱であらう。平安朝末に行はれた體裁の中にも片下と云ふ歌がある（東遊記神樂歌神樂歌参照）。

片假名 文字の一種（右稱）片假字とも書く。「かたかな」とも「かたかな」とも「五十音假名」ともいふ。「かたかな」かたかなの名は、「字津保物語」國語・通問等の卷にあるが初見で、「狭衣」堤中納言物語以下に見えてゐる。【解説】假名の一種で、漢字から轉化して、日本の言語を寫すために用ひられる音節文字（假名文字）の一種。後世のもの及び現代のものは、字形が標準體であつて、假名文字の他の一種なる平假名（漢字）の草書體であるのと區別せられる。片假名は文字としては、平假名よりも独立性が乏しく、釋義的である。それ故、發音を示す場合に、外國語を寫す時に用ひられることが多く、さやうな場合には平假名の文の中にも混用せられる。發音を示す場合に、音節の假名では示したい音を示すため、片假名に或る符號を加へ、又は片假名を變造したもの（片假名と共用することがある。少くは「ヤ」を「ヤ」で示す）などがある。

【起原】日本語を寫すに漢字以外のものがなかつた時代に於て、漢文の讀方を明かにするために、萬葉假名を以て調を字體に書き入れ、その起つたが、それは、たゞ心覚えのためのものであつたので、目立たぬやうに、胡粉を用ひ、又は朱や磁で細書した。萬葉假名も點畫の簡單な形を用ひ、遂にはその形が本體となり、もとの漢字（萬葉假名）から獨立して、專ら日本語の音を示す特殊の文字（假名文字）となつたのである。これが片假名で、その成立は平安朝初期であらうと思はれる。朝鮮の吏道（漢字）も、漢字の略字を漢文調讀に用ひたものから發達したもので、その形も片假名と一致するものがあるところから、これを學んで片假名を作つたとする説もあるが（金澤三郎氏「國語の研究」所載「假名の起源」Keenan Repository, vol. II, No. 6）、しかし、漢字の略字は奈良朝に於ても多く用ひられ、殊に正倉院文書中の琵琶譜の如き、片假名に基盤近い形を見てゐるものがあるから、且つ當時は朝鮮からの影響はさほど多くはあつたと思はれるから、片假名は日本獨自の發生と見るべきであらう。

【沿革】現に存する初期の片假名の例は、何れも漢文（主として佛經の傍に附したもので、年代の明かなものでは、正倉院藏經「成實論」に附した天長五年の調にあるものが最も古く、久原文庫の「百論」の天安二年の調、石山寺の「大智度論」卷五十の同年の調、聖德太子の「十輪經」の元慶元年の調などこれに次ぐ。この時代では同音の假名にいろいろの漢字（萬葉假名）から出たものがあり、又同じ漢字でもいろいろ違つた部分を含むて、違つた形になつてゐるものもあつて、異體の字が極めて多い。書體は大體草書又は行書であつて、平假名と區別のないものが少なくない。かやうに漢文の調讀のために起つた片假名は、後世でも漢文の調讀に用ひられた。然るに片假名は字體が簡單であるために、平安朝以來現存する中で、假名の例となつてゐる。江戸時代には片假名で五十音圖を書いて教へたが、排雲明鏡の「假名反切義解」によれば、吉野朝の頃、五十音圖を假片假字反切といつてゐたやうであるから、五十音圖を片假名で書くのが例となつてゐたことは、遅くも鎌倉時代以來のことであるらしい。片假名が用ひられるに従つて、漢文の傍に附けたものを、漢字の間に挿入するやうになり、ついで、本文中の語をも間々片假名で書くやうになつて、漢字と片假名を交へた文が院政時代からあらはれ、鎌倉時代の新興文學にも用ひられたが、一方、また男子の書く文には、和歌の書（御歌や甘書など）にも、片假名を用ひるものが生じ、遂に「後撰集」「伊勢物語」のやうな歌集や物語まで、片假名で書いたものがあらはれるに至つた（今あるこの種の片假名本は、鎌倉時代のもの）である。片假名は、平安朝の頃、「まんもの」だつたが、平假名に對して「まじ」といはれた漢字に伴つて用ひられ、その補助的文

字として發達したものであるから、後世でも、漢學者や佛儒は、主としてこれを用ひた。片假名の字體は、平安朝中期までは、同音の字に種々の異體が多かつたが、その後、異體字は次第に少くなる傾向があり、字形も次第にその本源を忘れて獨自の變化をなし、室町中期以後は、大體今日の形に近く、異體字の数も著しく減じ、江戸時代に入つては、二二三のもの外は、今日の形とほぼ同一になり、異體字もほとんどなくなつた。しかし、今日の字形に一定したのは、明治三十三年の小學令で、小學校で用ひるべき字形を定めて以來のことである。片假名字體の變遷の大體の傾向としては、もと草書から出て、古くはその筆意を生かしてゐるが、後に至るにつれて、楷書體となつたのである。これは漢字と共に用ひられたがためであらう。

【字源】片假名の字源になつた漢字は、行草體のものが多かつたのみならず、當時行はれた異體のものも少なくない。また、點畫を省略した略字が多數であるが、中には全形のまゝのものもある（イナなど）。略字には、漢字の一部をとつたのではなく、全く違つた形を用ひたものもある。ワの字源の如きはこれである（この形は輪の字の略字として、「金輪聖王」の如くリンと音讀する假名の「假片假名」の一々の片假名の字源は別表参照）。【作者】古くは書寫の作とする説が、排雲明鏡の「假片假名反切義解」以後の諸書に見えてゐるが、萬葉假名を用ひてゐる中に自然に生じたもので、或る一人の作ではない（假名参照）。

【参考】假名本木 伴信友「文藝類聚」一・二（書本）附録「假名遣及假名字體沿革史料」大津通「假名源流考」國語院編「假名の

二 表源字及體諸名假片

Table with 10 columns and 10 rows of Japanese characters and their corresponding symbols. Includes characters like ニ, ヌ, ネ, ノ, ハ, ヒ, フ, ヘ, ホ and symbols like (ニ), (ヌ), (ネ), (ノ), (ハ), (ヒ), (フ), (ヘ), (ホ).



字源に就て... 一〇點本書目録... 片上伸... 明治十七年二月愛媛縣越智郡波上村に生れ、昭和三年四月東京市外豊島区神田に没す。

譯にドストエフスキイの「死人の家」、セルゲイ・マクシムovichの「ドク・キホーテ」... 第二期は、観念論の詩人の時代であり、第一期は、科学的實証の時代である。

動きつゝあつた。だが彼は直ちにこの新興文學の味方にはならなかつた。... 敵討相合袴... 六場、お家物「作者」二代瀬川如草「通稱」。

書「一味書は、伊賀次郎の病室を散々ぬ。内匠は、また来て一味書を讀つたが、民右衛門は、味書が會合するや直に内匠の薬と知り、二人に散々恥しめられる。

かたが かたが

官次郎の妹お絹は月本武者之助へ便つて仇討の望み。内匠は佐々木半衛と名乗り、弁右衛門の母お熊を我が母と見せて、奉行こかしに武者之助へ小倉藩に奉公を頼む。(杉松越江堂)一味貴の家来五郎は側道に連れ、陰の

が、淨瑠璃式に幕多きに過ぎ、各幕の變化に乏しい感がある。(編者) 敵討以上 小説 風流の敵方(を自ら脚色したものである。菊池真純曲集所載)。(上

熱誠に感激してその仕事を助けてゐる石工百姓達が助けて、實之助に手出しをさせない。遂に成る老人の計らひで、九分通り出来た洞門の完成まで待つ事になる。實之助はその夜

復讐妹背山物語 草紙合巻 五册二十五丁(作者) 豊山改、山東京山(書工) 歌川豊國。巻頭の背山は豊川

(三)芝六の妻おきしは鶴島の琴を持ち、二人の子供をつれて所を去り、琴を弾じて合力を受け、三作兄弟は貧乏のなかでよく母に仕へ

てゐる十三編はこれである。(構想) 近松半二等の「猿山婦女伝説」によつた構想である。作者は原作の筋を簡易化し

をとつたらしく、作者京山を中にして京傳、豊國、阪本小泉新八等の背後は似顔であり、少

度) 淺路は兵助と密會の所を悪人等に捕へられたが、お春の方に救はれて暇を貰ふ。お春

して来たが赤堀の藤川に見破られ、危くつた所を初花に救はれる。(奥花園)源太郎と藤兵衛とが終に藤川に迫つたが、奥花園の巻を裂かれる恐れがあつて、空しく腕を挫いた。折柄三木が来て敵討の御教書を示し、奥花園の巻は三木も所持する旨を告げた。大下馬敵討、藤川が鎌倉へ門出の路を要し、兵助亡魂の助太刀で一同はめでたく本陣を逃げる。



敵討記手汝

【下巻】(十三)源九郎敵討をされて名を揚げようとする、おのが所在を快談方知らせるとして手紙を寄る。(十四)松原の口で敵討興行の立看あり、源九郎と快談及び家来助兵衛對峙してゐる。(十五)源九郎口上の巻にて、敵討記手汝の興行の旨を聞かされてゐる。(十六)源九郎快談主従立合の頃、悪右衛門突然快談の主従の首を斬る。(十七)源九郎無常を親じて得を縛ふ、關徳寺の和尚を弟子とする。(十八)僧侶の源九郎の前に伯父と快談と出現す。實は源九郎が狐に遊ばされたのであつた。源九郎こゝに名聞を止めて詫かからず、(十九)狐が、伯父・伯母・従弟・勲兵衛・關徳寺・悪右衛門・追討の七役早暮に殺れたと囁きしてゐる。

との場面、黒白の對の色文字、詩作に骨折の見ゆるところなどいふ際、すべて學者六衛門の作なることを考へさせられる。(山口)敵討御未刻本鼓(かたきうち)【興行】享保十二年正月十五日から「諸島丸明那東談」の切として竹本座初演。【題材】阿波島藩の藩士高川太兵衛が貞享元年二月八日、同家中本邊實右衛門を殺害して立退き、所々を遊歴して遊樂となり、眼科醫島川本龍と名のつて大阪南御堂の邊花屋の裏座敷に寓居中を、實右衛門の實兄紅州藩醫院村の醫師岡本雲庵の子、磯貝兵右衛門、同藩助の二人が、貞享四年六月三日、南御堂前で討果した。世に御堂前の敵討といふ。本曲はこの事件を仕組んだもの(二十)源九郎敵討(二十一)源九郎敵討。

取持たなかつたのを根に持つて逃げたので八内を斬つた。この騒ぎに一切は幕僚し、お雲も友藏も親から勘當される。(進行)「いもせり」の友藏、親は四國に子は難波津へと散り散りに別れ行く。(下巻)口雪の日に徳島城下の新橋で實右衛門と太兵衛とが出會ひ、お雲の問題で果し合ひとなり、老年の實右衛門に殺される。その財布まで奪つて太兵衛は逆電する。(中)友藏の九八郎とお雲とは大阪本橋橋側で愛結流儀をしてゐる。そこへ九八郎の母と許嫁のお菊とが願ひとなつて巡り來て邂逅し、哀れな事がある。夕暮店を仕舞つて歸らうとする途次、船着場で兵右衛門と助助の上陸するに逢ふ。お菊の眼病治療を受けた醫者の人相が尋ねる敵の島川太兵衛らしい。一同は悦び、九八郎は元の奴友藏となつて敵討の供をする。北久賣寺町四つ辻の刺客で兵右衛門等三人は太兵衛が御堂から歸るを待つ。未刻の太鼓を合圖に出た太兵衛に、助助は先づ一太刀をあげせる。太兵衛は實右衛門が最期に懐中した御堂へ寄進の調金三十兩を納めた旨を告げて快く袂を合せて討れた。

【構想】本曲に於ては、普通の敵討物のやうに敵討のための苦心に山を設けて脚色せずに、寧ろその動機を作つた複雑な戀愛關係を巧に扱つてゐる點が第一に目につく。次に敵討たる島川太兵衛は武士の體面と戀の意地とで相手を討果すが、その相手の調金を代つて御堂に納めてやるといふやうな人物で、これ亦返討までもしようとするやうな普通の敵討物に出る悪人とは違つて居るのも注目される。兩通つて居り、文章も流暢で、作者の才氣を示してゐる。【影響】本曲の改作物としては安

水七年正月廿六日から北越江藤興行の「御堂前敵討」がある。菅原助・豊三・豊竹・律・若江御射の合作。磯貝實右衛門を助助の實父、兵右衛門を叔父といふ關係にし、これに小菊中兵衛の情事を取合せて、筋を複雑にした。又友藏の移入も移入された。例へば「敵討未刻本鼓」の外題で、享保二十年七月十五日から中座で、寛保十一年九月角座で上演された如きがそれである。又江戸に於ては、後に改作書が上られた。「鳴響御未刻本鼓」(文化五年九月市村屋「敵討未刻本鼓」(文政四年五月河原屋「敵討御未刻本鼓」(同八年市村屋等がその例である。)

【復仇女實語】(かたきうち) 讀本二編【作者】十復舎一九【挿畫】諸島北馬【名題】孝女の復仇物語、童女の實語歌の如く、教訓に資せんとする意を寓したものである。【刊行】文化六年、「新修日本小説年表」には文化五年とあるが、自序に文化已初春とあるから、文化六年の刊行であらう。【挿畫】肥前國平津の城主に仕へた若島小傳治は仔細あつて浪人となり、嘗て召使つた編次作の食客となつた。編次作は時一計を案じ、豊前草津の領主西條某の後室に風俗を誦き、小傳治に己を取引せよとせよ、立身の緒を功を賞してこれを召抱へようとしたが、藩士等の反對があつて遂げず、編次作は家老矢柄兵衛に事情を打明けて謝罪した。然るに兵衛は丹左衛門と不和であつたので、上に取りなして却つて編次作を抱へ己が配下とするとして小傳治の妻おきやに構戀させ、遂に小傳治を誘致し、おきやを我意に従はせようとする

一人討つ罪にも行かず、残念ながら見送す。
 【四幕】(八橋祭の場)小倉公の指圖香たる月本武者之助の参詣を見かけて、源流は小倉公に抱へられるため、御前仕合には勝を譲つてくれと頼む。これより先、お秀、お祝の姉妹は武者之助の館に奉公して、武術を鍛錬してゐた。武者之助は姉妹のためにいゝ足留めとこの願を許した。腹黒い中間の九平次は、姉妹を源流に買らうとしたが失敗に終る。(五幕)
 (武者之助の館)與五郎が来て、姉妹の面影を見たいと申入れたが、武者之助は源流の祈には託されぬと断つたが、おすの自害から武者之助の疑も解けた。折から新にお抱へになつた源流が来て、大得意で廣言を吐く。姉妹等は焦つたが、源流が源の代参相済むまでは叶はぬと武者之助は抑へた。それと見て源流は横道を振舞ひ、お秀の顔に傷つけて歸つた。(六幕)
 (敵討の場)小倉城下、源流之助検分の下に敵討が行はれる。お秀は小太刀お祝は骨槍を取つて源流に向ひ、武者之助の助太刀でめでたく本陣を逃げた。その他姉妹の味方として奮いたつた與五郎は再び侍となり、助十郎はお秀と夫婦になつた。源流之助はこの地を源流島と命じた。

【脚色】宮本武蔵の仕合事件を脚色するため功したが、この件は、後世宮野野村の仇討と言はれた奥州に於ける享保年中の事實が頼られたものとと思ふ。武者之助の館は最も緊張した場面である。九平次と五郎の場以外は色氣に乏しく、全幕淡々とした感がある。
 【脚色】武者之助の館は、未だ浮城の直接的影響が少い時代の作である故もあるが、一面には夏狂言としての特徴からである。

【系統】原作が多少の改訂を加へられつゝ流石した外、別の作を容れた傍系が並び行はれ、その間、歌舞伎以外に浄瑠璃との交渉が絶えなかつた。それ等の主なものを挙げる。○花菱源流島(享保三年十一月、大阪北區、源流島。作者、源田一島等)。網案物で源前大橋家のお家騒動とし、月本定之進の妻子が幸時源流を敵と狙ふ筋にした。本作から歌舞伎への渡り人が多い。○信田小太郎御旗(享保三年七月、江戸中村。作者、源田一島等)。姉千鳥が敵源流に誘はれたのを妹が仇討ちする筋にした。市村座と浄瑠璃でこの方が當つた作である。○花菱源流島(享保三年八月、大阪北區、源流島。作者、源田一島等)。吉岡民右衛門の妻子が、敵源流島を討つたので、幼穉子敵討(源流)の影響がある。○けいせい島原源流(天明元年七月、江戸中村。作者、源田一島等)。御旗太鼓と天竺徳兵衛とを脚色した。○敵討(享保六年五月、江戸中村。作者、源田一島等)。宮野野村の仇討との脚交せ。○復讐(島原源流)文化十一年三月、大阪中區。作者、市村座。浄瑠璃に據り、武蔵の武勇流を主として描いた。但し善書は文化六年角丸芝居で井筒一書作である。南北の源流島源流の宮本より本作に準ずる系統を示す。
 【脚色】後世の敵討狂言に相富深く影響した。『幼穉子敵討』伊賀源流(浄瑠璃)、『浄瑠璃の一本太刀』白石(浄瑠璃)等は直接の関係がある。同名の黒本は原作から、黄表紙は二島英明記から取材したものである。(守田)
 【敵討誰女英】(享保三年、草雙紙、黄表紙、三冊、十五丁十八開)【作者】南無笑楚(村)鳥羽の源流傳説。



(貞初) (英女敵討)

【脚色】源河の郷土、桂新左衛門十五歳の侍太郎に扶けられて伊豆の温泉に行き、これも十四歳の侍茂之介と来てゐる下總の士、舟木逸平と阿蘭。二人の少年は侍旗から口論し及ぶに及ぶとする。逸平は茂之介の非を庇うて、我子を叱る新左衛門の態度に感心する。併し茂之介の怒は烈しく歸國の際、源太郎に決闘を敢り、後の山で斬殺した。父には深くこの事を秘したが、茂之介もその際の手傷のために歸郷の途に死亡する。一方新左衛門は我子の死骸の傍に落ちてゐた手拭によつて逸平親子の謀殺と思ひ、一家に歸り、侍太郎に兄の敵を討てと命じて病死した。岩次郎は十六歳となり、下總の下つて侍一方の身を寄せて、竹筒着たる娘小しゆんと契つて大望を語る。小しゆんは戀人が父を恨むことを知り、父に代つて殺される。岩次郎はこれを知つて切腹せんとしたが、逸平に止められて、始めて互ひに事の真相を知り、岩次郎は逸平の養子となつて富み家となる。
 【脚色】黄表紙従来の世界から来て、物語の世界に踏込んでゐる。本作の題材となつた源流傳説(源流島)は、源流傳説の源河は、「敵討」の接(源流)より、「源流無茶感當話」(源流)に至つて愈々明かになつてゐる。【史的地位】

は武右衛門の子でなく、源の源流で義理の侍である。○源流無茶感當話(享保二年、文覚上人の生立、渡邊の傳作、父へ夫に代つた繁盛の死。感當話、ころも川の出来、感當話の発行。越中立山に於て大観流治。文覚と改名。
 【敵討狂言】(仇討)を見よ。
 【敵討孝列傳】(仇討)を見よ。三巻
 【作者】手塚月見【名】三巻
 【脚色】(仇討)文化四年【脚色】永享年中、備前守田家の臣新井宗五郎は陸奥の源に、妻お律に浪人伊藤宅左衛門を迎へよと遺言した。お律は宅左衛門と結んで宗太郎を生んだ。然るに宅左衛門が墓に出て、狐を殺したのが禍ひし、日頃お律に構はせてゐた松坂源流の毒友に頼られたので、お律は宗太郎を連れ源流の館を逃げ、備中笠岡で武道の師範となつてゐる小島源流と知り、却つて返り討ちになる。かくて宗太郎は恨重なる事案を担ふ中、非人に身を棄ててゐた義人三木左衛門の助太刀を得て、目出たく父母の仇を報い、歸國して家督を継ぎ、宅左衛門は笠岡の領主に抱へられ、その娘を宗太郎に配はせて互に縁を結んだといふ筋。宅左衛門の死を狐の祟として事件を展開せしめてゐるが、動機を自さしただけの単純な展開で、大した破綻もない代りに興味も乏つて薄い。凡作である。
 【敵討三味線由來】(仇討)を見よ。草雙紙、黄表紙、三冊、十五丁十八開【作者】南無笑楚(村)鳥羽の源流傳説。
 【脚色】(仇討)文化四年【脚色】永享年中、備前守田家の臣新井宗五郎は陸奥の源に、妻お律に浪人伊藤宅左衛門を迎へよと遺言した。お律は宅左衛門と結んで宗太郎を生んだ。然るに宅左衛門が墓に出て、狐を殺したのが禍ひし、日頃お律に構はせてゐた松坂源流の毒友に頼られたので、お律は宗太郎を連れ源流の館を逃げ、備中笠岡で武道の師範となつてゐる小島源流と知り、却つて返り討ちになる。かくて宗太郎は恨重なる事案を担ふ中、非人に身を棄ててゐた義人三木左衛門の助太刀を得て、目出たく父母の仇を報い、歸國して家督を継ぎ、宅左衛門は笠岡の領主に抱へられ、その娘を宗太郎に配はせて互に縁を結んだといふ筋。宅左衛門の死を狐の祟として事件を展開せしめてゐるが、動機を自さしただけの単純な展開で、大した破綻もない代りに興味も乏つて薄い。凡作である。

八十丸は縁の下からこれを盗み開いて、思はず敵を殺す。石村に怪しまれたので、源流は江戸の邸に連れて行かれて源流と名付、三味線を東國へ傳へる。源流は愛澤右兵衛の息左衛門と戀に落ちたが、左衛門は父の怒に觸れて國元へ歸れ、源流は戀したあまの眼を泣きながら、乞食となり下つたが、全盛の折に目をかけた角田川村の船頭源流に救はれ、當時流行した三味線の師匠になる。某太守の邸に召された時、源流は源流の曲を弾するを聞き、これが手廻りとなつて、菊崎丹下が仇八十九である事が分る。太守の情によつて八十九は目隠しをして立合はさせられ、三味線守りの長谷観音の加護で、盲目の身ながら敵を討取り、兩眼も癒えたので、太守の一家の、戀人左衛門と結婚する。石村の後は三味線をよく作る柏屋の某に頼がれる。
 【脚色】作者は何の書にも據らず、好む道なれば聞き覚えたあまの眼を泣きながら、乞食となり下つたが、全盛の折に目をかけた角田川村の船頭源流に救はれ、當時流行した三味線の師匠になる。某太守の邸に召された時、源流は源流の曲を弾するを聞き、これが手廻りとなつて、菊崎丹下が仇八十九である事が分る。太守の情によつて八十九は目隠しをして立合はさせられ、三味線守りの長谷観音の加護で、盲目の身ながら敵を討取り、兩眼も癒えたので、太守の一家の、戀人左衛門と結婚する。石村の後は三味線をよく作る柏屋の某に頼がれる。
 【脚色】作者は何の書にも據らず、好む道なれば聞き覚えたあまの眼を泣きながら、乞食となり下つたが、全盛の折に目をかけた角田川村の船頭源流に救はれ、當時流行した三味線の師匠になる。某太守の邸に召された時、源流は源流の曲を弾するを聞き、これが手廻りとなつて、菊崎丹下が仇八十九である事が分る。太守の情によつて八十九は目隠しをして立合はさせられ、三味線守りの長谷観音の加護で、盲目の身ながら敵を討取り、兩眼も癒えたので、太守の一家の、戀人左衛門と結婚する。石村の後は三味線をよく作る柏屋の某に頼がれる。

【脚色】源河の郷土、桂新左衛門十五歳の侍太郎に扶けられて伊豆の温泉に行き、これも十四歳の侍茂之介と来てゐる下總の士、舟木逸平と阿蘭。二人の少年は侍旗から口論し及ぶに及ぶとする。逸平は茂之介の非を庇うて、我子を叱る新左衛門の態度に感心する。併し茂之介の怒は烈しく歸國の際、源太郎に決闘を敢り、後の山で斬殺した。父には深くこの事を秘したが、茂之介もその際の手傷のために歸郷の途に死亡する。一方新左衛門は我子の死骸の傍に落ちてゐた手拭によつて逸平親子の謀殺と思ひ、一家に歸り、侍太郎に兄の敵を討てと命じて病死した。岩次郎は十六歳となり、下總の下つて侍一方の身を寄せて、竹筒着たる娘小しゆんと契つて大望を語る。小しゆんは戀人が父を恨むことを知り、父に代つて殺される。岩次郎はこれを知つて切腹せんとしたが、逸平に止められて、始めて互ひに事の真相を知り、岩次郎は逸平の養子となつて富み家となる。
 【脚色】黄表紙従来の世界から来て、物語の世界に踏込んでゐる。本作の題材となつた源流傳説(源流島)は、源流傳説の源河は、「敵討」の接(源流)より、「源流無茶感當話」(源流)に至つて愈々明かになつてゐる。【史的地位】

【脚色】源河の郷土、桂新左衛門十五歳の侍太郎に扶けられて伊豆の温泉に行き、これも十四歳の侍茂之介と来てゐる下總の士、舟木逸平と阿蘭。二人の少年は侍旗から口論し及ぶに及ぶとする。逸平は茂之介の非を庇うて、我子を叱る新左衛門の態度に感心する。併し茂之介の怒は烈しく歸國の際、源太郎に決闘を敢り、後の山で斬殺した。父には深くこの事を秘したが、茂之介もその際の手傷のために歸郷の途に死亡する。一方新左衛門は我子の死骸の傍に落ちてゐた手拭によつて逸平親子の謀殺と思ひ、一家に歸り、侍太郎に兄の敵を討てと命じて病死した。岩次郎は十六歳となり、下總の下つて侍一方の身を寄せて、竹筒着たる娘小しゆんと契つて大望を語る。小しゆんは戀人が父を恨むことを知り、父に代つて殺される。岩次郎はこれを知つて切腹せんとしたが、逸平に止められて、始めて互ひに事の真相を知り、岩次郎は逸平の養子となつて富み家となる。
 【脚色】黄表紙従来の世界から来て、物語の世界に踏込んでゐる。本作の題材となつた源流傳説(源流島)は、源流傳説の源河は、「敵討」の接(源流)より、「源流無茶感當話」(源流)に至つて愈々明かになつてゐる。【史的地位】